
東方仮面舞踏会

牧野司郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方仮面舞踏会

【Nコード】

N1368L

【作者名】

牧野司郎

【あらすじ】

もしも、神崎士郎が世界を再生する時に何かの理由で、全く別の世界を構築してしまったら

そんな想像から生まれた【仮面ライダー龍騎】と私の趣味とのクロスオーバー作品です。城戸真司、仮面ライダー龍騎は最低のFクラスへ。さらに、神崎に飽きたから、という理由で生贄にささげられ、人々の記憶から抹消される、人々から忘れられた存在が行き着く場所、

そこでは…戦わなくては生き残れない！

もしも原作と違う部分などがありましたら感想に書いてください、
即座に修正します

バカテス編 プロローグ 世界構築方針変更（前書き）

何卒宜しくお願いします…

バカテス編 プロローグ 世界構築方針変更

「城戸、戦死、秋山、衰弱死、北岡、病死、浅倉、戦死、東條、事故死…何と言う結果だ…今までで最悪じゃないか？そう思うだろ、優衣」

何も見えないような暗い世界で妹である優衣に話しかける

「はあ…お兄ちゃんはさ、それよりもっと、まともな方法を考えられないかなあ？私はこまでくれば何とも思わないけど、戦いの途中は結構辛いんだよ？」

「仕方がないだろう、お前を救う為だ…というかそれより、さっきから何を読んでいるんだ？」

そついいながら俺は優衣の呼んでいる本を確認する

「え？ラノベだけど？」

ラノベ、確かライトノベルの事だったか…

「バカとテストと召喚獣…？俺は余りこういうのは好みじゃないな

…」

「ふうん…面白いのに…一巻、貸してあげようか？打開策が見つかるかもよ？」

結局その後、俺は結局読んだ訳だが――

結論から言おう、気付いたら世界がまるで違う風に構築されていた…

バカテス編 1 文月学園！？（前書き）

どうして始めたのか分かりません、あの時は気が動転してて…
恐らく、未来の僕はこう言う筈です…

バカテス編1 文月学園！？

チュンチュン、チュンチュンと小鳥の鳴き声が聞こえる…

朦朧としていた意識がはつきりとしてくる…

とりあえず目を開けてみる、そこには青空、一面の青空

「…空が青いな…」

…ん？何かおかしくないか…？

「つて…ええ！？待て、落ち着け、落ち着くんだ、俺…状況を把握しよう…」

辺りを見回してみる…そこにいたのは…まるで高校の制服のような物を着た

蓮、北岡、浅倉、東條…そして良く見れば、俺も同じような服を着ている

「お、俺は…モンスターに襲われて、背中を刺されて、それで…」

必死に状況を理解しようとする俺に、後ろから声がかかる

「死んだ」

咄嗟に振り向く、そこには…かんぱきしつ神崎士郎の姿

「あんた！ちよつと説明しろよ！これどういうことだよ！」

思わず問い詰めるが、神崎はバツが悪そうな顔で

「…すまない…ラノベに感化されてこうなった…」

は？ラノベ？ライトノベル？

「バカとテストと召喚獣…恐ろしい本だ…」

バカテス？確かに面白い本だけど…納得いかないぞ

「待てよ！もう少し詳しく説明をしてもらいたいね！俺は！」

思わず声を上げてしまう、すると他の四人が起きる…

「戦いが終わった後、俺は結果が気に入らなければタイムベントを使って時間を逆戻りさせて、世界を構築し直すのだが…」

だが？

「バカとテストと召喚獣…バカテスに感化されて世界の構築を間違

った…いや故意だが」

間違ったっていわないぞそれ！？

「その結果…」

待てよ、良く見れば、着ている制服、バカテスの文月学園の物にそっくりだ…

「正直すまなかった、反省はしているが、後悔はしていない」

「棒読みでそんな事を言われても説得力がないな…」

蓮が呆れたように言う

「本当だね…というより俺の病気はどうなっちゃった訳？」

「それについては、まあ、謝罪を込めて直しておいた」

最初からそうしろよ！？

「へえ…本の中に入っちゃうのか…英雄みたいだね…」

東條、その考えは間違ってると思うぜ…

「おい、お前等…この草、食えるんだぜ…」

あ、浅倉！？どうしちゃったんだよ！

「ちなみに浅倉は性格を少し弄った」

弄るくらいなら出すなよ！？

「ちなみに、蓮、お前は金持ちにしておいた、謝罪も込めてな」

「ほう…」

おい、蓮が笑ったぞ、こいつ、金の亡者なのか！？

「東條、お前には瞬間的に物事を覚えられる才能を加えておいた、謝罪も込めてな」

「英雄みたいな能力だね…」

何でも英雄にすればいいって物じゃないと思うけどな！？

「で、俺は？」

もちろん、この三人に謝罪も込めて、何かあったわけだし、俺にもあるはずだ

「はあ？」

はあ？って言われたよ！なんだよコイツ！っていうか良く見ればこの人選なんだよ！？

「おい、城戸、俺を殴れ…！」

浅倉が何か言ってる！？どうなっちまったんだ！？

「浅倉はワイルドでサバイバルに強いドMになった…」

神崎からドMという言葉を聞くとは思わなかったよ！俺は！

「ははっ、面白い趣味してるじゃない…神崎」

北岡！？褒める所じゃない！それ！

「そろそろ説明に移らせてもらうぞ、お前たち、バカテスについて知っているか？」

「まあ、俺はボチボチ読んでるぜ？面白いし…」

「俺は全く興味が無いからな、知識は皆無だ」

蓮は読みそうにもないよな…性格からして…金もつたいない、とか言いそう

「俺も趣味ぐらいでしか読んでないから、そんなには詳しくないね」
あ、北岡は読んでるんだ…

「同級生が『読めば英雄になれるよwww』ってメールしてきたから全巻三日で読んだよ」

東條、お前騙されてるぞ、本当…って三日！？速読すぎるだろ！

「ああ…俺は島田美波に関節技を決めてもらいたいな…」

浅倉は重症だ！誰か助けてやってくれ！

「成る程…じゃあ説明は省こう…お前等は文月学園に転校してきた学生という事になる」

「ただだよ！？」

「成る程ね…神崎、それで、お前に何の利益がある訳？」

「楽しい」

「なんだか、神崎のイメージが崩れていく…人をここまで変えるとは…恐るべし、ラノベ」

「高校だよな？僕達の年齢的に、僕意外無理じゃないかな…？」

待てよ！お前も大学生だろ！無理があるぞ！

「安心しろ、年齢を弄るなんて容易い事だ」

「そつえば、良く見れば、全員若返ってるような…」

「本当だ…最近腰が痛くて困ってたんだよね…あーヤダヤダ」

三十で腰が痛くなる物なのか！？時間って怖いな…

「で、後三十分後に振り分けテストだ」

いきなりだな、おい！三日後とかにしるよ！勉強全然してないよ！

「成る程、それでバカな城戸は無残にもFクラスに落ちる訳か…」

「おい、この野郎！バカって言うな！バカって言った奴がバカなんだよ！って、お前、今Fクラスって——」

「何の事だか分からないな」

こいつ絶対知ってる！隠してるだけだ！

「ちなみに、ここから文月学園まで25分だ」

バカじゃないか！？神崎はどれだけ感化されたんだ！？というより元々こういう性格なのか！？

「走るぞ、北岡、東條、このままだとバカ二匹と同じようにFクラスになる…」

バカって言ったよコイツ！二度も！

「おい城戸、俺達も走るぞ、バカと言われるのも気分がいいが、島田に早く間接技を決めてもらいたいからな…」

性格酷くなりすぎだ！お前！

「そして時に城戸、俺は殴るか殴られてないと気がすまないんだ、別に攻めもできる」

聞いてねえよ！？

「ああーもう！とにかく走るぞ！」

■

全速力で走って、ギリギリで到着し、振り分け試験をする事になった…

偶然にも五人とも同室だった…

で、最初の五分はマジメに試験をやっていたんだが…悲惨な結果に終わることになる…

それは東條の一言からだ…

「そつえば…神崎が『Fクラスに入れば英雄になれる』って言う

てたっけ…」

東條、お前、英雄になれる、って言われれば何でも信じるのか！？
そしてこの東條は、先程からかなりのスピードで問題を解いていた、
Aクラス余裕だったのに…

「先生、ごめんなさい、英雄になりたいので…動き回ります」
どうしてそうなったんだろうな！？

「君は何を言っているんですか？席を立った場合、失格として、無
得点と——」

次の瞬間、東條は窓を開けて

「そういえば同級生がメールしてきたっけ…『空を見て詩を詠えば
英雄になれるよwww』って…」

神崎は東條の性格も弄ったんじゃないか！？

「良く考えれば…島田はFクラスだな…」

あれ？浅倉…？実はこの浅倉、天才とも言つべきか、勉強は恐らく
全くしていないのに、さっきから問題をスラスラ解いていた…のに
「ちょ、ちよつと君！席を立つたら無得点——」

次には東條に並び、空を見ていた

「なあ、一緒に詩を…考えないか？」

「いいよ、キミも一緒に英雄になろう…」

妙なコンビが出来上がった！？

「ハッ！？木下はFクラス…ならば…（超小声）」

蓮、もう隠すなよ、お前、バカテスのファンだろ

「うぐあっ！？は…腹が…！？先生盲腸かもしれません…！早く病
院に行かないと…」

「せ、席を立った場合、無得点ですけ——」

「いいから早く病院に行かせろ！」

蓮が一番バカなんじゃないか？とか思った俺だけど…それなりに問
題は解けていた、Cクラスぐらいなら入れるんじゃないかな？蓮は
凄く速さで解いたから、頭はいいんだろうな

「あーあ…なんか飽きちゃった、良く考えたらFクラスが一番楽し

そうだし……」

「君まで……！無得点——」

「お前たちさあ、空を見て詩なんか考えてないで、俺を見て考えなよ？」

蓮と同じ位の速度で問題を解いていた北岡までもが席を立つ

ああ！もう！分かった分かった分かりました！いいですよもう！

「先生！すみません！」

俺は——

勢い良く立つて——

三人にツツコミを入れに行った——（蓮は今頃保健室で別の病名を言っただけだ）

……とまあ、こういうことがあり、全員無得点でFクラス、ちなみに先生は泣いていた

こうして、俺、蓮、北岡、東條、浅倉は、

最低のFクラスに加え、

バカの代名詞、観察処分者の称号を獲得したのであった……

バカテス編1 文月学園!?(後書き)

これは、酷い

バカテス編2 バカ(城戸真司)・ゴ・ホーム

結局その後、俺達五人は帰路に付いたって事だ

「ところで、俺達の家はどうなっちゃてるわけ？」

「そつえばそつだな…」

北岡と蓮がそんな事を言う、まあ、北岡はどうでも良さそうだったけどな…

「それならば安心しろ」

また突然後ろから声がする、神崎か

「これを受け取れ、家までの地図だ」

ヒュン、という音と共に紙切れ飛んできた紙切れを、東條が掴む

「神崎、待てよ、紙が後四枚足りないんだけど？」

北岡が怪訝そうな顔をして言う、確かに

「は？大きな屋敷を用意したから、五人で住め」

はあ！？

いや、待てよ！凄い危ないぞ！それ！

「おいおい、俺にこんなコイツ達と住めっていうの？悪いけど俺はゴメンだね」

またもや北岡、俺だつて嫌だよ！

「俺も、北岡と同意見だな…」

蓮がそんな事を言う

「そつえば、同級生が『一つ屋根のしたで四人と寝ればお前は英雄だよwww』って言うってたっけ…」

東條、騙されてる上に解釈の仕方が間違ってるぞ！？

「俺は寝ればそれでいいけどな」

浅倉、お前、平地があれば大丈夫だろ！

「そつは言つてもな…お前達は分けさせると、絶対掃除とかしないだろう…特に北岡」

そつえばそつだな…という事は…まさか…！？

「ほう…つまりそれは、コイツを使いまわせて事かな」

北岡、何言ってんだ、違うに

「その通りだ」

「違わなかった！」

「待てよ！俺は断固拒否だ！絶対ゴメンだね！」

「過労死する…！」

「俺は賛成だ」

「僕もだ」

「俺は寝れる場所と島田のポスターがあればいい」

「さつきより酷くなってるぞ！浅倉！っていうか全員賛成かよ！」
嫌だ！絶対嫌だ！

「お前に拒否権はない」

そついうと、神崎の後ろには

それはもう、様々なミラーワールドのモンスター達が各々のうめき
声を上げて威嚇している

「ひ、卑怯だあー！」

本当に卑怯だ！

「城戸、『卑怯汚いは敗者の戯言』ってな」

蓮！お前もう隠す気無いだろ！

■

という事があつた訳だが、まあ、別にいいんじゃないか…？
って良くねえよ！何納得してんだ俺！

ちなみに、俺達が付いた家は、西洋風の新しい屋敷だった…

これを一人で管理！？ふざけんな！

「へえ…英雄が住みそうな家だね…」

お前、英雄だつて言えば何でもいいのか考えてるな！

「おい、島田のポスターがねえぞ！」

買って来いよ！あ、売ってないか

「ムツツリー二にでもお願いすれば？」

北岡が言うと、凄い違和感があるな、ムツツリー二って

「まあ、頑張つてよ、ゴローちゃんを越せるようにさ」

ゴローちゃんを越すのは無理だ！あんな完璧な人間見たことねえよ！

「ま、城戸、頑張れよ」

蓮、お前から応援を受け取ると、無償に腹が立つ、特にその馬鹿にしたような顔！

くそう…納得いかないぞ…否、納得する物か！

「お前等！自分の部屋ぐらいいは自分で管理しろよな！」

こうして、俺の働き続ける日々が始まった…

バカテス編3 Fクラス…（前書き）

【第一問】

問 以下の問いに答えなさい

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの変わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

秋山蓮の答え

『問題点…

マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であると言う点

合金の例…

ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、秋山君は引っかかりませんでしたね、君には期待しています

北岡秀一の答え

『問題点…

製作者が馬鹿だった事

合金の例…

ジュラルミン』

教師のコメント

確かに間違っではいせんが…

東條悟の答え

『問題点…

マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険で
あると言う点

合金の例…

ジュラルミン

追記…

僕は英雄になるために、その鍋で調理します』

教師のコメント

勇気と無謀は違いますよ

バカテス編3 Fクラス…

早朝、俺は五人分の朝食を作る事になる…いや、普通にパンとかならいいんだけどな…

北岡が、せめて上手いスパゲッティとか言い出す始末だ…ああ、本当に過労死しそう…

それに、五人分の弁当も作るんだろ？これを毎日か…本気で死ぬかも…

まあ、愚痴っても仕方ないし、やりますか！

■

只今、Fクラスへ向かっている所だ…いや、Fクラスの設備の酷さは知っているから大丈夫…

とか思いながらもやっぱり不安…何たって、自分が経験するのと、人が経験するのを見るのは違う…

特に北岡とか文句言いまくりだろうな…はあ…
というわけでたどり着いたFクラス

まさに…原作通りの酷さだ…

「うわあ…覚悟してたけどこれは…」

思わず独り言…

「あーヤダヤダ、さつさと勝って設備交換したいねえ…」

あれ？割と大人しいなあ…

「島田ア！島田は何処だア！？」

いや、教室まだ誰も居ないし…まあ、このクラスに入るって事は全員遅刻ギリギリに来るんだろ…

「へえ…ここで過ごせば英雄になれるのか…」

東條、それは英雄だ

そういえば蓮が何も言わないな…どうしたんだろ…？

「……木下が居ない…（超小声）」

木下が好きなのか、そうかそうか、もう駄目だ、コイツ

■ 結局本当に全員遅刻ギリギリで来たよ…

しかも吉井明久よしあきひさは本当にギリギリで来た…

流星群を抜くバ…おっと、危ない危ない、馬鹿って結構傷つく言葉だからな…

結局その後、本当に原作通りに事が運び、担任は福原慎先生ふくはらしんになった…

俺達が居るからって、物語が変わったりしないんだ…

とか考えてる内に自己紹介が始まる…廊下側からだっけかな？確か

最初は木下秀吉きのしたひでよしだったは——

「東條悟あずまごです、ねえ、このクラスで一年間勉強すれば英雄になれるって本当…？

ちなみに一応転校生なんだ」

東條だった！っていうか英雄になれないよ！どう考えても！

じゃあ、二番目が秀吉か…

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる」

いやーこういう声してるのか…なんか感動…ってか神崎これどうやって再現してるの！？

『アニメ版からの引用だ』

窓に神崎が映る、ってラノベじゃねえ！コイツ、バカテスに感化されたただけだ！

「——と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

何時も気になるんだけど、ここ何て言ってるんだ？神崎に邪魔されて聞こえなかった…

次はムツツリーニだっけか、本名はえっと…忘れた…

「秋山蓮あきやまれんだ、秀吉結婚してく——違う、一年間よろしく頼む

東條と同じく転校生だ」

お前、その違う、は火葬後の心臓マッサージぐらい意味無いぞ…

「……………土屋康太つちやん」

あ、土屋康太か、ムツツリーニの本名は…

とか色々考えてる内に次の人、いやいや、大変だな、この自己紹介
「——です。海外育ちで、日本語は会話できるけど読み書きが苦
手です」

この特徴からして島田美波しまだみなみだろう…スレンダー美人ツンデレ少女
そして…

「胸は相変わらず絶壁だよな…」

おっと口が滑った、故意でやった訳じゃない！

掠れるような声だったから聞こえなかったはず

「窓側から二列目の三番目の席の奴、後で小指から順番に骨を全部
折るわ」

聞こえてたのかよ！地獄耳め！っていうか特定された！？

「あ、でも、英語も少し苦手です。育ちはドイツだったので。趣味
は——」

吉井明久を殴ることだろ？

「吉井明久と窓側から二列目の三番目の席の奴を殴ることです」
組み込まれた！？

「城戸オオオ！？裏切るのかアア！！？」

「あ、浅倉落ち着け！不慮の事故だつて！」

浅倉が怖い、今までで一番怖い、っていうか次浅倉の番かよ！

「浅倉威あさくらたいけしだあ…！島田ア！こんな奴より俺を殴れ！むしろ半殺しに
しろ！」

ちなみに俺も転校生だあ…！城戸オ！城戸オ！」

誰か、昔の浅倉を帰してエエーッ！？

凄い勢いで肩を揺さぶってくる

「——します。」

浅倉に揺さぶられてるせいで、良く聞こえない、が、まあ、明久だ
ろうなって、おい！いつまで揺さぶってんだよ！

「ちよ、浅倉、いい加減や【ゴキリッ】ハマアッ！？」

何かが外れる音がした

と言う事で、自己紹介が終わった訳だ…本当の事を言つと、気を失

いました、すみません

余りにも浅倉が速く肩を揺らすから…

ちなみに目が覚めたら、教室に俺と、他の四人しか居なかった…

「正直すまなかった、反省もしていないし、後悔もしていない」

すまなかったって思っていないよね！

「で、Dクラス戦の作戦は？」

取りあえず疑問点の解消優先

「ああ、それならね、原作通りで、俺達は観戦さ、回復試験受けてね」

成る程…

「じゃあ、あれなんだな、出番はBクラス戦からか…」

うーん、練習したい気もするけどなあ…

「祭りが楽しみだなあ…ハッハハハハ！」

割とハイな浅倉

という事があつた訳であつて、俺は帰った後の仕事の多さに絶望しながら、帰路に着いたのであつた…

バカテス編 4 戦わなければ生き残れない！（前書き）

【第二問】

問 以下の英文を訳しなさい

「This is the bookshelf that may
grandmother had used regularly」

秋山蓮の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね

浅倉威の答え

「これはそうするかもしれない本棚です。祖母は常用しました。」

教師のコメント

あなたは何処かの翻訳サイトですか。

北岡秀一

「この問題は俺に祖母との面識が無い事から不適切だと考えられる」

教師のコメント

学校に家庭内事情を持ち込まないでください…

バカテス編 4 戦わなければ生き残れない！

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った短い髪の毛が立っていてまるでたてがみのように見える男。

さかもとゆうじ

坂本雄二が机に手を置いて言う、いやー召喚戦争、楽しみだな

ライダーバトルは本当に命がけだったから止めようとしたけれど、此方はどっちかと言うと

運動会とかに近い感じだからな、絶対負けたくないね

キンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルの音が鳴り響く、さて、やりますか！

ちなみに作戦は、俺達五人組は、それぞれ五人ずつ部下を持って行動する事になった

「っしやあ！お前等行くぞ！」

『うおおー！』

ノリがいいクラスだな、本当に

作戦は原作通りだ、しかし…本当に原作通り事が進むのかなあ？

「いたぞ、Fクラスだ！」

向こう側からBクラスと思われる生徒が歩いてくる、その数、およ

そ十人

サモン

『試獣召喚！』

喚声に応えて魔方陣が展開、俺のはどんな物なのか…？

試験召喚獣を見た途端、驚きで言葉を失ってしまった

俺の試験召喚獣の姿は…

以前俺がライダーとして戦っていたときの姿、龍騎だった…

頭は普通だったけど、というかそれより、武器持ってないよ！せめて剣ぐらい欲しかった！

『Bクラス 野中長男 VS Fクラス 城戸真司
数学 230点 VS 507点』

ってあれ？Bクラスってこんなに点数低いのか？じゃあ俺もAクラスに行けたのかもしれないかったのか！

うわあ！凄い後悔！

「ば、馬鹿な！？Aクラス並の人間は姫路瑞希だけだったんじゃないのか！？」

「すまん、前回の戦争で俺出てないんだ、本当にすまん」

なんとなく謝ってしまう、ってか、こいつ、武器持っていないよ！どうすれば！？

『ライダーバトルを思い出せ、それがヒントだ』

窓に映る神崎、ライダーバトル？もしかして…！

「やってみるしかねえ！『ソードベント！』」

とりあえず叫んでみる、これで出来なかったら恥ずかしすぎる！

だが、別にそんなことは無く、手に剣が現れる、龍騎でソードベントを使った物と全く同じ物が

これなら、行けるだろう

「『ファイナルベント！』」

Bクラスの生徒は啞然としている

俺の召喚獣はジャンプをし、ある程度の高さまで来ると、何処からか、かなり小さくなった

以前、俺が契約していたモンスター、無双龍ドラグレッターが現れ、召喚獣に炎を浴びせる

そしてその勢いでBクラスに向かって蹴りを放つ

まさに、俺が以前使っていたファイナルベントだ、他から見るとこんな風だったんだ…

そして、敵の召喚獣にぶつかった瞬間、大きな爆発が起きる…っておい！

俺観察処分者じゃん！これ人死ぬだろ！？

『安心しろ、お前達のは若干弄ってある、痛みのフィールドバックはするが、他人を傷つける事だけは出来ない、お前達が観察処分者になるのは想定外だったかな…』

だろうな

まあ、とにかく、Bクラス十人を一撃で撃破した訳だし…知名度はそれなりに上がるか…

『さすがは城戸隊長！俺達に出来ない事を平然とやってみせる！そこに痺れる！憧れるウ！』
憧れられたよ！

北岡Side

「北岡隊長…何でここから動かないんですか？」

部下の一人が聞いてくる

「良く考えてみなよ、相手の代表はあの根本だよ？この教室に妨害をしないわけが無い」

まあ、原作の知識だけだね、とか言ってる間に来たよ、妨害しに来たBクラスの生徒

人数は三人ぐらいかな

「なっ！？まあいい！相手はFクラスだ！」

全く…

『サモン…
試獣召喚！』

「はいはい、試獣^{サモン}召喚つと」

そうして出てくる俺の召喚獣、容姿は俺が以前変身していたゾルダに酷似していた

右手にマグナバイザー持つてるし…ま、頭だけは普通だったけど

『Fクラス 北岡秀一』

科学

568点『

「馬鹿な！？Aクラス並だと！？」

「当たり前だよ、俺を誰だと思ってんの？」

『クロをシロに変えてしまう、スーパー弁護士、北岡秀一』だよ？」

まあ、知らないだろうけどね

唖然としているBクラスメンバーを打ち抜く、右手のマグナバイザーでね

ま、これで妨害は防げた訳だし

「そろそろ、行こうか」

そして俺は歩き出す、戦場へと、懐かしいねえ、この感覚

浅倉Side

さて、今の戦況は正に祭りだな…

部下五人は死に、俺は十人のBクラスの奴に囲まれている

まだ、召喚はしていない…行くか

「ッハッハハハハハア！」
試^{サモン}獣召喚！」

俺の召喚獣が出てくる、それは、以前俺が変身した顔だけ普通の王蛇だった

ちなみに右手にベノサーベルを持っている

『Fクラス 浅倉威』

英語W 608点』

『馬鹿な！？なんて点数だ！？こいつは化け物か！？』

『れ、れ、れ、冷静になれ！この人数でやれば勝てるはずだ！』

俺は右手の剣を、目の前に居る一人に振るわせる、すると相手は防御してきたが…

「硫酸だあ！」

右手の武器が、相手の武器に当たった瞬間、武器が溶け落ち、勢いを全く殺さず、相手を切り捨てる

『貴様！何をした！？』

「腕輪の能力だ、俺の武器に付属する毒を自由に変えられるという

能力をなあ！！」

『く、くそう！うわあああ！』

二人が切りかかってくる、挟み撃ちのように

「麻痺毒だあ！」

そういつて、来た奴を切り捨てる、ダメージはそんなこと無かったが、毒を受けた一人は動けない

『う、嘘だろ！動かねえよお！』

倒れてる奴の頭を掴み、もう一人の召喚獣に投げる

すると、その二人は重なるように倒れ、身動きが取れなくなった

「硫酸だあ！」

もう一度右手に硫酸の効果を付属させ、倒れている二人に止めを刺す
後、七人

『ば、化け物めえ！』

「猛毒だ、詳しい効果は、手足を麻痺させ、じっくり体を蝕む奴だ
！」

そしてその場で七人を切り捨てる、切り捨てられた召喚獣達は猛毒で苦しみ、動けなくなる

「さて、次に行くか！ッハッハハハハハ！」

久しぶりに楽しいなあ！

東條Side

僕は今、Bクラスを作戰通り、教室に押し込めている所だ

『東條、お前には、英雄の覚悟が、あるんじゃないか？』

そうか…そうだね…ここは雄二君の作戰を犠牲にして…Fクラスを救う！

『ちよっ！？東條隊長！？何を！？』

「英雄に…なるんだ」

思いつきドアを開ける中には根本君と近衛部隊が居た

『試獸召喚^{サモン}』

僕がそういうと、足元に幾何学的な模様が浮かび上がり、僕の試験召喚獣が召喚される

相手側は余りにも突拍子の無い行為だったので驚いているようだが、僕には関係ないね…

『Fクラス 東條悟

物理 668点』

「化け物じみてやがる！おい！包囲して一斉に叩け！」

僕の召喚獣は、両手にデストクローを装備した、頭だけ普通のタイガだ

「君を倒せば英雄になれるって本当？」

「知るかよ！」

とりあえず、向かってきた人達に能力を使う

そうすると、次の瞬間、近衛部隊が結晶化する

『な、何だよこれ！？』

動かなくなった近衛部隊全員が驚いている

僕は、召喚獣に近衛部隊をそれぞれ襲わせて、一人一人、打ち砕く

「ば、馬鹿な…俺の近衛部隊が殲滅されただ…！？たった三秒で！？」

根本君がそんな事を言っている

一步一步、確実に近づいていく、そのたび、根本が後ろに一步一步が、そして追い詰めた

「君を、倒して、僕は、君の、ために、泣けるよ、君は、僕を、英雄に、してくれた、大事な、人、だから…」

涙が零れ落ちる、ありがとう、根本君

僕の召喚獣は根本の召喚獣をデストクローで引きずり回し、そして壁に頭を何度も打ち付けさせ、そのままデストクローを突き立てて持ち上げ、結晶爆発させる、一人でクリスタルブレイクを再現してみたよ

「ふう…雄二君に連絡しなくちゃね、誰が行ってよ」

その後僕が、英雄として称えられたのは、言うまでも無い…

バカテス編4 戦わなければ生き残れない！（後書き）

城戸真司

元々努力家で、勉強はそれなりにしていたから、勉強自体はできる
腕輪の能力は、自分の武器を変更する事ができるという物
正確には、自分が以前使ったカードの再現

北岡秀一

元々の頭の良さで、かなりの学力、戦略を考えたりする部分に長ける、

彼に最も合う言葉は『知将』

腕輪の能力は不明

浅倉威

少年期に家族を焼死させ、その後浮浪者のような生活を送っていた
為、全く

勉強をしているはずが無いのだが、問題を見れば、その答えが一瞬
で頭に浮かぶ

いわば、真の天才だろう

腕輪の能力は、本人が言ったとおり、

自身の武器に付属する毒を変更する、という物

東條悟

元々、かなりの学力があったが、神崎によって、瞬間記憶能力を持
ったため、

ありえない程の学力をほこる、しかし、文章問題に追記で

英雄く、英雄だから、などと付け加えるせいで、減点される事が
多い

腕輪の能力は、目視した試験召喚獣の結晶化、

一見すると、無敵の能力だが、結晶化した相手は、東條の攻撃意外では破壊できない、というリスクもある

バカテス編5 鏡の世界の始まり（前書き）

問 以下の問いに答えなさい

『女性は（ ）を迎える事で第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

秋山蓮の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

東條悟の答え

『英雄としての覚悟』

教師のコメント

日本人は条件を満たさなければ成長しないのですか。

浅倉威の答え

『男との熱い夜』

教師のコメント

犯罪です。

バカテス編 5 鏡の世界の始まり

現状整理、いや、別に俺はする必要は無いと思うんだけど、神崎が『読者が分かり辛くて混乱するだろう』

とか意味の分からない事を言ってきたので一応…

俺は城戸真司、以前ミラーワールドでの戦いを止めるために、無双龍ドラグレッターっていうミラーモンスターと契約して…っとミラーワールドっていうのは、簡単に言えば鏡に映った世界だ、ミラーモンスターってのはその鏡の中に住んでいる怪物、俺達は、そのミラーモンスターと契約して、仮面ライダーってのになって、鏡の中で、自分の願いのために戦ってた訳だ、俺は間違ってると思うけどな…

で、話を戻すと、俺は結局、戦いの途中で襲われていた子供を庇って死んだ訳なんだけど…神崎士郎って奴が、戦いの結果が気に入らないと、時間を戻して、世界を構築し直して、再び戦いを始めるんだけど、その際にライトノベル、『バカとテストと召喚獣』ってのに感化されて、世界が、バカテスの世界になったらしい…

っていうかあれだよな、説明口調で物事を考えると凄く気持ち悪い…まるで誰かに読まれてる気分だ…

つと、まあ、現状整理はこれくらいで十分か？

『待て、城戸、お前の説明だけで終わるんじゃない』

あ、今、俺の目の前に鏡に映ってるのが神崎な

『他の奴等の説明も頼む』

だから誰に説明するんだよ…まあいいか

秋山蓮、こいつは兎に角ケチで、金の事になると、絶対意志を曲げない男だ、頭はそれなりに良いんだと思う、あ、後最近発覚したことでだと、バカテスの登場人物の、木下秀吉っていう人の狂信的なファンだ、まあ、秀吉については後で話すとして…

北岡秀一、『クロをシロに変えてしまおうスーパー弁護士』、コイツ

も、わがままでさあ…まあ、別にいいんだけどね…

東條悟、コイツは性格がおかしい、前後に英雄になれる、って付いてればなんでも信じる、そして行動に移す恐ろしい男だ…

浅倉威、凶悪犯、なんせ、さつき説明した北岡でさえ、無罪にできなかった程だ、まあ、死刑から、懲役…何年だっけかな？かなり罪を軽くできたようだけど、無罪にはできなかった、前にあった時は、本当に凶悪だったんだけど…今じゃ性格を捻じ曲げられて、タダのネタキャラに成り下がった…

ふう…これで終わりかな…

『まあ、いいだろう、バカテス側については…ウィキペディアでも見てもらおうか…』

だから誰に言ってるんだよ！

■

なんて事があつたんだよ、朝

あ、ちなみにAクラス戦では、原作通りに雄二が負けて、ゴザとミカン箱ENDになった

手を出さなかった理由は、北岡が

『坂本と霧島の絡みが面白いんだろ？分かってないなあ』

とかいったからだ…

次の目標どうするかなー、主格メンバーと仲良くなってみるかな…

「なあ、蓮」

隣を歩いてる蓮に話しかける、あ、今登校中な

「話しかけるな、バカがうつる」

何て事を言いやる…

「まあ、聞けよ、とりあえず主格メンバーと仲良くなりたいと思うんだ…」

「は？お前は何を言ってるんだ？主格メンバーというと、吉井、坂本、島田、姫路、木賛成だ」

キノサンセン？鬼の参戦？オニ？あ、違うか、秀吉が主格メンバーだと気付いて賛成した訳ね…

「城戸、俺も賛成だなあ…島田の俺への好感度は、ときメモで言えば、爆弾背負ってる」

お前からそのゲームの名前が出るとは思わなかった！

「いや…島田だからリトルボーイ背負ってるな…」

核爆弾！？滅ぼす気か！？

「うん、俺も賛成、今のままじゃちよつとつまらないね…」

北岡も賛成か、珍しいな

「僕はどうでもいいかなあー」

珍しく東條反対

「おい、東條、俺と木下を仲良くさせれば英雄になれるぞ」

「無論賛成だよ、城戸君」

じゃなかったか

「じゃあ、どうすればいいか分かるか？」

とりあえず意見収集

「つり橋効果、を狙うのが一番かな」

北岡がそんな事を言う

つり橋効果？何だっけ…

「ああ、あれだな…つり橋に一緒に立つと無性に相手を落したくなる心理的效果…」

恐らくお前だけだ！それ！

「はあ…本当は、一緒に窮地に立つと、人間、通常の何倍ものスピードで相手を信頼する…とかそんな物だったかな」

成る程成る程

「で、どうやって、その効果を受け付けれるんだ？」

蓮がそんな事を聞く、そうだよなあ…どうすればいいんだ？

『心配は無用だ、俺が手伝おう…』

あ、神崎…何処から出てきてんだ？今日は…あ、水溜りか

『最高のイベントを発生させてやる…待ってる…』

どんなイベントか…心配だな…っていうか怖い！

■

という事もあり、放課後…何も無いな…

ん？今の現状説明、Fクラスにて、主格五人（明久、雄二、姫路、島田、秀吉）+俺等（俺、蓮、北岡、浅倉、東條）丁度いい具合だな…で、窓には神崎…と後ろには…見たことも無いような化け物が！？なんか、蠍みたいな姿をしたでっかいモンスター…いや待てよ？まさかそんな…例の耳鳴りもする

「きゃあっ！？」

島田or姫路の悲鳴、やりやがった！

良く見れば窓から飛び出てきた蠍みたいなモンスターが島田の足を引っ張ってミラーワールドに連れ込もうとしている、成る程ね…

「浅倉、言ってこいよ、好感度上がるかもしれないぜ…ってもう居ないし…」

既に向かっていた

「島田！しっかり掴まれ！引きずり込まれたら一環の終わりだ！」
その浅倉を軸にして、他の主格メンバーが総動員で島田を此方に引っ張ろうとしている…

あーこりゃ、明久の好感度が上がって終わりだな…

可愛そうな浅倉…

とか思ってたら、神崎がカードデッキを投げてきた、あー成る程成る程…

ちなみに浅倉意外全員分な

『まだ早まるなよ』

ん？どういうことだ？

とか考えてるうちに蠍は島田を諦めたようだ、っていつかそういう指示を出したのかな

「あ、ありがとうアキ…」

浅倉…！本当に可愛そう…！

「うつ…うつ…別に俺は泣いてないぞ城戸…ただ…島田が幸せならいいんだ…うつ…」

浅倉…泣くなよ…男だろ…

「じゃあ、ちよつと僕は行つてくるよ！」

ん？明久は何処へ行くのか…ってああ！そういうこと！あ、ちなみに何でこんなに落ち着いてるかと言うと、神崎はミラーワールドの定義も弄つたらしくて、ライダーバトルを行わない代わりにライダー達にはモンスターハンティングをやってもらうらしい、なんか、ゲームであつたよな、

モンスターハンティング

『吉井と共闘しろ、釣り橋効果はそれで完成だ、あのモンスターだが、吉井一人では勝ち目は無いが、お前等五人が共闘すれば、ギリギリ勝てる』

かなり強いって事じゃないか！

「おい、蓮、北岡、東條、浅倉、急ぐぞ！」

明久は何処から入ったんだ！？あ、ちなみに、恐らく明久はライダーだろう、耳鳴りがしている時、なんか苦しそうな顔してたし…

とりあえず俺達は、外の窓から変身して、ミラーワールドに入り、そのまま着地、グラウンドに行く、という作戦で決定した

「っしやあ！人のためだけに戦えるとなると気が軽い！」

そうして、俺達は再びミラーワールドに身を転じる

バカテス編5 鏡の世界の始まり（後書き）

いよいよ、本編開始って事ですかね…あ、ちなみに、この世界、かなり危うい物で、神崎が少しでも興味を持った物は混ざります、つまり、そういう事です

バカテス編 6 泊まり（前書き）

戦闘シーンカットです、すみません…

バカテス編 6 泊まり

いやいや…勝負は一瞬で終わった…

東條がいらないな…と思っただら、屋上から飛び降りて相手を貫くという技を披露した…

いや、どれだけ威力高いんだよ！？あの攻撃！？

そして全く脈絡の無い事で申し訳ないけど、今日から、土、日、と何故か家に泊まることになった…！？

建て前は勉強会、ぜってーしないよな！

『まあ、城戸落ち着け、俺のほうも全く脈絡がないのだが、色々と混ざった』

は？混ざった？

『まあ、俺が違う物に興味を持った結果、その人物がこの世界に組み込まれた訳だ…』

いい加減にして欲しい

『じゃあ、頑張れよ、カオスな方が面白いだろ』

お前がそれを言ったらお仕舞いだあー！

■

いや…怖い、そのうち紫と緑のでかい機械とか出てこないだろうな…？暴走する奴

あ、ちなみに、向こう側は、一度別れて、各々の持ち物を持って、再び集合して、来る、ということだ

ちなみに蓮と浅倉が案内に行っている、凄い組み合わせだな…

とか何とか思っていないが、東條、俺、北岡で、賭けポーカーをやつてると、五人＋案内人二人が来た

ちなみに戦果は、俺と東條が北岡に2万ずつ取られた…くそう…次は勝つ…

「お邪魔しま〜す！」

恐らく明久の声、あ、不味い！その絨毯は踏んじゃだめだ！

「明久！身を後ろに引け！」

咄嗟に注意した、間に合ってくれ…！

「え？ってうわっ！？」

訳も分からず身を引く明久の目の前をギロチンが落ちていく

「おい、蓮！またお前だな！」

実は蓮…何故かトラップを仕掛ける癖が付いていて、機能なんか踏んだ瞬間に竹槍が飛び出てきた

「これについては謝罪せざるを得ないな…悪い、癖だ…」

「トラップ回収してこい！っていうかこのギロチンどっから持ってきた！？」

「自家製に決まっているだろう」

作ったの！？

「まあ、俺は少し回収に行ってくる、ポーカーでもやってればいいさ」

何でポーカーなんだ！？

蓮は若干楽しそうな足取りでトラップ回収に向かった…

「それじゃあ…友人宅に泊まりに来たとき定番のイベントと言えば

…」

明久が何かやろうとしてるな…まあ、楽しければいいか…

「自室荒らしだよね！」

まだ、自室覗きなら分かる、荒らして何だ！？

「ふうん、中々面白そうじゃない？良く考えれば俺も他の四人の部屋見たことないし」

北岡って結構ノリいいんだな…

「俺も賛成だなあ…」

浅倉賛成

「僕は別にいいかな…」

東條反対…

「おい、東條、秋山の部屋には英雄になるためのヒントがあるらしいぜ」

「嫌だなあ…賛成に決まってるよ」

賛成だった、ナイス浅倉

結果、参加者は俺、明久、雄二、北岡、朝倉、東條、となった
まず最初は俺の部屋かららしい…別に何も無いけどな

■

「ここが城戸君の部屋かあ…」

まあ、まだ名前で呼ばれないところ辺り不満が若干残るけどな…
とか考えてると、メンバーがぞろぞろと俺の部屋に入っていく、
そして三秒後に…

「エロ本発見ーッッ！」

明久がそんな事を言い、青少年お断りのカバーの本を高く上げる、
…引つかかったな…

「これはけしからん！僕が内容を判断して処分するために持ちかえ
らさせて貰う！」

そんな事を言いながら、ページをめくる明久の顔が青ざめていき…

「ギヤアアーっ！？目が！目がア！」

何処かの大佐風な悲鳴をあげて、如何わしい本を投げ捨てる

「明久！？いつたいお前は何を見たんだ！？」

「さ、参考書だ！数学の参考書だよ！その本！」

自動的バ力撃墜システム、エロ本のカバーを被せた参考書を用意し、
相手の目を潰す

あ、ちなみにカバー意外は何もないぜ？

「そりゃ、明久、持ち帰れ、持ち帰れ」

そっついながら参考書突きつける

「いやああああ！？割と城戸君って腹黒い！？」

そんなことは無いぜ

■

続いて北岡部屋

何故かとてもなく恐ろしい気配を感じる…

「は、入ろつか…」

ドアを開ける、中は…天井、壁、床、小物棚、全てが鏡
一瞬でドアを閉めた

「どつという部屋だよ!？」

「いやさー俺の姿が映ってないと気に入らないんだよね」
相変わらずのナルシストっぷりだな!

入ったら駄目だこの部屋、気がおかしくなるぞ!？」

■

続いて東條部屋、浅倉と秋山の部屋は酷い気がするので後回し
ドアを開ける、一見普通の部屋だ…

「よし、けしからん本を持ってないかチェック始めるよ!」

お前、欲しいだけだろ…

「……………明久、これ」

ムツツリー二、えっと、本名は忘れた!が本棚を指差して明久に声
をかける、心なしか、指が震えているような…

「ははは、馬鹿だなあムツツリー二、いくらなんでもそんな無防備
なはずは……………」

笑っていた明久の顔が固まる、一体何があるんだ!？」

「えっと、『英雄の決意』『英雄になるには』『現代の英雄』『英
雄全集』『英雄大辞典』『英雄とは何か』…英雄ばかりだな!お
い!しかも最後の何だよこれ!？」

『世界最高の英雄 バウンティーハンター名護』って!誰だよ!？」
この部屋はある意味危ない、洗脳されるかも知れない…

■

朝倉部屋、危ない気がするが…

ちなみに浅倉は、俺はここまででいい、とか言っ、リビングに帰
った

「…まともな部屋でありますように…!」

あけた部屋は…割とまとも…じゃなかった!机の上が特に!

「やばいぞ!やばいぞこの机の上は!何処から何処を見ても島田し
か無い!」

机の上には島田、スレンダー美人、だが鉄壁の彼女の写真が大量にあった、

「……………お得意様」

やっぱりか！

「おい明久ー浅倉の日記があつたぞー読もうぜー」

雄二がそんな事を言うが…駄目だ、読んではいけない気がする…！

「一日目…吉井明久、今だ彼女の気持ちに気付かず、イライラする、

二日目…吉井明久、今だ彼女の気持ちに気付かず、殺意を覚えた

三日目…今日、明久が泊まりに来るらしい……………殺す」

「大変だ！明久逃げろ！逃げてくれ！お前は確実に殺される！」

「待て、逃げられないぞ、リビングには浅倉居るじゃないか！」

「いやあー！僕はまだ死にたく無いよ！？」

一体どうすれば…！？

ブルル…ブルル…おや、誰かの携帯が鳴っている

「あ、電話だ…ん？美波？何？どうしたの？」

相手は美波だったようだ…

「ッハッハハハハ！待ってるよ！今から殺しに行くから…！」

明らかに浅倉だ！

「どうしよう雄二！？美波が怒りの余りに遂に男になっちゃったよ

！」

その発想は無かった！

「落ちて着け明久！この館に居れば俺達を守るが、逃げたら一人だ

ぞ！」

勉強ができない頭のいい人、その名は坂本雄二

■

そして蓮部屋

…やばい香りしかない！

「くそう…まともな部屋は無いのか！？」

明久、もう止めればいいと思うぜ

そして開いた扉、そこには…

壁には隙間も無く木下秀吉のポスターがびっしりと

机は朝倉と似た状態

木下秀吉の抱き枕

「とんでも無い部屋だ！」

その後、俺達は部屋の事を忘れ、リビングへと向かった…

バカテス編7 休日ほど怖いものは無い

という事で明久が軽く浅倉に半殺しにされる、というイベントを得て、いざ、食事タイム

何でも女性陣（秀吉含む）が作ってくれていたそうだ、うん、うん、よかった、よかった…

さて、犠牲者は誰にするか…

「（城戸、俺に任せろよ、俺は強運だ、島田の料理にしかあり付かない…もし外れたときも…耐えられる）」

自信満々な浅倉の言葉は別れの言葉にも聞こえた…

「ッハッハハハハ！久しぶりにまともな飯だなあ！この肉じゃがを頂け…！」

それは…！王水肉じゃが…！？

「ああ…美味過ぎて舌が溶けそうだ…（ジュルジュルジュル）ゴペアッ…？」

浅倉から何かが溶ける音と妙な匂い、そして苦しみの声が聞こえる

「あ、浅倉さん！？どうしたんですか！？」

「はあ、美味かったぜ、あまりの美味さに悶絶しちゃったよ…」

「（浅倉、口腔内大丈夫！？）」

「（大丈夫だ…もう直った）」

どっかの半分吸血鬼の高校生か！お前は！

『俺が治療しといた、浅倉…お前は英雄だな…』

あ、英雄って言っちゃうと…

「へえ、その肉じゃが、美味しそうだね」

東條！駄目だ！東條では耐えられない！

「頂きまがアッ！？」

食う前に俺が腹に一撃を加える

「…おっと手が滑った」

すまない東條…

そして、俺は遂に口に食べ物^{へいき}を運ぶ

そう、肉じゃがという食物^{へいき}を

口に運ぶ、皆は優しすぎるんだ、時には厳しくしないと――

「うーん、姫路、確かに美味しいけど…まだ改良の余地があるな…」

主格五人が驚いた顔をしている、まあ、食っても平気なのは俺ぐら
いか…

実質昔似たような物を結構食ってるからな
平気だよ

「俺が料理教えてやるよ、俺、得意だし」

「ほ、本当ですか!？」

姫路の目が輝く、うん、教えないと死ぬ

まあ、こうして料理を教えるわけになったのだが…試食は全て俺が
受け持った

明日には冷たくなっているかもしれない…

蓮 Side

風呂は、女性陣、男性陣、木下陣（一人）

ふっ…やる事は決まっている

「覗きだ…」

!?!口が滑った!?!

「そうだよな、秋山君…行こう!」

吉井…まあいい…覗くだけ除いてやるさ…

■

覗き、シャワー音、浴場にて

気合を入れて来たのはいいが…

中で謎の声が聞こえる

「お、お主は誰じゃ!?!」

中にもう一人…!?!

「僕は、神崎士郎、この屋敷に住んでるんだ」

神崎！？何をやってるんだ…！？

『あれ？秀吉君？何顔を真つ赤にしてるの？あー、あれかな？僕を女の子だと思ってる？』

神崎、お前はどう見ても男だ

『ははは、嫌だなー、僕は男の娘だよ？』

『一文字違う気がするぞい！』

クソッ…まあいい、覗き決行だ…

中には…予想通りの秀吉と、腰まであるポニーテールのプラチナブロンドの髪を持った赤と青のオッドアイの目を持つ少女…いや違う、あれは神崎だ…！

神崎士郎／性別：♂　だ…！

くっ…！なんて破壊力だ…！理性が吹っ飛ぶ…！

「ところで、秀吉君、覗かれてるよね？」

「うむ、覗かれておるな」

気付かれてる…！？

「まったく…男の風呂を何で覗くんじゃかのう…」

「甘いなあ…秀吉君…僕達には…『括れ』がある」

そうか…俺が引かれた理由はそれか…！

「うむ…確かにあるのう…」

「と、いう事で…やらないか」

神崎テメエーツ！？

その後、俺達は神崎と木下がイチャ付くシーンを延々と見せられ、浴場に残ったのは赤い鮮血だけである

城戸Side

「どついうことが説明しろよ！神崎！」

只今尋問中

「えっとね…優衣に、『お兄ちゃんラノベ買ってきて〜』って言われて、出てこようとしたんだけど…」

ふむ…

「鏡から出るには、形を想像しなきゃいけない訳で…いつものあの姿は存在しない事になってるから、作れない、だからオリジナルの人物を作らなきゃいけない、で、木下とイチヤ付きたいから、こうした、反省もしていないし、後悔もしていない、てへっ」

「じゃあ、その代わり、ご不満そうな城戸君には、僕をいつでも好き放題にしている券をあげましょー」

「まあ…うん、なんだ、城戸、可愛いから、いいじゃないか」

蓮…！

「うるせえ！この変態シヨタコン！」

「城戸！言っている事と悪いことがある！」

「秋山！俺は城戸に賛成だ！黙れ変態シヨタコン！」

「黙れ島田ストーカー！」

「煩いよ、木下ストーカー」

「この英雄馬鹿！黙れ！」

「煩いなあ…木下ストーカー変態シヨタコンな秋山」

蓮フルボッコ

「う、うわあああああああ！！」

蓮が泣いた！？

まあ、翌日、補修があることを忘れて、大急ぎで学校に向かった訳だ

バカテス編 7 休日ほど怖いものは無い(後書き)

次回、何と二人目の主人公が出現します

バカテス編 8 学力強化合宿

新学期から二ヶ月…早いな…楽しい時が過ぎるのは…

「木下♪木下♪うふふ…」

蓮の精神状態が早速危ない！

「蓮…立ち直れよ…いい加減…」

「木下♪木下♪うふふ…」

駄目だ…コイツ…

ちなみに二ヶ月間こんな感じ

以前にシヨタコン呼ばわりされてからずっとだ…

「いい加減…目を覚ませえー！」

思いつきり蓮の顔を殴る

「！？俺は今まで何を…」

「お帰り、蓮…」

お前は古いテレビか…

「英雄♪英雄♪あはは…」

こいつは無視だ、どうやっても直らない、そう、リンゴジュースにつけて

半分だけぶっ壊れたPSP見たいに

「なあ、城戸、今度の強化合宿、ペット持込OKだと思うか？」

「駄目だろ！普通！」

「じゃあ持つていくか…」

「駄目だつて言うてるだろ！まあ、いいか…」

浅倉は殴ると余計壊れるだけだからスルー、パーフェクトスルー

「あー強化合宿か…駄目だ、行けないんだよね、俺」

何故…？

「何故？」

「ん、ちよつとねえ…都合が悪くてね…楽しみにしてなのにな」
都合が悪い…？どついう事だ…？

「ま、楽しんできなよ」

「あ、ああ…」

「一体何が…」

「遅れてしまったかもしれないね」

我担任鉄人…じゃなかった！

「何と、私が最後に見た鉄人の次は、超イケメンで真っ白な生地に一点だけ血のように真っ赤に染まったスカーフを着用した人物だったのである」

「城戸がぶっ壊れた！不測の事態に弱いんだコイツ！」

「あ、あんな所に死んだおじいちゃんが居るぞ、おい、おじいちゃん！」

「城戸！駄目だ…基礎回路がイかれてやがる！」

「走っても走っても追いつかない、それどころか、離れていつてしまっ」

「城戸！戻って来い！城戸！城戸！」

「そうか、このバイクを使えば追いつけるんだな！」『FINAL B E N G T』

「城戸！待て！追いつく所か轢き殺しかねん！」

ツハ！？今お爺ちゃんに会った様な…

気のせいかな…

とりあえず超イケメンなセールスマンっぽい人は黒板に文字を書いていく、チヨーク在ったんだ…

「島田 しまだ きりひこ 霧彦だ、今日から担任となった、宜しく頼むね」

島田？島田だと？まさか…

『俺達は鉄人の地獄から解放だー！』

確かに、そして、今、ちよっと考えてたら、島田、いや絶壁な彼女が帰ってきた

手に血のついた金属バットを持って…違う！釘バットだ！

「やあ、美波ちゃん、朝から物騒な物を持ってるね？」

気軽に呼ぶという事は…やはり…

「あれ？ Warum ist mein ?lterer Bruder?（何でウチの兄がここに居るの?）」

混乱モード突入した！やはり兄貴か！兄貴なのか！

「と、いう事は…俺の義兄さんか…」

浅倉、気が早い！

「そして驚く事に転校生だ」

待て、これ以上驚かされると、このクラスは…！このクラスは…！

「神崎士郎です」

「……………」私が最後に見たのは性別の概念を軽く打ち破ってくれる転校生であり、何と、実は知り合いの名前に酷似していたのである……………」

「城戸病が伝染した！？馬鹿な…治療法が見つからない！」

「ちなみに…この間、城戸さんに無理やり添い寝をさせられました

…」

『……………死すべし』……………』

「おお、治った!？」

ハッ！？俺に向かつて一直線にカッターが飛んでくるような!？

「ギイあやあアアオあアアああ！」

「悲鳴が怖い！二度と攻撃しねえ！」

「負けるな！奴は異端者だぞ!？」

「怖えよ！おつがちゃあああん！」

おつと、思わず、悲鳴が

「城戸の悲鳴は…フルフルみたいだな…」

「何ソレ？食うよ？」

「食えるかどうかは聞かないのか！」

食うわけ無いだろう、かの有名な人物も

『人類って食べてもいいの?』

では無く

『あなたは食べてもいい人類?』

と聞くのだから…

「って神崎！何しとんじやい！」

「学園生活」

「正しいけど聞きたい事じゃない！それ！」

コイツ…学校まで出沒しやがったか…

説明しよう、神崎士郎、まあ、何時もなら鏡からコンニチワしてくるんだけど…

最近実体化して（性別の概念をぶち壊す容姿、腰まであるプラチナブロンドのポニーテール、赤と青のオッドアイ、そしてスラリと伸びた手足、だが絶壁、なんたって男なんだから…）

館には出てたけど…ここまで来るとは…

「学園生活友人作成青春青春！」
きこのかんしとこもん

全く違う言葉が聞こえたような気がするぞ！

そして俺の隣の席の奴に神崎は頼みごとをする

「ねえ、ここ、いいかな？」

若干上目で

『ハイ！喜んで！』

可愛いと得するんだな、損も多い気がするけど

「はいはい、話を戻すよ」

霧彦先生（あだ名募集）、はパンパンと手を叩き、皆の注目を引き付ける

「良く聞いてくれ、私は、テストの結果によって褒美を与えようと思う」

若干興味を持つクラスメート達

「50～80点 島田美波の写真」

自分の妹を売った！？

「90～点 木下秀吉 or 姫路瑞希 or 島田美波 or 個人希望の写真」

教え子を買った！

「50点以下、西村先生、鉄人の写真」

絶対ゴメンだ！

しかし、写真なんて何処から調達して…！？

「……………お得意様」

ムツツリイーニイー！

「島田、お前の兄貴はどうなってるんだ？思考回路がFクラスじゃないか…」

蓮、俺も思った、それ

「まあ…向こうに居るときに歪^{ヒュー}んじやったのね…多分」
成る程…

「（城戸、おい城戸）」

演技をやめ、普通どおりの喋り方で話しかけてくる神崎

「（あれも混ざった奴の一人）」

「（お前を殺す）」

思わず本音が…

「———あ、ちなみにFクラスは現地集合だから」

『『案内すらないのかよっ！？』『』『』

全Fクラスが泣いた

バカテス編 8 学力強化合宿（後書き）

霧彦さんは、まあ、ご存知の方が多いと思いますが…
『いい風が吹くなあ…』の人です、無論変身…します

バカテス編9 マーダーから始まる拷問術（前書き）

【第一問】

強化合宿の一日目の日誌を書きなさい

城戸真司の日誌

「電車が止まり、降り立つと、無性に背中に悪寒が走った、まるで蛇が這いずり回るような感触、あれは何だったんだろうか…」

教師のコメント

あなたの嫌いな環境だったんでしょうか…？

秋山蓮の日誌

「助けて、助けて、神崎が怖い、怖い怖い怖いこわいこわいこわいこわい（以下解説不可）」

教師のコメント

あなたの身に何があったのでしょうか。

東條悟の日誌

「電車が止まり、降り立つと、無性に英雄になった感覚が走った、まるで英雄としての覚悟が這いずり回るような感触、あれは何だったんだろうか…」

追記：世の中金ですよね」

教師のコメント

お金じゃ買えない物もあると思います…それこそ英雄とか…

浅倉威のコメント

「俺のペットのアマガサヘビのマ―ダー知りませんか？」

教師のコメント

後で城戸君に謝りなさい。

マ―ダー (M a d e r) 意：殺人鬼

バカテス編9 マーダーから始まる拷問術

馬鹿な考えをしてみる、覗き↓助けて北岡先生！↓無実

我ながらいい考えだ…あ、でも駄目か、一生軽蔑した眼差しを避ける事はできない…

悩み所だよな…

「なあ、城戸、俺のマーダー知らないか？」

「知らねえつての！」

状況説明、合宿所に到着、到着前に背中にもるで蛇が這いずり回ったような感触がしたり、

『姫路の弁当まともになりませんでしたサーセンwww』というメールを明久に送るのを忘れ

死者が三人出掛けたという、イベントがあつた訳だが…ううん…怖いな…

初日から…これとは…

「マーダー！マーダー！」

ちなみに先程から浅倉はペットのマーダーちゃん（アマガサヘビ♂）を探し回っている

蓮は普通に瞑想している、何の瞑想？と聞いたら

『木下との関係を神秘的な力で強くする』

とか言つてたから、タチの悪い宗教にハマつたな…

ちなみに神崎は…

『Fクラスの皆さんを誘惑して弄んで来るとするか…』

とか言つて出て行つた

ちなみに北岡以外のメンバーは同室だった、北岡、何で来れないのかな？

『嫌あー！蛇いー！』

「マーダーの香りがするぜ！」

浅倉、今世紀一番のダッシュ、それはまるで、悲鳴を聞きつけて駆

けつけるヒーローの样だが、
実質は蛇を拾いたいだけ

「ただいま」

入れ替えて神崎が帰ってきた…ん？何か異臭が…
イカ臭いような…

「大変な目にあつた…髪なんか固まっちゃつてるし…」
一体何が…

「一つだけ言えるよ、口に出すのは白いものだけにしとけ」

「それ以上言うな！馬鹿野郎！」

「あー速く風呂入りたいなー時間何時？」

・Fクラス木下秀吉（神崎士郎）…20:00〜21:00 新設

大浴場B

「あと五分つて所か…」

「待て、待てよ！何故だ！？何故なんだ！？」

蓮が混乱状態、まあ、そのままにしておこう…

浅倉Side

「よしよしよし…」

只今アマガサヘビのマードーを捕獲し、部屋に戻る途中なのだが…

「ん？」

ふと、一つの部屋の前に大量の女子が集まっているのを見つけた、
一体何が…？

とりあえずアマガサヘビを籠に入れ、放置し、中を覗いてみる…

そこには正座をさせられ、足の上に重石を乗せられた吉井と土屋の
姿が…

「待て！待ってくれ！」

俺は我慢できずに、吉井と土屋の前に出る

「あ、浅倉君！」

「こんなの…こんなの…」

吉井と土屋が希望の眼差しを向けてくる

「生温くて見てられないだろ！重石を引く前に、足の下に突起が複数ある板を入れなければ…意味が無い！」

「あ、そっか」

島田がようやく気付いたようだ

「ありがとう、浅倉」

此方に微笑みかけてくる…もう死んでもいいや…

「Sono innamorato di te per la dichiarazione di fedeltà（私は貴女^{はまだ}の為に、忠誠を誓います）」

「な、何でだろう！凄い格好いいのに、格好悪い感じがする！」

まあ、うん、何だ、吉井、頑張れよ

■

只今、浴場前にて待機中、何をしてるか…？覗き？違うな…

覗き魔から浴場を救う為に立っているのさ…

「最初は美波ちゃんのストーカーと思ったけれども、割とマシな人物かもね、君は」

隣に居るのは、我クラス新担任、島田霧彦だ…最近までドイツで研究機関に所属していたとか…

何でも

『人間を超人にする道具の作成』

とか…全く想像が浮かばない、どういう研究機関？

「それで…研究って成功したんですか？」

聞くのが手っ取り早い

「ああ、勿論だよ、私は傑作の唯一の一品と、ドライバーを持っていてる」

何を言ってるのか分からなかった！聞くだけ無駄だった！

「おや、来たようだよ」

霧彦先生（あだ名は只今変態かシスコンのどちらかで争っている）が、向こうから走ってくる男子を指差し、そういった、メンバーは、

吉井、土屋、坂本、木下

「明久君は任せたまえ、君は他の三人を頼むよ」

「そこはお前が三人受け持つのが普通じゃないか…？」

「雄二、どうする！？霧彦先生＋ゴミだよ！」

俺はゴミ扱いか！

「構わん！ぶち殺せ！」

酷くなつてないか！？

「待て！ゴミ扱いとか色々聞きたいことはあるが…吉井意外の奴は俺と戦ってもらう…」

科目は総合科目だ

「ほう…教師でも無いお前が三対一で勝てるとでも？」

「俺は…お前等を敵に回しても、ここを退く訳にはいかないんだあ
ー！試獣召還！^{サモン}」

「仕方が無い、行くぞ、秀吉、ムツリニ」

吉井は先へ進む、しかし…霧彦先生は何をやるうとしているのか…
想像が付かない…

「…試獣召還^{サモン}」

『Fクラス 浅倉威』

総合科目 8522点

「…はあ？」

理解不能な点数に三人は啞然とする

「絶対にここは通さん…島田の…島田の…島田の裸体は俺だけの物だ（かなり小声で叫んでいる）…！」

折角上がったきた好感度を下げる訳にはいかない…！

「全員ここで散れええ！」

勝負は一瞬で付いた、彼等の点数を確認する暇さえ無く…

吉井Side

な、何なんだ…あの点数は…人間の取れる点数じゃない…

「やあ、待つてたよ、明久君？」

女子風呂で入り口を背に立っているのは、超イケメンで、真っ白な生地になんだけ血のように赤い模様があるスカーフを着用した、何処と無く、セールスマンのような雰囲気をしている

美波の兄でもあるFクラスの新しい担任、島田霧彦先生だ

「霧彦先生…ちなみに点数はどのくらいの点数を？」

「まあまあ、といった所かな、でも必要無いね、この場合」

「…？と、とにかくそこはどいてもらいます！試験召還！^{サモン}」

『補修教師 島田霧彦 VS Fクラス 吉井明久

総合科目 NONE VS 929点

』

「人間では召喚獣に打ち勝つことは不可能、しかし、超人ならば…？」

そついい、霧彦先生はベルトのような物と、USBのような物を取り出す

そして、USBメモリのボタンのような物を押す

【NASUKA！】

機械音声が響き、ベルトの一つだけぽかりと開いた穴にUSBメモリを挿す

すると、霧彦先生は光に包まれ…

ナスカの地上絵のような模様をした、マフラーをした、青い騎士のような姿になった…

もう…なんていうか…

「初めて一目見た時からずっと思い続けてきた…真つ二つにしてみたいと！」

「な、なんでもありだーッ！」

次の瞬間、僕は体を襲った強烈な痛み意識を手放した

城戸Side

「何故風呂場に秀吉君が居ないんだ…有り余ったストレスを何処で

発散すればいい!？」

只今、神崎、風呂場に秀吉が居なかった事にお怒り中
ところで…あの霧彦とか言う人…

たしか、ナスカ、っていうUSBメモリのような形をした、ガイア
メモリを使つて、変身するんだよね…

「蓮君、怖い話をしよう」

「いいが、俺は全く怖がらんぞ」

だろうな…前に怪談話し合つた時も表情一つ変えなかったし…

「前、僕が秀吉君と一緒に風呂に入った時なんだけどね…」
全く怖くな

「彼のリボルバーが目に入つてね、それは巨」

「やめろおおおお!止めてくれ!怖い!凄く怖い!」

蓮が頭を抱え込み、そう叫ぶ、これは蓮にはかなりのダメージだろう

「あんな巨大なもの受け入れられる女性が居」

「いぎやああああ!怖い怖いこわいこわいこわいこわい(以下聞き
取れない)」

「止めてくれ神崎!蓮が死んでしまう!」

本当に!

「(実際は目の前の秀吉君の体に夢中で目がそこまで行かなかった、
できれば唇を奪いたかったが、無理だった…無念)」

無念じゃねえよ!とんだ変態が居たもんだ!

とにかく…

初日からこれかよ…先が思いやられる…

——無駄に次回予告——

「やめてくれないか!無駄に僕を出すのは!」

「バカテスの世界か、芸術的だな、だが無意味だ」

「Fクラス…ですか、あいつらしい」

「二人ともどうして僕を同性愛者扱いするの!?僕にそんな趣味は

」

「ようこそ、ORCA旅団へ、歓GAYしよう！性大にな！」

「神崎…優衣ですね、貴女にお願いがあります」

「馬鹿な！？シザースが復活したと！？擬人化ボルキャンサーを連れて！？」

「お前等がどうしても覗きをしたいっていうんなら…」

覗きがそこまで魅力的な幻想を見ているなら…！

まずはその幻想をぶち殺す！」

「どうしよう！浅倉が色々な主人公の性格が混ざっている！」

「OK城戸、あの川の先にある木下集落を目指せばいいんだな？」

「蓮！しっかりしろよ蓮！」

突如現れる盗人、そしてその兄の【不審な笑み】

同性愛者扱いされた、明久に伸ばされる救いの手【ORCA旅団】

暗い世界で神崎優衣に願い事をする謎の人物とは…？

復活する、シザース、彼が引き歩いていた【擬人化ボルキャンサー】

性格を何処かの主人公に変えて、覗きを防ぐ【浅倉の決意】

そして…蓮に何があったのか？彼は死と生の境界線で彷徨う

次回…蟹物語 カニモノガタリ

バカテス編9 マーダーから始まる拷問術（後書き）

感想〃この作品のカオス度

いやー失礼、龍騎だけでなくディケイドまで…

バカテス編10 蟹物語？（前書き）

【第二問】

強化合宿の二日目の日誌を書きなさい

城戸真司の日誌

「盗人と刑事が出てきた、もう意味がわからない、蟹とスキマ妖怪の小競り合いなんて見たくもない、もう、嫌だ、何かで現実逃避したいです」

教師のコメント

まず、あなたの日誌の意味が分かりません。

秋山蓮の日誌

「何故、須藤に愛人が居て、俺の愛人は居ないのか」

教師のコメント

日誌に書く事ではないと思います。

東條悟の日誌

「前略、中略、以下略」

教師のコメント

最初から吉井君のように全略とでも書いてくれれば…

浅倉威のコメント

「ヒヤッホー！島田のペッタンコ最高ー！」

教師のコメント

今、霧彦先生があなたの元に向かいましたよ。

バカテス編10 蟹物語？

真つ暗な世界、そこに二人の男が立つて居た、片方は最近変態の噂が広まってきた

神崎士郎

「来たか、いや、俺が無理矢理来させたのだから…仮面ライダー・イエンド、かいとうだいき海東大樹」

「やめてくれないか！無駄に僕を出すのは！」

「…いや、上手く性格の捻じ曲げが効きすぎて怖い…」

「お前に頼みがある、俺の手伝いだ、人助け——」

「嫌だね、僕はお宝以外に興味は無いよ、人助けなんて虫唾が走る」
海東大樹、仮面ライダー・ディエンド、世界を走り、『お宝』を集めているコソ泥ライダー

「報酬として…」

神崎がそういうと、お互いの間に短い沈黙が訪れ…

「かどやつかさ門矢士の写真をプレゼントしよう」

「喜んで引き受けよう、僕は人助けが大好きすぎて殺しかけてるんだ」

殺したい程好き、とはよく聞くが、それは人物に使う物では無いだろうか…

そして、門矢士、世界の破壊者、仮面ライダー・ディケイドとして旅をしていた人物

何？説明が適当だと？第三者視点で状況を整理しているので精一杯なんだ、

城戸達よりはマシだろう？

「そうか、海東、お前には…俺の周りの警備&スパイ等をやってもらいたい」

「やっぱり断る」

なんと適当な…引き受けるの後に断るか…

「じゃあ、いい話を教えてやろう、実は…この世界に門矢も居る」

「なる程…確かにいい話だ…だが無意味だ」

「それはお前の兄の台詞だろう…まあいい、実を言うと…門矢は—

—」

一呼吸置き、告げる

「——不慮の事故で女体化してしまったんだ」

ちなみにツインテだった、貧乳でもあった、かなり可愛かった、うん、どっから見ても…

典型的なツンデレ

「そいつは大したお宝だ！」

海東の目が輝く、お前、同性愛者じゃなくて門矢なら何でもいいんだな…

「だが、頼みを受け入れてくれないなら…この世界から去って貰う」「すみませんでした！マジですみませんでした！自分チョーシこいてました！」

性格捻じ曲げすぎたかもしれないな…

ちなみに、極度に持ちネタに走る傾向と、土を愛しすぎて夜も眠れない、といった傾向を追加したのだが…ぶっ壊れたな…

おお怖い怖い

残念ながら、まだ暗い世界のターン！

「神崎…優衣…ですね、貴女に願いがあります」

まるで警察のような格好をした男が、神崎士郎の妹、神崎優衣に話しかける

「ん？ああ、確かシザース、だっけ？」

「覚えていただけるとは、光栄ですね」

「うん、二話しか登場しなかったし、死に方がダサかったから良く覚えてるよ」

「おっと、メタ発言をするのはそこまでだ、話を戻させてもらいま

す」

蟹^{シザース}刑事は話を戻す

「私を、外の世界に出して欲しいのですよ、貴女なら可能でしょう？」

「まあ、可能といえば可能だけど…正直あなたが出てもつまらないから…」

「酷い言われ様ですね！そこを何とか！」

「それじゃあ…うん、ボルキヤンサーを擬人化して、それと一緒に行動するならいいよ」

「なんていう発想だ！どうしてそういう発想が出るんだ！？…まあ、いいです、では取引は——」

一呼吸置き

「成立ですね」

やつとこさ城戸 Side

「はあ…姫路、瑞樹が、どうしてるか聞きたいと…」

只今、突如として現れた、海東純一^{かいとうじゅんいち}なる人物と話し合い中

彼は、姫路瑞樹、まあ、姫路さんな訳だが、どうしているか聞きたいらしい

「何故…聞きたいのですか？」

凄^{しみ}い疑問、この人笑み絶やさないけど、凄^{しみ}い不審なんだもん

「彼女は…以前まで我々の高校に所属する事になっていました…」
教育機関の方でしたか！

「しかし、この学園に所属した言わば——」
言わば？

「反逆です」

「待て！おかしいって！」

「それで、彼女がこの学園に会わなければ、引き取る気なのですが…
…どうやら無理なようです」

かなり気に入ってるものね…

「ところで、どのクラスに所属したのですか？彼女は」

「Fクラスですけど…」

信じないだろうなあ、信じないよ

「Fクラス…ですか、アイツらしい」

どうしてなのかな！？

「それでは、私はそろそろ立ち去りますよ」

そういつて、彼出て行った、水着姿で、うん、凄く不審だ！

■

しばらく時が経ち只今Aクラスと合同学習中だ、明久がアツ♂なのかどうかで口論中

「二人ともどうして僕を同性愛者扱いするの！？僕にそんな趣味は

」

必死な否定、しかし次の瞬間、何処からか、真つ黒な髪に赤い閃光のような紅い瞳の、イケメンがテーブルの上へと現れた

「ORCA旅団へようこそ、歓GAYしよう、性大にな！」

色々字が間違ってるような気がする！

「ってかアンタ誰だ！」

思わず突っ込み

「初見となるな、私はORCA旅団メルツェルだ」

「同時にエイ派幹部でもある」

何を言ってるのか分からないZE

「…スミマセン何言ってるかわ」

「自分と同じ人間が居るのを感じてな…バスの上に張り付き、その後床下で時を待っていた…」

人の話を聞け！とりあえず聞け！

「そして見つけた…君だな？我々と同じ、同性愛者は…」

「僕にそんな趣味は無い！」

驚愕の余り、固まるメルツェルとか言う人

「何…！？私の思い過ごしだと言うか…次の派閥戦争までに仕上げ

なければいけない白銀の腕輪の設計を放り投げてまで来たというのに…！」

「いやいや…人の話をだな…まずは人と言葉のドッチボールを…」

「それに…黄昏の首飾りも作っていない…あと個人的趣味の首輪つきよう首輪つきもだ…」

個人的趣味の首輪つきよう首輪つきつてなんだよ！

「…潮時か…まあいい 最早私も無用だ 人類に黄金の時代を」
首に鉛筆突き立てた！？

「待て！今からでも間に合うから諦めないでくれ！諦めんなよ！」
その後、何とかメルツェルは落ち着き、徒歩で帰っていった、嵐のように来て嵐のように去っていったな…

？に続く…いや、続いて欲しい…

バカテス編 11 蟹物語？

只今、蓮、浅倉、俺で賭けポーカー中、蓮が圧勝している…馬鹿な…
「あ、そういえば明日、明久が島田に告白っぽいメールするんじゃないかなかったっけ？」

浅倉にアドバイスをする

「大丈夫だ、既に奴の携帯は壊してある」

「仕事速っ！」

本当に仕事が速い！

「覗きに使われた事もあつたはずだからな、早く壊しておくのが吉だろう」

意外と策略を練っているな…怖い

とかいいながら、又しても蓮が勝った事に、そろそろ不信感を覚えたのだが…

ドアをノックする音が聞こえた

「こんな時間に誰だ…？とつくに消灯時間は過ぎているのに…」

実は懐中電灯の明かりのみでポーカーをやっている、うん、馬鹿馬鹿しい

「入りますよ」

そういつて入ってきたのは…

「誰だっけ…？蓮の知り合い？」

「残念ながら、俺にこんな知り合いは、いない、東條じゃないか？」

「僕にもいないね、誰？君？浅倉君の知り合い？」

「俺でも無い、ようは…」

「…不法侵入者か」

「いや、待ってくださいよ、良く見てください！覚えてるでしょう！？」

「…ああ！そういえば！」

「俺の友達の友達の知り合いの兄貴か！」

「俺に喧嘩を売って死んだ奴か」

「英雄の糧になった人だね」

「俺の弟」

「全員違う！いや、秋山さんの言ってることは若干当たってますが！」

え？誰だっけ…本当に誰だっけ…

「須藤雅史すどうまさしです、仮面ライダーシザースです」

馬鹿な！？シザースだと…！？

「シザース…まさか…」

「…二話しか登場しなかったシザースか？！」

「あれは、実はスーツのコストが高かったから二話で死んだんじゃないだろうか…」

「いや、キャラを出した方がいいが、別に目立たなかったので二話で殺された」

「っていうか、雑魚だったんだよ」

「おっと、私の悪口とメタ話はそこまで！」

はっ！？思わず思ってもいない事が口からポンポンと…世の中ってまだ怖い部分があるな…

「で、蟹刑事が何しに来たんだ？」

確か、蓮が殺したんだよな、この人…うわあ…

そういえば初めてだよな、殺した人物と再会するのは

俺はモンスターに殺されたし、他の奴の話を聞けば

蓮は衰弱死、東條は親子を庇って事故死、浅倉は警察機動隊に射殺、

北岡は病死…

誰もお互いを殺し合っていない、憎んではいたけど…

神崎もわりと考えて選んだんだな…

おっと、会話に戻ろうか

蟹刑事、須藤は短く笑い

「貴方に見せたい物があるのですよ…」

そう言いながら、須藤は一步左に動く、そこには

オレンジの長髪、緑目、目測C〜D、ぐらいの、何故か、文月学園の制服を着た絶世の美女…っていうか

何も考えてなさそうだな…なんていうか…蟹みたい…ん？蟹？いや、待てよ

オレンジの長髪↓ボルキヤンサーの甲殻の色

緑目↓ボルキヤンサーも緑目

目測C〜D↓蟹は普通無いに等しいんじゃないのか？ああ、島田と被るか

何も考えてなさそうな、人に安心感を与える顔↓蟹…？なのか？まあ分からん

「私の愛人、霧河^{きりかわ} 鋭牙^{するが}ですよ」

え？レイニーデビル？あ、違うか

「嘘だあああああああ！」

なんということだ、蓮が壊れてしまった…

「嘘だッ！嘘だッ！嘘だッ！」

壁に頭を打ちつけ始めてしまった！

「実は娘の立場ですね、ハハハ」

「何歳の時の子供だよッ！」

つていうか蓮はまだ頭打ち続けてるし！

「計算して十二歳の時の子供ですね」

「おかしいだろ！」

「じゃあ、私は叔父の立場ということだ」

「それなら納得」

つて納得できるか！似ても似つかねえ！

「実はボルキヤンサーの擬人化体」

「やっぱりか！」

というか、やっぱり何も考えてないのかな、先程から鋭牙さんは動かない、一歩たりとも

「実は彼女これでもお喋り」

「そうなんだ！？」

知らなかったよ！蟹って無口なイメージしかない！

「只今はちよつと…風呂入ってきなう、と進めたら茹で蟹状態になつてて、意識が朦朧としているだけで…」
なるほど…

「ってか一般常識はあるんだ！？」

「そうですね、頭はかなり良いようですよ、なんたつて、一度見たものは忘れないそうですから」

東條の立場危うし

「でも、数学などは一切駄目ですね、もう、暗記物しかできない子でした」

それは頭が悪い分類に入るんですね、実は

「か、蟹刑事？…須藤？…シザース？、どれがあなたの名前？」

初めて喋った！凄く安心感を与える声だ、可愛いね、Fクラスの清涼剤として欲しい

「叔父様と呼ばばいいです、うん、それでいいですよ」

「じゃあ、叔父様、話を戻すけど、二話で死んだのには何か心当たりある？」

「ごめん、そんな話した覚えが無いのですが」

話がトんでたようだ

まあ、いいんじゃないか？そろそろ蓮の頭からの出血量が酷くなってきた気がするけど…

浅倉Side

蟹が擬人化だと…！？馬鹿な…

とりあえず北岡に教えてやろう

『蟹は擬人化するらしいぜ、須藤が言ってた』

送信…つと…

そして二十秒後

『お前には擬人化したベノスネークがお似合いだ、島田よりもソツ

チのがいいんじゃないか？」

なんていう答えを返しやがる…

『蛇よか島田のがいいだろう』

送信… っと

そして十秒後

『お前の一番の恋人は鞭だろう、そうに違いない』

違う！絶対違う！あ、そうだ、島田に忠告のメールを送らなければ…

『鞭しまだよか飴しまだのが好きだ』

『まだ風呂場にカメラ一つ残ってるらしいぞ、情報源は工藤』

あれ…？何か怪しまれそうだが…まあ、いいか、送信送信

およそ一分後

まず島田のメール

『本当？浅倉と仲良かったっけ？』

工藤の事が…まあ、ね、嘘だから…原作を知っているから言っただけなのよね…

『お前に春は来ない、島田を殺し、鞭と棘の道を進まない限りは』
なんてことを言い出すんだ！あの弁護士は！

『何故島田を殺さなきゃいけないんだよ！阿呆が！』

送信

『まあ、それなりに、というか言っている所を聞いたただけだ』

送信…まさか送り相手を間違えた…なんてことは無いか

およそ一分後

『ふうん、で、何でウチに教えるの？』

おや、珍しい返答だな…答えは犯人が清水しみずだからだが…言ったら俺は超能力者扱いだ…

ちなみに清水ってのは、まあ、簡単に言えば、うん、変態風紀委員だよ、だって、髪型、性格、似過ぎですもの…トレス？いや、若干違うのだが…

まあ、島田に、何故か、島田に恋をした女子生徒だ…まあ、分からなくも無い

『何故島田を殺さないんだよ！阿呆が！』

引用してやがる！馬鹿か！？あの弁護士！？そこまでして俺にヤンで欲しいの！？

愛しすぎて殺した、とかそういうオチを期待してるのか！？

『この世で一番好きだからに決まっているじゃないか！』

送信…ってあるえー？送信相手…が…島田になってるような…？おかしいな、疲れてるのか…？

【島田美波 にメールが届きました】

終わった！俺終わった！タダのストーリーカーじゃねえか！適当に、お前のアドレスしか知らないから、とか返す気だったのに！俺は吉井か？！俺は吉井か！？ま、まだだ！まだ取り返せる！

で、でもこれは誰かの記憶に残しておきたい！北岡にメールじゃない！島田に告白しちゃった』

少し疲れてるかもしれない、ふう…素数を数えて…1…あ、素数じゃない…

【坂本雄二 にメールが届きました】

なんでだよ！？おかしいだろ！？ここで！？ここで坂本？なんだっそら！

ちよ、ちが！まあいい！島田に弁解のメールを…！

「嘘だッ！？うわあああああああ！！」

《いきなり突進してくる秋山》

《咄嗟によける俺》

《秋山に踏まれ、ぶっ壊れる俺の置いてあつた携帯》

《あ、避けるときに落してしまっ…！？》

「てめえ！このよくも！俺の島田への好感度だだ下がりがりだ！畜生！同じ目に合え！」

秋山の携帯を発見即行入力…ってうわ…壁紙秀吉じゃん…こいつ…真正のストーリーカーだ…

『秀吉、俺はお前を一生愛してる、だから、お前の…

靴下をくれ』

よっしゃ、これで秋山の特殊性癖が一つバレたな、いや、別に無いだろうけど

「おい、浅倉何した…!？」

「そしてこうしてやる!」

秋山の携帯を真逆の方向に折り曲げる、OK、破壊完了

「ちょ!？何したの!？何したんだよ!？怖い!怖い!」

ふん、いい気味だ…あああ!折角島田が振り向いてくれるようになったと言うのに!言うのに!

あぎゃあああああああああああ!!

城戸Side

「何やってるんだ…蓮と浅倉は…」

只今、言い合い中

「教えてやる!秀吉にお前の靴下をくれ、というメールをした、地味そうで一番嫌なメールだろう!」

「うわあ!もう駄目だ!俺は今から木下に一生軽蔑された眼差しで見られるのか!？」

そういつて蓮は倒れこむ

「おい、蓮、大丈夫か」

「OK城戸、あの川の先にある木下集落を目指せばいいんだな？」

「蓮!しっかりしろよ蓮!」

駄目だ!心臓マッサージ!おお!心音がかなり小さい!

「あは…木下が沢山…天国だ…」

文字通りに天国だそこは!入ったら出れない!

「あれ?ちょ…村が消えて…ハッ!？」

突然意識を取り戻したように周りを見渡す蓮

「よかった…尊い命がまた一つ救われたか…うん、いい傾向だ…蓮の生命力が強いお陰もあるんだろうな…」

「うつ…ヤバイ…島田の好感度下がりっぱなし…何か…改善策を考

えないと……」

どうしたんだろう、彼は……

っていうか変わった日だったな……今日は……水着不審人物やら、須藤

やら、鋭牙やら……

すごいファンタスティック！

バカテス編 1 1 蟹物語？（後書き）

…何なんだろう、この喪失感は…

バカテス編12 蟹物語・？

三日目の夜、丁度昨日の浅倉と蓮の殺し合いが終わったのと同時刻程度：

浅倉は覗き阻止のために死力を尽くして死に掛けてるし

蓮は覗きに加わって死力を尽くし、死に掛けている

東條？ああ、『覗きができれば英雄だ』と騙され、死力を尽くし、死んだ

結果、俺一人で眠れない夜を過ごしている訳だ：

え？神崎？帰ってこないよ、男子部屋に行ってから

監禁でもされてるかもな：

ああ…眠れない、何かが、巨大な意思のような物が迫ってくるように…

胸が圧迫され、息を吸えない、まるで…上に誰かが乗っかっているように…

いや、誰も居ないけどね！

ちなみにイレギュラー（蟹刑事：須藤、不審人物：海東純一、怪盗：海東大樹（兄よりは人格者））は、

只今…うん、言わないほうがいいかな…まあ、一応…天井裏に居る…怖い…切り裂きジャックか…！？

とか考えてると、面白い事が起こった

ドアが開いたのだ

こんな時間に一体誰が…！？

入ってきた人物↓島田美波「闇討ち！？

怖ッ！！切り裂きジャックより怖え！！どっかの手乗りタイガーかよ！？闇討ちなんて！！

一体誰を…！？一体誰を討つんだ…！？

標的↓浅倉威

浅倉に近寄っていく島田…下ろした髪はまるで、貞子の様

怖い、異常に怖いっす…浅倉…許せ、お前はここで死ぬ運命だったんだよ…

おや…？近づいたと思ったら…浅倉を揺すっているぞ？心臓を止めるマッサージか何かか…？

あれじゃ、まるで…

送り主を間違えたメールの文章がまるで告白のメールのようで、その真意を確かめたいけど、公に聞くのは無理だから夜中にこっそりと聞きに来た、あるいは、ちゃんと言葉にして欲しい、とか思っている女の子のようじゃないか…

「島田らしくない…」

あ、口が滑った

「！？」

見つかった！？

「む、胸がDもあるなんて…zzz」

寢言、寢言…俺は寝てますよ…と、だからそんな見るだけで心臓が握りつぶされるような目で見ないで…

「（…ね、寢言…？紛らわしいわね…）」

死亡フラグを折った！

「（まあ…後で右腕一本持って行かせて貰うわ…）」

新しい死亡フラグ立った！

「（ねえ…浅倉、起きて…）」

くっ…嫌な予感当たったようだ…何だろう、この心に溢れてくる嫉妬の感情と、怒りと、殺意は…

「……うワあッ！？秀吉が…死んだあ……」

蓮が絶叫した…なんていう寢言だよ…

「え…え、え、え、え、え、英雄…えい、えいえいえい英雄ええええ、え、え、英雄………」

音MADみたいになってる！東條の寢言が！

「（ん…！？！？島田…！？）」

浅倉が起きたか……うん……見守ろう…

ちなみに、浅倉は気付いていないが、清涼祭のカラオケボックス誘拐事件（俺命名）で、

島田は自分を守る為だけに立ち続けた所に…惚れたらしい（盗み聞きしました、ごめんなさい）

「（…せめて苦しまないように頼む…）」

やっぱり、闇討ちだと思ふよねー！うん！俺だつてそう思った！

しかし、不味い…ここは浅倉を支援だ…まず、東條にメール…

『蓮に飛び掛れば英雄だ』

送信…っと

およそ十秒

この間に島田と浅倉はイチヤイチヤしゃがった…いや、お互い恥ずかしそうに目を逸らしてるだけだが…

チツ…

「イイツシャアー！英雄の為に！死ねえー！秋山ア！」

飛び掛る東條、そして、鳩尾に決まる蹴り、起きる蓮

「ちょ、ちよつと！城戸意外は全員起きてるの！？早く言いなさいよねっ！」

「うわああああ！もう限界だ！蓮！殴らせろ！浅倉を殴る代わりに！東條！お前もだ！」

「分かったよ！協力しよう！浅倉君は吊るし首にしたいけど、秋山君で我慢だ！」

「ま、待て、落ち着け！いくら浅倉と島田がいい雰囲気だったからって俺に来るのはお門違いって奴…」

「黙れ、我等のサンドバッグよ！地獄の底で次は枕になれるように願うがいい！」

「変わつてない！枕とか割りと酷い扱いを受けるじゃないか！」

クツ…無駄に喋るサンドバッグだ…

「（そ、そっか…周りが起きてたんだ…。だから浅倉は知らない振りしてたのね…）」

そうだ、この場をぶち壊すには鉄人、西村先生だ！いや、この場合、

霧彦先生でもいい！

「おい蓮！お前は絶対許さねえ！いくら秀吉が振り向いてくれないからって島田を襲うなんて！」

「そうだよ秋山君！最低だ！人類の皮下脂肪の下の下以下だ！」

東條ナイス、今回の作戦：蓮を生贄にこの場をぶち壊す
なんて完璧なんだ！

「お前等！何言って…！」

『秋山蓮君！君の行為は万死に値する！死ねい！』

ドアを勢い良く開けて出てきたのは、霧彦先生、いや、島田の兄
ちなみに浅倉、島田を庇うポジションに…上手い奴だ…

「秋山君…朝には素晴らしい人格の持ち主に完成させよう…」

抵抗する蓮を腹パンで気絶させ、持ち帰る霧彦先生…ありがとう蓮、
俺達のスケープゴート…

『せ、先生や、やめっ！』

『黙りたまえ、最近木下君が君のストーカー行為について相談をし
てきたんだ』

『ば、馬鹿な！？バレていたのか！？』

『まあ、Aクラスの木下優子君だがね…』

『クッ！あの秀吉のレプリカ人形か！邪魔しやがって…！』

蓮がどんどん腐っていく…駄目だ、遅すぎたんだ、気が付くのが…

『君には…この課題をこなして貰うよ』

『…！？【島田美波の長所、全てを書け】だと…！？解答欄が軽く
1000を越えてる気がするぞ！？』

おっと、霧彦先生も腐っているようだな、もう駄目だ、この学園

「まあ…なんだ…島田、とりあえず今の内に自分の部屋に戻れ…」
作戦、完璧に成功だ…！

いよいよ、明日は最終日、覗きという欲望に刈られた男達の最後の
戦いだ

「まあ、頑張れよ、浅倉、覗きを邪魔するの」

「ああ、あいつ等にこう言ってやるんだ…」

「お前等がどうしても覗きをしたっていうんなら…」

覗きがそこまで魅力的な幻想を見ているなら…！

まずはその幻想をぶち殺す！…ってな」

「どうしよう！浅倉に色々な主人公の性格が混ざっている！」

「安心しろ、元々性格捻じ曲げられてるんだ、バレないって…」

「で、作戦とかあるのか？」

「ああ、召喚獣で戦つても二重^{ダブル}召喚と主人公補正で絶対に負ける」

二重召喚…白金の腕輪か…

ちなみに、白金の腕輪とは、以前あった召喚大会の優勝賞品の一つだ、

片方は召喚フィールドを作成する物、もう片方は、同時に二体の召喚獣を召喚する物…だったかな…

明久と雄二はそれを持っている訳だ、うんうん、厄介厄介

「で、コイツで勝負する」

そういつて取り出したのは…

以前、鏡の中の戦いで使われていた…カードデッキだった

「俺は王蛇に変身し、奴もまた、変身し戦う、以前の再現みたいだな…」

「おい、俺は確実にその戦いを止めるぞ？」

この方法だけは賛成できない、浅倉には悪いが…

『安心しろ、気絶に達する、又は、瀕死状態一步手前になるまでダメージを受けた奴はミラーワールドから強制的に退場させられる仕組みを作った』

窓に移り、此方を見ている男…

「神崎！？最近見ないと思ってたらミラーワールドに居たのか…」

まあ…命に別状が無ければいいか…

この時、俺は気付かなかった、蓮が死に掛けている事に…

まあ、別にいいか…

バカテス編13 蟹物語・終（前書き）

【仮面ライダー狐高^{こたけ}】

変身者：吉井明久

契約モンスター：アンフェア（N）（S）

契約モンスターのアンフェアは、狐型の二対となるモンスターで赤がN、青がSの強力な磁力を有している

お互いを引き寄せあい、突進力を加速させる戦法を得意としている

仮面ライダー狐高は、磁力を使つての特殊な戦法を使うが…

本人の頭が悪いので、大した力は発揮できないように見える

召喚機：射突杭^{しやとつくい}アンフェバイザー

土台と、杭の部分に挟めるようにアドベントカードをベントインする磁力で、杭を高速発射することで、リーチは短いが、強力な攻撃をする事もできる、AP3000に値する

アドベントカード

・アンフェア >AP4500<

契約モンスターアンフェアのカード、ちなみにアンフェアは二体で一体の扱いなので、契約カードは一枚のみ
実質のAPは9000に値する

・ソードベント（マグネセイバー）>AP2500<

狐高の意思によって、磁力を帯びさせる事が可能な赤と青の二つの剣ブーメランのように使ったりなど、用途の幅が広い

・ガードベント（マグネフィールド）>GP1000<

G Pは余り高くないが、磁力を使い、即座に自身の周りに砂鉄の防御フィールドを作成する
主に瞬間的な防御用

・マグナベント>AP1000<
アンフェアを呼び出している時に使用、自身に磁力を帯びせ、高速的な直線移動を可能にする

・シュートベント(ダストマグネ)>AP2000<
磁力によって、自由自在に弾道を変える弾丸を発射、連射性能はあまり良くない為、主に相手の弱点を攻撃する為に使用

【卑怯汚いは敗者の戯言】

・ファイナルベント(マグネサマーソルト)>AP7000<
最初にアンフェア(N)が飛び上がり、狐高が素早く相手に踵落としをし、
アンフェアが強力な磁力で狐高を引き寄せ、強力なサマーソルトをする

・ファイナルベント(コイルシューティング)>AP7000<
最初にアンフェア(S)の背中に乗り、アンフェア(S)が磁力で狐高を吹き飛ばし、その勢いを利用した蹴りを放つ

この解説は本編と関係ありません

バカテス編 13 蟹物語・終

「…浅倉君」

覗きの主犯格の一人、吉井明久が浅倉に声をかける

「鉄人が居ると思ったか？残念だったな、ここに居るのは俺、浅倉威だ」

吉井は構え、召喚する体勢、それを見て浅倉は口を開き

「折角だ、此方を使おうぜ？」

そういい、カードデッキを吉井に見せる

「…そう来ると思ってたよ」

そういい、吉井はポケットから赤色の、いや、赤と青が斜めの斜線で分かれている

カードデッキを取り出す

そして二人は近くにある、ミラーワールドへ通じる物にカードデッキをかざす

すると、ミラーワールドからVバックが二人の腰に転送されてくる
浅倉は上方向に曲げた右手を前に突き出し、即座に左方向に曲げる
明久は、突き出した右手を胸の前に持って来て、手を裏返す

そして、二人がほぼ同時に

「変身（ー！）」

そういい、カードデッキをVバックルへセットする

浅倉は紫のコブラをモチーフにしたライダー、王蛇に

明久は赤の狐、青の狐をモチーフにしたライダー、狐高

そして、ミラーワールドへと、身を転じる

彼等は気付かなかった、他の者は先へ進めることに…

■

ミラーワールド内にて

「ッハッハハハア！懐かしいなあ…この感覚…」

そう言いながら浅倉はカードをベントインする

【Sword Bengt】

機械音声が響くと、浅倉の手にベノスニーカーの尾を模した黄金の突撃剣ベノサーベルが現れる

「悪いが…ここで覗きは諦めてもらう…」

彼等は本気で気付いていない、もう…覗きは終わっている事に…

「それは無理だよ、男には…負けられない戦いつて物があるんだ！」
そう言いながら、吉井もカードをベントインする

【Sword Bengt】

機械音声が響き、吉井の手に、アンフェアの尾を模した赤と青の二本の剣、マグネセイバーが現れる

「なら俺も同じだ…死んでもここは退かない…！」

本気で気付いていないのだ、馬鹿だから

「じゃあ…仕方が無いね…行くよ！浅倉君！」

「来い！吉井！」

■一方、蓮は…

「覗きじゃ！秀吉の裸体を拝むんだあ！もうどうなってもいい！」

俺は吹っ切れた！隠さない！俺は本性を隠さない！

「待ちなさい！」

そう聞こえるので、俺は振り返る、そこには…秀吉？違う…

「偽者のオ！レプリカがあああ…！」

秀吉のレプリカ…木下優子は、黙って携帯の画面を見せてきた、そこにはこう書いてあった

『秀吉、俺はお前を一生愛してる、だから、お前の…

靴下をくれ』

！？確かあれは…いや！？でも何故姉に…！？

「馬鹿な！？それは秀吉に送ったはずじゃ…！？」

「アタシの愚弟は携帯持つてないわよ…」

…！？…

↓木下のメルアド¥10万

↓木下（優子）のメルアド¥10万

「早とちりでした

「有イイイイ沢アアアア！！名字だけ商品名に載せてるんじやねえええ！！！」

有沢とは3 - B 所属の有沢隆文の事である、メルアドを販売という…

…なんとも犯罪の香りのする

…商売をやっている男だ

つまり俺はあれか！弟の靴下が欲しい、と姉に送ったのか…

…どういう趣味だよ！怖いな！

「……………じゃないのよ…」

ん？何か言ってたか…？

「どうしてアタシじゃ無いのよッ！？」

怒るのそこなんだな！じゃあお前の奴なら貰えるのか！？

只今蓮、会議中…

…A レプリカなど不要だ！

…B だが、オリジナルは性別という大きな壁がある

…C そしてレプリカはキツめな性格だが容姿は最高クラス

…A レプリカだぞ！？

…B レプリカは女性だ、オリジナルより難易度は低い

…C つまり…

…A L L レプリカと仲良くしたほうが徳じゃね！？

会議終了…

「じゃあ何だ！？お前のが欲しいって言ったら俺にくれるのか！？」

「ば、馬鹿な事言わないでよ！あげるわけ無いじゃない！」

駄目か…

「……………でも…」

でも？脈アリ？

「お、お願いされたら、あげたくなるかもな？」

そうだ、コイツ…風評を気にして優等生の振りしているが、こっぴう奴だったな…

ふうん、初対面より好印象だぞ 今が初対面です

「俺は君（の靴下）が欲しい！欲しいんだ！何よりもずっと、ずっと！忘れようとしても忘れられない！それくらい大好きなんだ！だから――」

――君（の靴下）をくれ――」

俺、今最高にカッコイイ

「ヤバ…変なスイッチ入ったかも…ソクゾクする…」

危ない笑みで、若干トリップしているレプリカ、いや、優子、なんか小刻みに体が震えている…

馬が合うのかもな、彼女とは…ここで止めを…

「俺は君に秀吉より（靴下に対する）魅力を感じている！だから…君（の靴下）が欲しいんだ！

俺は…俺は…！君（の靴下）を大事にするから！一生大事にするから！

だから…

君（の靴下）を…くれないか？」

「ここじゃ人目に付くわね、場所を変えてゆっくり話しましょう…えへへ…」

浅倉――

ありがとう

■ミラーワールド内にて

「でえいッ！そりゃッ！」

吉井は最初に左手の赤い剣を振り下ろして、その場所を浅倉の背中に変える

そして、右手の青い剣が赤い剣の磁力に引かれ、かなりの速度の突きを繰り出す

「ぐうあッ！？…ッハッハハハあ！そろそろ終わりにするかあ…

！

「ハアッ…ハアッ…そうだね…」

【FinalBengt】

同時に機械音声が響き、お互いの契約モンスターが姿を現す

浅倉は地を這うように助走してから、ベノスナイカーを背にしてジャンプしベノスナイカーが口から放つエネルギーを受けて、空中から両足で連続キックを放つ、

ベノクラツシユの構えと予備動作を始める

吉井は本来なら、相手に踵落としをし、その後、アンフエアが磁力で吉井を引き寄せ、その力を応用してサマーソルトキックを行うマガネサマーソルトなのだが、

今回は自分がアンフエアに乗り、磁力で吹き飛ばされ、相手を蹴るという方法のコイルシューティングに変更した

ちなみに、狐高よしいがS極であるかN極であるかは本人の意思によって自由に変更できる

まあ、コイルガンとは若干違ふのだが…馬鹿な吉井には分からないのである

「だああありやああああ!!」

「おるうああああ!!」

そして、二人はぶつかり合い、吹き飛ばされ、戦闘不能と判断され、現実世界に転がり出てくる

「つぐあい!! ててて…はあ…引き分けかあ…」

吉井は残念そうに言うが、顔は笑っていた

「…俺も引き分けてのは初めてかもなあ…俺の初めてを奪ったんだ、責任取れよ」

「ちょ!!? それは無いと思うよ!?!」

「ハハハ…冗談だ、冗談、なあ、お前の事、明久って呼んでいいか?」

「ん?別に気にする事無いと思うけど…そんな事」

「そうか…それもそうだな、俺はどうしても人との付き合いが苦手だなあ…ま、こんな俺でも宜しくしてやってくれ、明久」

二人が楽しそうに笑っていると、向こう側から赤いたてがみにも見える髪の男が歩いてきた

つまり、坂本雄二な訳だが

「なんだ、こんな所に居たのか明久、お前も本当に馬鹿だな」

「ん？雄二？何で向こう側から…って…ああああああ！？」

ようやく気付いたのか、激しく後悔している吉井

「凄かったぞ…縄に縛られて無理やりスク水に変えられた秀吉が神崎に責められていた…」

「やめて！自分の馬鹿さに首を吊りたくなるから！」

「…ん？そっち側に居るのは浅倉か…」

「最初に言って置く！昨日のメールは送信相手を間違えたただけだ！」

「あーはいはい、で、どうだったんだ？」

坂本はニヤニヤと笑いながら浅倉に問う

「まあ…OK、って事危なッ！？カッターが飛んできたぞ！？」

「殺せ」

無感情で冷徹な坂本の言葉に応じるように向こう側からカッターを大量に持った集団が現れる

「ああ…俺の家族達…今、会いに行くからな…まだ死ねるかあッ！
！！」

新たな戦いが始まった…

バカテス編 13 蟹物語・終（後書き）

【最終問】

この強化合宿についてのまとめを書きなさい。

城戸真司のまとめ

『この学校は変態しか居ない』

教師のコメント

再認識させないで下さい。

秋山蓮のまとめ

『弟より姉、男より女、秀吉より優子』

教師のコメント

最近の君が分かりません。

浅倉威のまとめ

『カッターの持ち込みを禁止にする事、それが最も重要なことだと思えます』

教師のコメント

用紙が血で染まっていて何を書いてあるか分かりません。

東條悟のまとめ

『天然ステルスの特種スキルを手に入れた、みんなが僕を無視する
それと、先生、今夜英雄について熱く語りましょう』

教師のコメント

いじめの相談なら乗りますが、英雄トークは遠慮します。

バカテス編14 恐怖召喚（前書き）

【特別企画】バカな城戸真司と天才（笑）な秋山蓮の恐怖実話話
特別企画】

「てめえ！バカって言うなバカって！」

「じゃあ（笑）つけるな！バカが！」

「お前達さ、こんな企画を考える時点でどちらも馬鹿と気付きなよ」

「黙ってる！空気弁護士！」

「はいはい、わかったよ、お好きにどうぞ」

「…まあ、いいか…じゃあ本題に入るぞ！」

「恐怖体験か…俺は…一度だけあるな…」

「マジかよ？俺無くて困ってたんだ」

「なぜ企画したし」

「いやー…性活小話が企画倒れしたから…」

「ああ、あれは無理があるな」

「で、恐怖体験って何だよ？」

「あれは…俺が昨日風呂に入っていた時の事だ」

「昨日かよ！？」

「俺が色々考えながら湯船に浸かっていると…携帯電話の鳴る音がしたんだ」

「ほうほう…」

「それで俺は無視した」

「無視すんなやゴルアアア！」

「…第三位は…まずい…」

「…で？」

「今朝、確認したら優子からの電話で」

「まさか…」

「メッセージが、こうだった…」

「まさかな…」

「大事な用があるから聞いたら直ぐに電話しなさい」

「蓮、葬式場何処がいい？」

「待て、まだ恐怖体験は続いている！顔合わせられない… Aクラスに逝きたくない！今更『昨日の用事何？』とか聞けば三途の川を五往復した挙句渡る事になる」

「字が違う！落ちて着け蓮！そして助かる見込みは無いんだ！？」

ガラッ！（木下優子登場）
バーサーカー

「出たアアアアッ！！」

「何よ、人の顔見るなり…まるで化け物が出た見たいな声出して…」
「十分化け物だ…」

「城戸、ホッチキスの使い方を教えてあげるわ」

「遠慮します！ちよつと！ホッチキスは人に向けるものじゃ…！」

ガジャコッ（ホッチキスとの熱いキス）

「ムグアアア！？ツツ…！」

「う、うわああ！本当にやりやがった！城戸の口をホチキスで留めやがった…！？自分の血で文字を書いている…！？」

『おれのふぁーすときすが…むきぶつにとられた』

「そこかよ！う、うわあつ！来るなあ！謝るから！謝るから！」

「秋山、あんたにはアイスピックの正しい使い方を教えてあげるわ

…」

「何処に！？身体に！？」

「眼に」

「ピンポイントだ！やめろ！来るな！触るんじゃねえよおお…！」

この企画は死体が二つ出来上がった為に中止されました――

バカテス編 14 恐怖召喚

補習中じゃ…暑い、むさ苦しい、つまらない、の三重苦…

俺覗いてないのにー！

「そういえば…装備のリセットっていう話あったよな…」

蓮に聞いてみる、蓮は全く汗を掻いていない、涼しい姿の木下姉弟のどちらかを想像しているから

…凄い奴だよ…本当に…

「そうだな…俺達は何故かライダーの姿に設定させられていたが…あれは…？」

「恐らく神崎が適当にやったんだろう…はあ、あの姿ほど恥ずかしい物は無いな…」

「そういうなよ、明久なんて木刀に学ランだろ？いや…見た目はいいか…」

「君達の見た目にこだわれる余裕が羨ましいよ…僕はせめて、金属製の武器が欲しいよ…」

明久、金属だからっていいって事は限らないぜ、そう…金属製でも軽く折れるのさ…

そして…こう叫ぶんだ

『折れたアーツ！？』…と

「あ、それなら一度召喚獣を呼び出してみようよ、皆がどういう装備になっているのか気になるし」

バカは時にして天才なり

「そうだな。戦力の把握は試召戦争に必要不可欠だ。幸いにも鉄人もいることだし、召喚許可を貰って確認しようぜ」

「そうだね。すいませーん、西村せんせーい」

「おい城戸、こっち向いてみる」

ん、蓮が話しかけてきた、顔だけ動かして何の写真か見てみる

見たもの 木下優子の足を舐めて屈服する蓮とそれを見て満足そう

に喜んでいる木下優子

ぶっ壊れたか、所詮この学園には変態しか居ないって事が…ハハハハハ…

ってというか誰が撮影して…！？

「……………貴重な写真が撮れた」

よく死にませんでしたね、功労賞をあげたい

「とても良く効くお守りだ…」

何に効くのかな、マトモな人間を追い払うのか？

「一枚…」

「「2500円」」

土…ムツツリー二と蓮の声が重なる、ああ、木下優子さんよ…貴女の優等生としての立場は風前の灯

ガラッ（噂をすれば、鬼の形相、いや、鬼を睨み殺せる木下優子登場）
「「「き（ギャ）やああああーっ！？」」」

おや、声の一つ多かったが、何か事件があったようだ！後ろの間接が全て逆に曲がった物はオブジェです

ギネス更新 世界で最も多くの間接を曲げた（られた）カップル
とりあえず声の方向を向く、…あれ？明久の生首？

「駄目じゃないか姫路さん…いくら明久が鈍感だからって、首取っちゃ…喋れないじゃないか」

割と落ち着いている俺

「違いますっ！城戸さんは私をどんな目で見ていますかっ！？」

えっと…YAN DERE…？だよな？

「そつだよ城戸君！勝手に殺さないで！」

生きてた！じゃあ…この生首は一体…

「まさか…二万人の明久のクローンを作り、それを二万通りの殺し方で殺す事によって

姫路さんの料理レベルは5から6にシフトする…という事が」

「私が明久君を殺す事は変わらないんですか！？」

え…？違うの？…さて、俺が毒されているのか…？いや、そんな事は無いさ…

「安心しろ城戸、ただ単純に明久の召喚獣がバカだったから頭が外れただけだ」

なるほど、バカだと頭が外れるのか…

「それに、コイツを見る」

雄二の指差す方向 首が無い甲冑の騎士

「…デュララ…コホン、デュラハンか…？随分成長したな…等身大はあるぞ…」

いや、待て、これは…確か…六巻の内容か！？

「おい蓮！オカルト版が見れるつぽいぞ！とりあえず試獣^{サモン}召喚！」

現れた召喚獣 金色の甲冑に、身の程の長さの、自分の1・5倍ほどの厚さがある大剣を背負った俺

「ふおおおお！カツコイイよ！カツコイイよ！思わず俺、テンション上がるよ！」

「馬鹿が…城戸の癖に生意気だ」

蓮の回し蹴り

「いてっ…そうだ…観察処分者だった…俺達…」

っていうか合格自体奇跡だ！

…俺の召喚獣の首がポロリ、と取れ、重力にしたがって地面に落ちる…

「…あれ！？凄いデジャブ！？」

思わず明久とハモった…いや、まさか…

「城戸、お前も頭が無い」(性格的な意味での)バカって事だ」

「うるせえよ！蓮！じゃあお前の見せてみるよ！」

「ふん、いいぞ、別に試獣^{サモン}召喚」

現れた召喚獣 炎でできた首輪をして、三つの首を持つ黒い犬

「ケルベロス、か…みる、やはりいい物が…」

「いや、首輪している辺り、負け犬って事だろ」

「ナイス！北岡！」

「…じゃあ、お前のはどんな感じなんだ…？」

蓮が北岡に言う、うん、予想つかないや

出てきたもの 白容裔あ、いや、…腐り落ちた龍のような姿の怪物

白容裔です…

白容裔ですよ

大切な事なので二回言いました

「白容裔か…何が影響されたのか…わからない」

「確か顔にくっ付いて殺すんだから…執着心が高い、いや、しつこい、って事だね」

おお、東條！居たのか！

「馬鹿な！俺のどこがしつこいって言うのよ！？」

「…工藤の写真をしつこく重ねた箱に隠したりとか？」

「断じてしていない…！するわけが…！無いだろう！」

駄目だ、白容裔が証明している、持っている

「僕もやらせて貰うかな…試獣召喚！」

出てきた物 7.5.3と書いてある服を着た人物…誰だよ

「名護さん…！」

「バウンティーハンター名護か！実在してるのかよ！？っていうかオカルトなの？！」

「別名、妖怪ボタンむしり、影響は…英雄への渴望って事か…？」

蓮が地味に詳しい

「最後は俺かあ…なんだろうな…今、丁度美波のを見てきたが…ぬりかべだった…」

お気の毒に…

「んじゃ…行くぞ？試獣召喚…！」

出てきた物 ヤマトノオロチ 八岐大蛇

「格好良すぎるだろ！」

クラス半分程の声が重なった、凄え…Fクラスの息が合わさった…

「影響は…八つの頭 八つの顔 八つの性格 人格破綻者って事か…」

蓮が気の毒そうに言う…本当に気の毒…

バカテス編15 余すこと無く怪談(前書き)

【特別企画】再チャレンジ 城戸と秋山 恐怖話【特別企画】

「い、生きてるか…？蓮…？」

「あ、ああ、失命は逃れた…」

「…よし、再び怪談話を始めようぜ」

「わかった、で、俺は先程の一話だけなんだが…」

「大丈夫だ、よくよく考えたら一話あつたんだよ」

「ほう…？聞かせてみる」

「あれは…私が、しばらく前に体験した話なんですけどね」

「ありきたりだな…」

「しーん、とした夜道を歩いてたんですよ…」

「そしたら…何かに見られているような気がしたんですよ

『おかしいな？何かおかしいな！？』そう思つてると

いきなり回りがガサガサガサッ！って騒がしくなりましてね

『誰だ！？見ているのは誰だっ！？』そういうと…後ろから

『この辺りで小さい女の子を見ませんでしたか？』って声が聞こえて

私はウワァアアア！？って叫んでしまったんですよ…

おかしい、何かがおかしいぞ？こんな時間に女の子がいる筈がない…」

「稲川淳二がお前は！」

「『実は、会う約束をしていたんだけど、何時まで待っても来なくて…』」

それで聞いてみたんですよ、何処で待ち合わせたんですか？と…するとですね

『西門で会う約束をしたんです』

なんとここは…南門だったんですね…いやー怖い」

「怖くねえ！そしてそいつは誰だったんだよ！？」

「明久だった」

「吉井かよ！？何やってたんだ！？ソツチのほうか怖いだろ！」

「まさか南と西を間違えるなんて…恥ずかしい」

「いや、待て、時期が合わないか…？俺達が来たのは二年の時期、小さい子と言つと、恐らく島田の妹だし…さてはお前…作り話を…」

「いやぁ悪いな蓮！遅れた！」

「は…？お前、何でそこに居るんだ？」

「いやさ、途中で先生に物運び頼まれちゃってさ」

「いや…お前、今まで俺と話をしていただろ？」

「は？何言つてんだ？俺は荷物運びしてたから、ここには居ないぜ？」

「嘘だろ…！？」

そういつて、俺は今まで城戸が居た場所を見る

見た方向には一枚の鏡

そして笑みを浮かべる、鏡の中の、オリジナルと全く違う動きをする

——城戸だった

バカテス編15 余すこと無く怪談

夏期講習： 夏休みを消費し学力を上昇させる特殊イベント

←

ストレスが溜まる

←

現状に至る

「「「お前らうるせえんだよ！」「」」

常夏コンビ召喚！…今までに起きた事を解説しようじゃないか

どうしてオカルト版になったんだ！？

←

学園長なら知ってるさ！

←

肝試してもやってなクソジャリ共

←

補習なんかやってられるか！早速準備だ！

←

怖がり島田、浅倉とイチチャつく

←

何処かの変態風紀委員のソックリさん登場

←

死ぬべきは、愛すべきお姉さまを奪う蛇男 b y 清水

←

待て！清水！俺が、いや、俺達が本当の虐めを見せてやる！ b y

Fクラス男子

←

ヤマタノオロチ
八岐大蛇 v s ゾンビ + 迷ひ神

← 地獄絵図

← 一部の女子恐怖

← よくも俺の彼女を怖がらせたな！

← いまコイツ彼女って言ったぞ！殺せ！

← 大騒ぎ

← 現状に至る

あちゃー夏期講習かーそりゃストレス溜まるな…何処かの色ボケ猫を紹介したいね

そして只今随一のバカ、吉井明久（最近バカ呼ばわりするのに抵抗が無くなってた）

そして、…久保…いや…人生の終わりを迎えた彼がコンビを組んで常夏コンビの牛頭二匹と激戦中…ああ、何故だろう、バカらしく思えてくる

「水没王子なんて言わせるか…！私はオツツダルヴァだ…！！」

向こう側で何か超イケメンの青髪、底なし井戸のように暗い青い色の目の人物…が何か言ってるなあ…

浅倉Side

時間は飛び、翌日となる、…只今防火シャッター越しに感じる三年生の殺意の塊の肝試し会場に後ずさり中…

いや、正確には男女でペア組め阿呆がー！という雄二の言葉に…

男女ペアだと！？島田意外ありえないじゃないか！しかし、そんな

事をした瞬間FFF団＋清水の総攻撃で

俺は凶弾に倒れるだろう…

だがしかし…！ここで裏切れば島田の好感度はうなぎ下がりだ！怯えてどうする！

島田はツンデレだから『ウ、ウチは別に浅倉と組めなくて助かったわ！』とか言うだろうが…

夜に枕を涙で濡らすだろう…俺の体がどうなろうと…島田は泣かせない…

原作の二巻の表表紙を見たときから決めたんだ…っ！

それに島田は明久でなく俺を選んでくれた…！何も恥らうことは無い…！

「おい、島田、ペア組」

『須川会長。島田にペアを申し込もうとする異端者を発見しました』

『連れて行け』

『調理はどのように？』

『蝮酒フルコース5セットだ』

『了解しました』

最近俺を蝮^{マムシ}と勘違いする輩が出てきたな！しかし恐れない！

「ペア組もうぜ？」

『浅倉威…！殺します。殺します。ころします。ころします。殺し

ころしころしころころころ…！…！』

下手なホラーより怖い！

「え！？あ、浅倉がどうしてもって言うなら別に組んでもいいわよ…？」

よっしゃああああ！かかって来い！俺の恋路を邪魔するゴミ共が！
今なら消せる！

ヒュン（アイスピックが顔の横を過ぎる音）

バキッ！（後ろにあった防火シャッターを貫通する音）

…ああ、夕暮れに俺は死ぬ

「やっぱり…ペア組むのをやめたほうが…」

島田が思わず口走る

「駄目だ…俺にとってあんな物は障害に入らない…！」

なんたつて怖がる島田の姿が見れるのは貴重だ…！ここでは終わらないさ…！

救いは明久パターンと違い、久保の知能が加わらない事だ
今じゃあいつはタダの殺人鬼

『カッター部隊！一斉掃射！』

横からのカッターの雨…必死だなあ…！！

即座にベノスナイカー登場 カッターを弾く

ちなみに一般人には目視できないように設定されたいらしい

さて…楽しい楽しい（主に島田の怖がる姿にはあはあする）肝試しだ…！！

バカテス編 15 余すこと無く怪談（後書き）

次回よりかなり物語の進行ペースを落す気です

バカテス編16 それぞれの肝試しを

ペア発表

蓮＋木下優子

浅倉＋島田

北岡＋俺きと

東條＋テンションが前のように戻ってもはや一人称も俺に戻った正常な神崎士郎

「三番目のペアが悲しすぎるッ！」

何が良くて北岡と…！？

「工藤に振られた…」

ドンマイ、俺は同性愛者疑惑が立った

「アタシこういうの得意じゃないのに」

「大丈夫だろう、だって…お前のほうが…いや、なんでもない」

お前のほうが怖い、か…確にな…

「それじゃ、行くぞ…」

木下姉の手をとり歩みだす蓮、幸せそうだ…

くっ…！コロシタイ…！！…！？俺…やっぱり毒されてる…！？

結構雰囲気でてるわね…少し怖いかもしれないわ

木下、踏んでる、セツトの唐傘お化けを踏んでる

あ。ごめんなさい。壊れてないわよね？

後で俺も踏ん…なんでもないぞモニターの前のいい子達

蓮は壊れていたようだ…

「つてか蓮は異端者じゃないのか？誰も殺そうとしないが…」

『秋山は…な、手のつけようが無い』

『ああ…あんな思いはもう嫌だ…』

「本音は？」

『『彼の手によって入手される木下優子の写真が魅力的です』』
このクラスは…駄目だ…早くなんとかしないと…！

足元が結構暗いわね…

あそこに提灯があるぞ？

そういつて蓮はカメラを向ける、装飾品だろ、あれ…持ってついでいのか？

——ボンッ

「きゃあああーっ！」「」

突如、提灯に鬼のような顔が現れて寸法のおかしい手足が生える
なるほど、提灯お化けか…セツトの中に紛れ込ませるとは…中々粹
な事をしてくれる

あれ？掴めないわね

手を伸ばしているから見えないのだろうか？

ゴスッ（壁に影に隠れていた召喚者の目を木下の指が貫く音）

いぎやあああああーっ！！

っ！？ちよつと驚いたわね…突然の悲鳴と…きゃっ…指に血がつ
いてる…何よ…これ

木下、召喚者の目を貫いたぞ、今

え？あ。ごめんなさい。壊れてない…じゃなくて怪我は無いです
よね？

無事だと思ったのか！？血がついてるのに！？どついう神経をして
るんだよ！？

あ、日頃から見ているからか…

そうして、次々の中の人達に恐怖を与える木下姉&蓮ペアの快進撃
により、二人はチェックポイントまで辿り着いた

「このまま最後までいけるんじゃないかな？」

「恐らく代表はAクラスだろう、きついんじゃないか？」

『Aクラス 近藤良文 & Aクラス 大竹貴美子

科学 326点 & 263点

「やつぱりキツインじゃねえか？」

『Fクラス 秋山蓮 & Aクラス 木下優子

科学 569点 & 235点

「全然大丈夫だな、もう…」

ちなみに木下姉の召喚獣 所々が腐敗している看護服の木下姉
ゾンビ看護婦か

何故…ゾンビ看護婦…？ああ腐女子待て木下その間接はソツチに
曲がらアツ！？

カメラが下に落ちる、あ、これ失格？でも規定ライン超えてないか
ら…

くっ…まだだ…まだ行ける…

蓮は気力でケルベロスに炎を吐かせる、男だ…

無事チェックポイント通過ね、行きましょう、秋山

鬼だ…鬼だ！鬼がいるぞ！

ああ、もちろんだ

了承する蓮がすげえ！

「これで最後まで行けるだろ…絶対…」

「いや、無理だな」

突然雄二が口を挟んでくる

「何でだよ？行けそうじゃないか」

「そろそろ手を打って来る頃だろう…」

一体何を…

…しみの…向こうへと…

ん？うめき声で怖がらせる作戦か…？

…！！木下ツ！引き返すぞ！

え？なんでよ？変な事言っでないで行くわよ

無理やり蓮が引っ張られる…待てよ？うめき声じゃ…

僕はもう要らないよ　ぬくもりも明日も

どこかで聞いた事があるような…

静寂の闇に　舞い降りた夢は

Who . . . ?　束の間　零れた　頬の光

これは . . . ! ? 不味いかも知れない . . . ! !

Why . . . ?　脆すぎた世界　留める術を知らずに

ただ僕は願ってた　そう　忘却を

「引き返せ！ 蓮引き返せ！」

思わず叫んでしまう

悲しみの向こうへと　辿り着けるなら

僕はもうこれ以上　何も感じなくていい

「「「誠死ねエーツツ！！」「」「」

流れていた曲　School Days　エンディングテーマ　『

悲しみの向こうへ』

き…木下…戻らないと…ま…ま…誠…死ねエツ…！

「「「誠死ね誠死ね誠死ね…言葉を裏切る誠は死ね…そして世界も死ね…」「」」

『どうしたんだ！？ 城戸、北岡、東條、浅倉が全世界の誠を敵に回してるぞ?!』

『一体何が?!?』

ま、不味そうね…戻りましょう！

誠…死ね…誠…死ね…誠…死ね…誠…死ね…誠…死ね…誠…死ね…

…

あ、秋山が壊れた…速く戻らないと…っ！

「「「誠死ね…誠…死ね…まコとしネ…まコとしネ…まことシマこシ死ねシネシネシネシネ…!!」「」」

『一体誠ってどんな人物なんだ?!? 曲で連想させるだけでここまでの精神攻撃を与えるとは…』

「言葉様を裏切る誠死ね」

「ロリコン誠死ね」

「ゴキブリ以下の屑の誠死ね…!!」

「誠は全人類の敵…!!」

『誠…死ね…』

『うわああ！遂に感染したあ！』

「だ、誰か助けて！秋山が壊れたわ！」

『誠死ね…誠死ね…』

「全員壊れてるの?!」

『ハッ?!俺達は…何を…』

「…?!今…何かに憑依されていたような…」

「不気味だね…」

「き、木下…助かった…死ぬところだった…」

「あ、秋山、相談があるんだけど…」

「何だ?」

おい、イチヤつくなよ?殺意が芽生えるから

「アタシは、秋山の事、蓮って呼ぶから、秋山は、優子って呼んで…?」

「殺せ、全力で殺せ!肉片すら残すな!」

「ちよっ!?城戸…!お前毒されてるぞ!」

『秋山アアア!死ねい!!』

「すまない優子!助かってない!むしろ悪くなった!」

蓮を殺す事、それが俺の唯一の願いだ…!

次は浅倉+島田か…!こちらまで殺さなくてはな…!

バカテス編16 それぞれの肝試しを（後書き）

School Days

知らない方は一度検索してみてください

バカテス編17 喋り口

島田＋浅倉ペアの突入…さて…殺しに行く

「悪い城戸、靴箱に忘れ物をした、取りに行ってくれ」

…前に神崎の忘れ物を取りに行くか…

■

靴箱に行くと、見慣れない男子生徒が立って居た…いや、見たことがある…

海東大樹…そういえば転入してきたんだっけかな…うわぁ…面倒くさい

「よく来てくれた、残念だが初めから忘れ物など無い」

「な、何言って…」

「騙して悪いが仕事なんでな、死んでもらおう…」

「じよ、冗談じゃ…」

《カメンライド…ディエンド…!》

海東は右手に持った面妖な銃を天井に向かって撃つと、10枚の青い板が空中で静止し

更に海東の周りに複数のホログラムの幻影が現れ、

それらが一つになると同時に静止していた青い板が海東の頭に刺さる

「痛そうだな！オイ！」

そうして、海東は、シアン色の仮面ライダーへと変貌した…

「って何だよそれ！？何で鏡を使わなくても変身できるんだ!？」

「君達とは根本的に違うのさ、君には…この程度で十分かな？」

《カメンライド…ガイ…!》

機械音声が伝えると、以前ミラーワールド内で戦っていた、仮面ライダーガイが現れる

「空気なんて言わせねえから！」

「お前空気だ！須藤の次に！」

「黙れ黙れ黙れ！言わせない！言わせねえぞ！実は王蛇に立場取られてデクシポイントヨされたなんて！」

「どうやらガイは相当性格が歪んでいるようだ…まあ、別にいいが…ここで重用なのは…俺が生身だつて事だ」

「死ねイイ！」

【Strike Bengt】

ガイの右手に同じみの武器が装着される…あいつあれ意外にコンファインメントとファイナルメントとアドメントしかないんだよね…？たしか…

「お前、やつぱり空気だ」

「黙れ…！殺してやる…！殺つてやる…！」

しかし生身だ…あんなもので突かれたら一撃死だろうな…けど、どうせ主人公補正とかで助かるだろうけどな…

「待て、攻撃を止める！」

ほら、海東が叫びだした

「黙れ！俺はこいつを殺さない…！」

あ、よく聞いてみれば声違うな…別人が中に入ってたのか？

「海東！お前何やってるんだ…？」

後ろあたりから聞こえたのは、可愛らしい声なのに喋り方が男っぽい、とかじゃなくて完璧に男…

気になるので振り返れば

真っ赤な腰あたりまであるツインテ

勝気そうな黒目

整った顔立ち

確か…こいつ神崎の話によれば元々男だったとか…

なんでも女体化したとかなんとか…

名前は…門矢士…だったか？っていうかツカサつて男でも女でも通るからいいよな…

木下秀吉じゃなくて木下司とかだったらもう、名前で判断できないもの…

「ハハハ何もしないよ？ただ人を襲っていたライダーを倒してただけさ」

そういつて海東は自分で召喚したガイを踏みつけて、頭に銃を乱射する

酷エ

「コソ泥のお前が？」

コソ泥なんだな、海東

「ハハハ当たり前だよ」

そして消えたガイは、ホログラムのようになって消えた…あー

「やっぱりお前の召喚したライダーじゃねえか！」

「違う！違うんだ士！君の裸体の写真に釣られて殺しを働いた訳じゃない！」

「お前…っ！？なぜその写真を！？」

「某商会から取り寄せたんだ！城戸を大人しくさせるのを交換条件に！」

あー…ばれてたか…さすがムツツリー二…俺が浅倉の頭を鉄パイプでぶん殴ろうとしていたのもお見通しか…

「返せ…っ！」

「イヤだね！これは最高のお宝だ…！」

「なら力尽くで取り返すまでだ…っ！」

《カメンライド…ディケイド！》

「そっちも変身できるんかい！もう何でもありだな！」

俺が嘆いていると門矢は一瞬モノクロのモザイクがかかったと思うと…

必要最低限の三箇所のみをマゼンタの布で隠して、頭に…奇妙なお面をつけただけという超露出度高の姿に…

「神崎最高オオーーーーッツツ！！！」

海東の雄叫び、うん…そうですね…

『……………っ！？』

ははは…おかしいな、隣からまるで何かの噴射音のような物が聞こ

えたのと…

俺に大量のトマトジュースが降り注いだ…

「ムツツリー二は死んだか…」

南無、南無

俺は隣で死んでいるムツツリー二に偶然手元にあった白百合を添えて、お供え物をして、

再び戦いを見守ることにした

「はあはあ土！土アアア！」

「ひ、ひいつ！？来るなーっ！変態野郎！」

「我々の業界では褒め言葉ですっ！」

見なくていいか…

馬鹿馬鹿しくなってきたので戻ることにした…はあ…無駄に疲れた…
まあ、これで神崎が何か企んでる事は分かったし…

■

全く…とんだ災難だ…戻ったら『神崎は学園長室に行った』とか…
役所のたらい回しかよ！

とりあえずノックして開ける前に盗み聞き

『…ライダーの製作は順調か？』

『まあまあ、と言った所さね…』

『あれだけのサンプルを用意したのにか…？』

『大体あんたの理論が常人では理解できないのが悪いね』

『…それについては反論しない…』

『それより、あんたが作ればいいんじゃないかい？』

『残念だが、この身ではもう作れない…理論のレポートも無いしな』

『まったく…困ったもんだよ…』

『…！そういえば以前俺のレポートを理解する前に記憶し、自分で
ライダーを作った奴が居たな…』

『そいつを呼び出すことはできないのかい？』

『まあ、呼び出せるは呼び出せるが…まあ、明日試してみよう…あれにはかなりの体力を使う…』

『香川秀行とは…懐かしいな…』

『まあ、あんたの言うミラーワールドの暴走、とやらの前に完成することを願うだけさね…』

凄くトンでもない事を聞いてしまったような…！？

まあ、いいや、次は俺達の番…らしいし

バカテス編18 予定外

城戸真司、只今全力疾走中です…理由？ああ、先程神崎の話していた『ミラーワールドの暴走』ってのが起こったらしい、二年も早く、だ
「お前が馬鹿なのか！？計算誤ったの?!」

「そんなはずは無い、ミラーワールドの暴走までのリミットは二年だ」

「っていうか、ミラーワールドの暴走って何なんだよ？」

「ああ、ミラーモンスターには餓死への恐怖感を温和させて人間を襲わせないようにする鎖を付けていた」

ふうん…

「だが、一種だけ死を極度に恐怖し、人間を襲おうとする種が居た」
ほおう…

「『イエーガー』それが俺の付けた名前だ…奴等は死を恐れ、常に群れで行動し、更には道具まで使い、最近是他のミラーモンスターを手懐け、家畜として飼育したり、農業などを行ったりなどして、各々の生活を保っている」

「それって…」

「そうだ、奴等は…我々『人類』に酷似している」

「で、でもそれなら何故人間を襲うんだよ!？」

「人間と同じさ…侵略したいんだよ、この世界を」

「そんな…!?でもあいつ等だってそう長くはこちらに出て来れないだろ!？それに鏡を隔離しちまえば…!」

「…奴等は人間に酷似している、つまり…高度な文明を築けるのさ」
「まさか…」

「俺等がミラーワールドに入るときのように、あいつ等もミラーワールドから出るときの為に…」

「ライダーを作った…てか？」

「まあ、そんな物だと考えてくれ、本来は後二年程は完成しない筈

だっ たんだがな…」

「じゃあ…」

「戦争が始まるんだよ、本物の戦争がな」

「止める方法は無いのかよ…!？」

「無いな、イエーガーを殺すしか…だが、あちらの大半はライダーなのに対し、こちらは僅かしか居ない、勝ち目は無だ」

「そんな…」

「ただし、それは今の状況では、だ」

「…？」

「簡単な事だ…タイムベントを使い、俺達を今から二年前に飛ばす」

「は…?タイムベントは世界の時間を戻すんだろ？」

「ディケイド万歳っ!アンデットだって爆殺だぜ!」

「何言ってるんだよ…？」

「まあ、気にするな、俺達の学園生活はここで終わりだよ終わり」

「適当すぎるっ!？」

「…まあ、また入学してもいいけどな…楽しいしな、この学園は…」

「二年間どうするんだよ？」

「読者には3・Bの二年の頃の話を提供するから大丈夫だ」

「読者!？俺達は読まれてるのか!？」

「ああ、地味に好評だ」

「時々神崎の言っている事が分からない…」

「そして今、会話が異常に続き描写が全く無くなっているな」

「仕方ないだろ、今走っているだけだし」

「何で走ってるんだろうな？」

「お前が急ぐぞ!って言ったからだろ!」

「そして次回からは、【城戸^{バカ}真司とテストと召喚獣】では無くなるんだが…」

「おい、そのルビは間違ってる!そんな読み方しない!」

「【ゲイとテストと召喚獣】でいいよな？」

「よくねえ!ってか何の話してるんだ!？」

「大丈夫だ…ただ、少し登場人物が360。変わって、俺達の影が全く無くなるだけだ」

「大丈夫じゃねえ！」

「ハハハ…んじゃ行くぞ？」

【Time Bengt】

外される

あと数秒で

いやだ（主人公から）外されたくない

外されたくない

外されたくない

「物語から外された主人公が脇役やゲストキャラになれると思うな」

「脇役もゲストキャラもない

以前主人公だろうが

物語から外された奴のいくところは

同じ」

「キャラの扱いは平等だ」

いやだ主人公から外されたくない！！

「うわ———っ

外されたくない！！

外されたくない———」

周りの世界が逆流し、時間が戻っていく

終わりだと言うか…主人公としての立場が…

「ち」

「ちくしょう……………」

■

「…！？今、何かが逆流したような…？」

第一部 完 ……的なの？

バカテス編 18 予定外（後書き）

よくここまで読んでくれた

残念だが、まともな話など初めから無い

騙して悪いが趣味なんだな…

諦めて貰おう

やはり打ち切りか、作者め…面妖な…

なにコレ…ふざけてるの…

悪いが離脱させてもらうぜ

俺向きの話ではなかったようだ 後は任せたぜ

1つの話を書き続ける それを無理というか

歪んでいるよ 作者も、この話も

…すげえな、こいつ 大物だ、感動した…

打ち切りですか…どうしますか？（作者を生かす事に）あまり意味があるとは思えませんが…

作者の頭がイカれただと！ 狙ったか、ホワイト・グリント！

よりによって微妙な所で… クツ、ダメだ、修正できん！

…打ち切りだと？ 馬鹿な、これが話の最期と言うか！

認めん、認められるか、こんなこと

フツ…（趣味に）走って、走って、最後に打ち切りになる運命か…
続けても同じだ それまで、精々浮かれているがいい…

ちよつ、待つ… 危な…

なにやってんだよあんた！ テメエの話だろうが！ 書き続けるよ！
ちゃんと！

プランU 所謂打ち切りですね

話が、打ち切り…？

25話足らずでか…

ノブリス・オブリージュ 馬鹿な作者を排除する

グローバル・アーマメンツ社 ネクスト、フィードバックだ
君の打ち切りは知っている 老兵は気にせず、好きにやりたまえ

打ち切り！？ …作者め、怪しげな

愚かね、打ち切りなんて

それで勝てる道理がないわ

偽りのお誘い、失礼しました

あなた方には、ここで果てて頂きます

理由はお分かりですね

（リリウムにホイホイ釣られた結果がこれだよ！）

他愛もない

あの話を甘く見たか メアリーの比ではないのだから

こちらホワイト・グリント オペレーターです

貴方は、打ち切りという最悪の罪を犯しています

速やかに再考慮してください

さもないければ、実力で排除します

これは… 打ち切りだったのか、話が…

話を打ち切る下種^{ゲス}が 追い詰めて、肥溜めにぶちこんでやる

話、足りないぞ！

約束が違うじゃないか！

まだまだです

おちませんよ、作者の暴走具合は

やっぱりかああああ…

未熟者が お前は、熟練となる機会を永遠に失ったのだ…

そんな… 何かの間違いよ…

話が打ち切りだなんて…

遊びすぎたか、作者

じゃけん、話を書くのは向かんのんじゃ

…単純馬鹿が 打ち切って治るものでもあるまい…

すみませんでしたーっ！！！！

第二期1（前書き）

【第二問】

『（1）得意なことでも失敗してしまう事』

『（2）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

オツツダルヴァの答え

『（1）引法も筆の誤り』

『（2）泣きつ面に鉢』

教師のコメント

正解です。しかし君の名前を見ても驚かなくなってきた自分に驚きました。

首輪つきの答え

『（1）オツツダルヴァの水没』

教師のコメント

彼に恨みでもあるのでしょうか。

カニスの答え

『（2）泣きつ面をマツハで蜂の巣にしてやんよ』

教師のコメント

君は鬼ですか。

第二期 1

僕らがこの文月学園に入学してから二度目の春を無事に迎えることができた

…ああ、去年の思い出を振り返ってみれば…

手を折られたり

足を折られたり

意識をほぼ毎日かられたり

時々ちよつとだけサーブスイベント

だがその後には骨を折られたり

…やめよう、僕は過去を振り返らない男だ

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎え入れる為の桜が咲き誇っている

そしてその桜の木の下にはまるで犬の死体のようになり、尚殴られ続ける男子生徒

犬の死体のようになり、尚殴られ続ける男子生徒

大切なことなので二回言いました

別に花を愛でるほど雅な人間ではないけれど、その眺めには一瞬目を奪われる。

今僕の頭にあるのは、春の風物詩でも無いし、桜のことじゃない。

僕の頭は今年一年を生き抜いていく事がどうやったらできるかで一杯になっていた

そして桜の木の下にはまるで犬の死体のようになり、尚殴られ続ける男子生徒

僕はなんとなく助けたいなー等と考えていたが、それは叶わないだつて、僕だもん男子生徒

「遅刻だぞ」

玄関の前でドスの聞いた声に呼び止められる。声のした方を見ると、

そこには浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男が立っていた。

「あ、G A マ…西村先生。おはようございます」

顔を軽く下げて挨拶をしようとした、あれ…おかしいな首が動かないや

相手は生活指導の鬼、西村教諭だ。目を付けられればロクな目に遭わない…

けど自分の命が一番大切だよね

「待て、お前…今、何か言おうとしなかったか？」

「ははっ。気のせいですよ」

「ん、そうか？」

ヤバかった…でも言いかけたG A マンって何だろうか…？

そうか…まだ痛みで脳が混乱しているんだな

「それにしても普通に『おはようございます』じゃないだろうが」

「あ、すみません。えーっと——救急車を呼んでください」

「……お前に何があったんだ？」

「あ、いえ、気にしないで下さい」

どうせ治してもすぐに傷つくから

「…まあいい、ほら、受け取れ」

先生が箱から封筒を取り出し、僕に差し出してくる宛名の欄には…駄目だ首が動かせないから見れない

「あ、どーもです」

一応頭をさげながら受け取ろうとしたが

首も動かなければ右手も動かない

「…どうした？」

「あ…あはは…大丈夫ですよ先生…人間最低内臓生きてれば大丈夫ですから…」

「やっぱり救急車呼ぶか？」

「いいです、どうせすぐこうなるんですから…」

「いや…しかしたな…教育者という立場上生徒が重傷を負っている

のを見過ぐす訳には…」

「どうせ…どうせ…僕が死んでも太陽は昇るんだ…あは…ははは…あははははは…！」

「本当に大丈夫か!?」

「ふう…少し取り乱しましたね、すみませんが読み上げてくださいますか…」

僕は爽やかな笑顔でそういう

（後の西村先生の話だと目が据わっていてこの世の絶望そのものような笑顔だったらしい、寒気が止まらなかったとか）

「し…しかし…これは後で教えよう、自分の目で確かめた方がいいだろうしな…まずは病院に行つてだな…」

「先生、自分が読んだからつてクラスが変わる訳でも無いんですし、読んで下さい、それとも先生は僕をこれ以上遅らせたいんですか？教育者上良くないと思いますよ？それは」

「あ…ああ、それじゃ読むぞ、コホン、お前は…」

恐らくCクラスあたりだろうなあー

「Fクラスだ」

「先生、僕が生きていた事だけは覚えていてください」

「待て！早まるな！そのカッターを放せ！」

「くっ…！離して下さい先生…っ！僕はもう生きるのが嫌なんだ…ッッ…！」

「大体…っ！どうしてそんな怪我をしたんだ!?」

「姉^{あね}さんに『私の事をどう思っている?』と聞かれたので『ん?どう思ってるって姉さんは姉さんだよ、それ以上でもそれ以下でもないし、これからもそのままだよ』と笑顔で答えたら…っ！急に暴力を…っ！」

「それは相手が好意を抱いている場合は振られたような物だ…」

何言ってるんだろう？姉さんが僕を好きだとしてもそれは男性としてじゃなく、兄弟愛のような物だろう、だって、幼馴染だし

「それよりも…っ！何故僕がFクラスなんですか…っ!？」

「簡単な事だ…っ！名前の欄に『首輪つき』なんて書く奴が居るかっ！？」

「あれは間違っただけですよ…っ！」

結局この後もこのカッターの取り合いは続き、増援として来た先生達に食い止められ、一命を取り留めた

「大きすぎる…修正が必要だ…」

八割方の機能が停止している体を引き摺り、三階まで登ってみると、まず目の前に現れたのは通常のクラスの五倍はあるであろう、恐らくAクラス

ちよつと気になる

「皆さん進級おめでとうございます。私はこの二年A組の担任、高橋洋子かはしやうこです、よろしくお願いします」

足を止めて大きめの窓から中を覗いてみると、髪を後ろでお団子状にまとめ眼鏡をかけてスーツをきっちり着こなした知的女性の代表のような教師がいた。

彼女が名前を告げると、黒板ではなく壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイに担任教師の名前が表示された。なんて贅沢な。一体いくらするんだろう？僕の存在価値の一億倍程はありそうだな…

「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートその他の設備に不備のある人はいますか？」

教室には五十人の生徒が授業を受けるには過剰なほどの広さと設備があつた。

冷凍庫には当然のように各種飲料やお菓子を含めた様々な食料が、エアコンは教室どころか各人に一台。それぞれがお好みの温度に調整できるようになっている。

さらに見回してみると天井は総ガラス製でありながらスイッチ一つで開閉可能となっており、壁には格調高い絵画や観葉植物がさりげ

なく置かれていた。まるで高級ホテルロビー…

やめよう、このままだとFクラスがどんなに普通の設備だろうと首を吊りたくなる

そういつて離れようとしていた時

「では、はじめにクラス代表を紹介します。オツツダルヴァさん。前に来てください」

オツツダルヴァ…何度聞いてもかなり変わった名前だろう…国籍何処よ？

まあ、オツツダルヴァの事は知っている、一年の頃から有名だったしね、何でも…知り合いが言うには

『奴の速さは人間じゃねえ、あのテストを解く時の考える時間…普通の人間の二倍の速さはあるな…それに文字を書くときの腕の速さだ…って異常だ、そして運動時の動きもな…』

これは俺の自分の勝手な想像だが…あいつは普通の人間とは感じる時間が違うのかもしれないな

普通の人間にとっての30秒を1分の長さで感じられ、さらにその感覚について行ける体を持っていれば…奴は人間じゃねえ、

あれが人間の動きだと？…じゃあ俺はなんだ？』

以上、友人ドン・カーネルさんのコメントでした

「ふん…」

仕方が無いのもう少しだけ見学…

名前を呼ばれて席を立ったのは、青い髪を肩まで伸ばした所謂いわゆるジャニーズ系って感じの超イケメンでまるで底の見えない井戸を彷彿とさせる暗い青色の瞳

物静かな雰囲気を持つ彼にはその整った容姿と相まって、穢れを近づけない神々しさを放っていた

クラス全員の視線が集まる。

クラス代表——つまり二年生のクラスを編成する振り分け試験において、この教室内で誰よりも優秀な成績を収めた生徒。

更にいうなれば、学年で最高成績を誇るAクラスでのトップはその

まま二年生のトップという事になる。注目を浴びるのは当然のことだろう。

「私は馴れ合うつもりは無い、私は代表、貴様等は全員私以下の存在、それでいいだろう」

毒舌家でした

よく見ると彼はクラス内の男子ばかりを見ているような…？

「ふん…屑が…いい男が一人もないとは…屑が…」

今の言葉は聞かなかった方針で

二年F組と書かれたプレートのある教室の前で僕は少しだけ躊躇していた。

遅刻なんてしてきて、みんなに悪い印象をもたれたりしないだろうか。

嫌なヤツや怖いヤツや痛いヤツや（物理的に）痛いヤツはいないだろうか。

特に最後のは身近に思い当たる人物がいるので尚更だ

…よし、悪い印象をなるべく与えないように入ろう、そうして皆からにいい印象を持ってもらえば、いざというときに助けてくれるかもしれない

…謙虚な感じで行こう

「つすみません！！遅」

「Fクラスへようこそ

歓迎しよう 盛大にな！」

台無しだっ！僕の考慮の時間を返せっ！こんな返しならどんな感じでも入っても中断されるじゃないかっ！

「殊勝な子羊ね わざわざ狼の狩場に出てくるのだから

ウフフ…戻れないわよ、あなた」

帰らせてくださいっ！是非っ！

「ほう…遅刻とは…貴様、放課後を楽しみにしているよ…？」

「あ、姉さん…？何故、ここに…」

「べ、別にお前がここに来るのを予想して白紙のテストを出した訳じゃないからなっ！熱が出ただけだ！」

「僕がいるからFクラスに来るなんて…」

「だ、だから違つと…っ！」

「そこまでして姉さんは僕を殺したいのか？！あんたは鬼かつ！？」

「右腕は諦めろ」

あれえっ！？逆ギレ！？切れる十代？！

「まあ、落ち着いてくれ、今日は担任が休みなのでな、私が進行役を勤めさせてもらう

まずは自己紹介からだな…

私は代表 マクシミリアン〓テルミドールだ、よろしく頼む」

そういつて先程の歓迎しよう！の人とは別の人が教壇に上がっていたのは

黒い髪を肩まで伸ばした所謂いわゆるジャニーズ系つて感じの超イケメンでまるで血を彷彿とさせる赤色の瞳…あれ？何処かの人に似てないか…？まあいいや…

「私はメルツエル、テルミドールの側近を勤めさせてもらっている、よろしく頼む」

そういつたのは黒い髪を肩まで伸ばした所謂ジャニーズ系のつて感じのイケメンで赤い閃光のような紅い瞳…

つておい！代表のテルミドールと被つてる！被つてるよ！

「テルミドールと似ているだろう？まあ、私は所謂影武者のような物だ」

なるほど…だから喋り方も似せているのか？

違う部分は、超が付くかどうかと、瞳の感じだけだ…

知らない人が見れば一卵性双生児に見えなくも無い、ここまで似ている他人とは…気味悪くないのだろうか？

「次はそうだな…君頼むよ」

そういつてテルミドール…いやメルツエル？いやテルミドールが、僕を指す

「あ、はい、僕は――
こうしてFクラス生活は始まった」

第二期1（後書き）

第二期：今回は原作に忠実に、忠実に行きたいと思います

第二期2（前書き）

【第五問】

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい

『光は波であつて、（ ）である』

オツツダルヴァの答え

『粒子』

教師のコメント

その通りです

CUBEの答え

『逆流するもの』

教師のコメント

君にとっての光がわかりません

首輪つきの答え

『僕が昨日自宅へ帰ろうとすると、突然奇妙な動きをする光があつた、そして僕は気がつくといくつとロンドンへと渡つており、五分ほどすると再び奇妙な動きをする光が現れ、一瞬で自宅のリビングに戻つていた…あの光はなんだつたんだろうか…？
つまり光は…よく解らないもの』

教師のコメント

よく解答欄に収まりましたね

第二期 2

「———です、よろしくおねがいします」

僕の自己紹介が終わると、一人の男子生徒が手を上げた

『なんで犬の首輪してるんだ？』

「違うよっ！ネコの首輪だよ！」

『大して変わってねえ…』

大して変わらないだ…？何馬鹿な事言ってるんだ？

「我々は親しみを込めて彼を『首輪つき』と呼ぶことにしたいと思う」

「自己紹介意味無くない！？」

先程も思ってたが、このメルツェルという人物色々台無しにしてくれる…

「そしてこの提案は霞スミカの提案だ」

ちなみに霞スミカとは僕が先程から姉さんと呼んでいる人物だ、いや、小さい頃よく守ってくれたんだよね、僕のことを…

なのに今じゃ襲われる、何故だろうか？

そして、次に僕の目の前の席に座っていた人物が自己紹介のために立つ

「有沢隆文だ、宜しく頼む」

そう言った人物は、確かに僕と同年齢だが、何故か年が離れているような気がする

黒髪黒目という一般的な人物だ、言うなれば高校生時の西村先生

そういえば…今思えばメルツェルだかテルミドルだか…正直まともな名前の人間が居ないのかと思っていたけど別にそんな事は無い様だ…よかったよかった

有沢君が座ると、その前の席に座っている赤髪の人物が立つ

「ウイスだ」

前言撤回、最近の日本は異常な名前が多いですね、なんとかしてく

ださい

ってか…この人達…総じて自己紹介が短い…！リアクションに困る…っ！

「そしてコイツがイエーイだ」

ちよっと…名前らしささえ捨てた！？なんて事を…！

「よろしくな」

そういつて立つのは明るい緑の髪をした男だ

「俺は文系でコイツが理系だ」

「まあな」

息びったりだな…驚くほどに

そういつて次の人が立つ

限りなく白に近い空色の髪のいつでも気だるそうな顔をしている女性だ

「エイっプールです」

『ヒヤッホーッ！エイたぁーん！俺だ！こっち向いてくれえー！』

『¥最愛／¥最高／¥エイっプール／』

信者が地味に居るな…確かに可愛いけどね

「趣味は、弾幕を張る事です」

幻想郷にでも行けばいいんじゃないかな？

ん…？幻想郷って何だ…？

そんな事を考えてるうちに次の人物が立つ

こげ茶色の髪を右サイドで一つに束ねている

男

「PQです、宜しくお願いします」

彼の喋る言葉は――

何処か人を小馬鹿にしている――

「特技は…ミサイルカーニバルです」

とても幻想郷に似合う人だな、と思った（格好的な意味で）

…っと、危うくまた何かに捕まる所だった…！

こうしてしばらくの時間が過ぎて――

全員の自己紹介が終わった頃…

「さて、聞いてくれ」

前に立っている代表ことテルミドルが口を開く

「君達、この設備に文句は無いか？」

『「じよ…冗談じゃ…」』

なるほど…冗談じゃない！と言えないほどに啞然としているのか…

「ならば…Aクラスに戦争を挑もう」

『無理だ、Aクラスに勝てるはずがない』

『エイたんがいれば何もいらぬ』

『おいおい、スミカさんも忘れるなよ？』

駄目だこのクラス、早く何とかしないと…！

「まあ、聞いてくれ、これは扇動だが…正直Aクラスに勝ち目がある」

なんだって？それは本当かい！？それは乾巧という奴の仕業な…

え…？ちょ…誰？乾巧って誰…？怖ッ！！

「我々には確実に相手を打ち取れる戦力がある」

「まず最初にエイプル」

え？頭良かったの？

「彼女は英語に関してはAクラスを凌駕する」

「他の物は？」

「全で一桁だ」

「どうやったらそこまで傾くの！？」

「彼女…帰国してきたばかりでな、日本語が読めないんだ」

マジかよ…

「でも数学とか…」

「極端に文系なんだ、数学とかまったく理解できない」

…ある意味…日本語さえ何とかなれば強力な戦力だろうに…

「それにイエーイとウイスだっている」

「俺達か」

「悪いがそこまで戦力になれるとは思わなげ？」

確か…理系と文系だよね…？

「そこで、だ、この非公式アイテムを使ってもらおう」

テルミ…いやメルツエルが素晴らしいながらポケットから腕輪を取り出す

「白夜の腕輪、と言ってな…私の自信作だ、召喚獣を融合させることができる」

なにそのチートアイテム

「つまり、それで俺がイエーイと二つの意味で融合すれば弱点無し
つてことか」

「成る程な」

「待つて！一つはわかるけどもう一つの意味がわからない！」

「ベットの上的の格闘技に決まっているだろう」

「そういうことだ」

ああ…そういう趣味…いや、別に否定はしないけどね…

「それにPQだっている」

「私ですか？」

「そうだ、君は確か物理の点数が異常だったはずだろう？」

「ええ、そうですね」

そーなのかー

「ということで非公式アイテム…」

お前は四次元ポケットを持った青いタヌキか

「陽炎^{かげろう}の指輪をプレゼントだ、この指輪は、自分の能力によって受けるダメージをゼロにできる効果がある」

あれ…？それって余り意味が無いんじゃない？

「成る程、ミサイルカーニバルに使えますね」

もしかして…400天オーバー能力が自爆とか…？

『何故だか勝てそうな気がしてきたぞ…？』

だんだん士気が上がってきたころ、突然ドアが開いた、そして外れて倒れた…脆過ぎますね、Fクラスは

「Aクラス代表オツツダルヴァだ、宣戦布告をしに来た」

…はい？

「私はな、こんなクラスに所属させられるような愚弟が存在するところが許せない、よって今から貴様等を私の愚弟と地獄に落してやる」
え？オツツダルヴァの弟がこのクラスに…

「オツツダヴァ、いや、兄よ…同じ血の繋がる人間にそれはあんまりじゃないか？」

メルツ…テルミドールが反応する、…言われてみれば似てなくも無い
そうして、オツツダルヴァはクラスの中を見回している、設備を馬鹿にするのかな？

おや？僕を何故まっすぐ見つめる

「…この戦争で勝ったクラスが相手のクラスの一名に一つだけ好きな事をさせていい、というのも付け足してやるうじゃないか？」

何故、僕を見ながら言う、…寒気が…ツツ！！！！

「いいだろう」

良くない！

「それにどちらにしろ攻め込むつもりだったんだ、大して変わらない」

大いに変わるっ！

「ならば、明日の10時からでどうだ？」

「ふん、この戦争を承諾するとはな…愚かな…まあいい、せいぜい足掻く事だな」

こうして僕等のAクラスへの戦争が始まろうとしていた

第二期3

「騙して悪いが城戸Sideなんでな…納得してもらおう」

「神崎、独り言言つてないで答えてもらおうか…?」

「いやだなー城戸はそんなに怖い顔しないって」

現状説明 以前俺はいきなり主人公から外されたらしい…?何言つてんだか…

さらには読者には3・Bの二年生の時の話をプレゼントだぜ!…?何言つてんだか…

そしてまさかのぶつ切り…?何言つてんだか…

とりあえず無事二年にもなったし、出番が来るぜ!…?何言つてんだか…

(ちなみにここでの 何言つてんだか…は改行の意味と同義である)

とりあえず登校 文月学園消滅 じょ…冗談じゃ…

現状に至る

「まず最初に…とりあえず何故文月学園が消えたかについて説明してもらおうか…」

「幻想入りでもしたんだろ」

華麗に決まる俺のアイアンクロー

「腕力には自信がある」

「ぎゃああああ!何故か坂本の苦しみがわかるうう!!」

このまま頭を握りつぶしてもいい

「ほ、本当はイエーガー消せなかったんです!マジです!こちらの不手際でした!」

「つまり…イエーガーに消されたと」

「けどアンタは生きてる!ノーカウントだ!ノーカウントすみませんでしたっ!!」

手に加える力を倍増させる

「更に言つと…!3・Bの話はここで感動の最終話だったな、的な

ネタを混ぜようと思ったのにそんな余裕がなくて若干涙目な神崎ですっ!!」

そのためだけに二話分も枠を取ったのかよ!ありえねえ!

「で、何か方法はあるのかな?イエーガーに対する」

「あります!あります!だから手を離してくれえっ!!」

仕方がないので手を離す

「死…死んだ…」

死ぬかと思ったとかじゃなくて死んだのか!

「方法はあるにはある…ただし生贄が一人必要でな…」

「どんな方法だよ…?」

「まあ詳しくは何処かのトランプを使って戦うライダーの劇場版を見てほしいが、14作戦だ」

「フオーティーン作戦?14人目のライダーとか?」

「それじゃオルタナティブだろ」

ああ…あの出てきて東條にすぐに殺された不憫な人が…

「まあ、原作では幼女とキングのカード四枚を生贄にささげること
で召喚できる別次元のニーサンだ」

「ニーサン…?」

「お呼びでしょうか?」

出たな、怪人海パン

「申し訳ありません、このような姿で」

そう思うなら着替えるなりしようにせ!

「んで…この生贄だが…城戸が生贄なので大したリスクは無い…つまり決行だ」

「待て!今なんとなく俺を殺す発言しなかったか!?」

「お前はライダーの力を手に入れたようだね、試してやろう、お前の力を(腹パン)」

「ごフツ!…畜生…」

■

「いや、マジで生贄っすか?じよ…冗談じゃ…」

「安心しろ、お前がいなくてもこの世界はやって行ける」

「いや！こちらの意見を聞いて頂きたい！！」

こいつ等……！人の人生を何だと思ってるやがる！

「安心しろ、これで死ぬわけじゃない、記憶から消されるだけさ」

「死んだも同然！！」

「安心しろ、忘れ去られた者は幻想入りするっていう超便利システムがあるから」

「神崎ゴメン！俺、幻想入りが東方のネタだと言う事しか知らないから超怖い！！」

「安心しろ、村人A、B等を除けば男性キャラが以上に少ないというハーレムだから」

「マジで？」

「ただし全員変人……いや、なんでもない」

「やっぱ怖ええ！！」

せめて死にてえ！！

「それに良く見る……タイトルがバカ（城戸真司）とテストと召喚獣から東方仮面舞踏会に変わってるだろう」

「何を言ってるのかわからない！！」

「実はこれ、城戸が色々な世界を回るとい話なんだ……感想に書かれた世界などに城戸が向かう、というな……」

「本当に何言ってるのかわからない！！」

「んじゃ……そろそろ飽きたし、おーいカテゴリーK持って来ーい！！」

「実はもう容易してあるんですよね」

転ばぬは先の杖

「よっしゃ！幻想入りなんてあんさん運がいいで！思いっきりエンジョイしてこいや！」

無性に腹が立つ！

しかし次には俺は四枚のカードに飲み込まれ、その後は覚えていない……

神崎死ね

■

「浅倉、夕食できたわよ？…また考え事？」

「ああ…どうしても思い出せない知り合いがいてな…」

「連、その知り合いってどんな人なのよ？」

「ああ、困っている奴を見るとすぐに助けに行つてな…」

「ふうん、それじゃあ、その人、善人だったんだ？」

「いや、あいつは偽善者だね、俺が善人を忘れるわけがないだろ？」

「へえ、思い出せないのに偽善者だって分かるんだ…他に覚えてる事はあるの？」

「あー…そういえば…」

「そついやアイツはな…」

「確かアイツはね…」

『明久よりも馬鹿だったかな———』

第二期3（後書き）

「綺麗な終わり方に見えるけどさ、俺は勝手に生贄にされるわ東條は出ないわ、散々じゃねえか！」

実は、この話は城戸が色々な世界を回るといっ話であつたんですよ！後付じゃないです

そして、汚染者の二話分は神崎の言ってる通りの理由です。

正直悪いと思ってる、反省もしていないし、後悔もしていない……すみません、大嘘です

東方編1 目覚め（前書き）

感想にて、城戸が出ないか、それとボルキャンサーの擬人化体はどうした阿呆が、という感想がありました。が、空気化 幻想入りした、という解釈でお願いします、
ワリと本気で

東方編1 目覚め

チュンチュン、チュンチュンと小鳥の鳴き声が聞こえる…

朦朧としていた意識がはつきりとしてくる…

とりあえず目を開けてみる、そこには青空、一面の青空

「…空が青いな…」

「…騙されないぞ…！！この青空さえ、俺を消そうとする敵かも知れない…！！」

俺の名前は城戸真司、もしかしたら永遠の16歳になっているかもしれない

しばらく前までは文月学園って所で楽しくやっていたのに…どうしてこうなった…

まさか…あれか？五人も要ると扱いきれないから主人公を別の世界に飛ばして主要人物減らすぜ戦法ってか？

じよ…冗談じゃ…

ちなみに俺は神崎士郎という奴の気紛れで幻想入りさせられてしまった…

といつても俺自体幻想入りが、何なのかさえ理解していない…！というか俺の東方に対する知識は…

とても頭の弱い奴がいること、そーなのかー、弾幕はパワーだぜ！以上だ…だってさあ…俺、ゲームとか余りしないし？っていうかパソコンとか難しすぎて使えないし？

ラノベぐらいしか知らないのな？

とか考えてれば、何気に右手に紙があることに気がつく

『イエーガーとかマジで釣られてやんのwwwそんなの居る訳ねえだろばあーかwww by・神崎（兄）』

ドウヤラコロスアイテガフエタミタイダ

「あれ？もしかして先輩じゃないですか！？やった！俺、ついてるかもしれない！」

右方向にて生命体の存在を確認：誰だっけ…？

「ああ！やつぱり先輩だ！こんな所で奇遇ですね！」

「…誰だっけ…？」

俺を先輩と呼んできた奴はそのままの勢いで盛大にズッコケタ、あれかなり痛いのに…体張るねえ…

「俺ですよ！俺！さのみつる佐野満！」

佐野…？えーっと…ああ！思い出した！あの戦いの途中で全ての願いが叶って泥沼にはまった人か！ようやく思い出した！

「悪い、思い出した、…でここは何処だ…？」

ってというか霧濃ッ！！そのせいか、湖が大きく見える

「何処ってそりゃ…これは霧の湖でしょ？先輩も知ってるだろ？」

「悪い、東方の話なら全く付いて行けないからな」

■ 青年解説中 ■

「なるほど、ここは世の中から忘れ去られたオカルトの溜り場だと、そして毎日弾幕ごっこなんていう生ぬるい名前の殺し合いが広げられもう嫌だ帰りたいッ！！」

「まあ…殺し合いつていう程じゃありませんけどね…ってそれよりも！」

佐野がこちらに輝く眼差しを向けてくる

「俺達が幻想入りしたって事はですね！何か能力が付くんですよ！」

「何を根拠に！？転生ならまだしも幻想入りだろ！？能力つかねえよ…！」

「いや、先輩、殆ど転生に近いじゃないっすか」

む、言われてみれば死んでここに来たって事は確かに転生だな

「実際俺、試してみたんですけどね、俺が【コインの表が出たら勝ち】ゲームを一人さびしく歩きながらやってたんですよ…」

本当にさびしい！それは寂しい！

「143回中143回が表だったんですよ…！」

何それ、ギネス？

「で、何が言いたいんだ？」

「俺の勝手な予測ですけどね…能力が備わったんじゃないかと…！」
とんだ阿呆が居たもんだ

「その名も…【勝ち続ける程度の能力】ッ…！」

実際それはチートなのですが、どうしたら…

「そんなのただ運が良かっただけ…」

「実際さつき弾幕張れたし」

そちらを先に言えば納得したと言うのに…！！

「ええ?!俺達人間やめましたシリーズの仲間入りかよ?!」

「つまり、先輩も能力が付きますよ、多分」

多分…いや、多分じゃ困る!対抗手段無いじゃない!?カードデッキは無いし…!

「ってか、どうやって能力が何か気づく訳…?」

「戦闘中にか?」

適当な…!!死ぬかもしれないと言うのに…!!

「時に先輩」

佐野が急に話を変えてくる

「先程も言ったとおり、俺は東方が好きなんですよ」

「ああ、よく分かったよ、それは」

「んで、二次創作物とかも結構見たりするんですわ」

ふうん…それは初耳

「で、大体主人公が幻想入りすると、最初にですね——」

「——バカな氷精^{チルノ}に戦いを申し込まれるんですわ」

「ハハハ、何言って」

…?なんか冷えて来たな…

「オマエ等!あたいの縄張りで何やっ」

「もう嫌だ!!何このテンプレ!?バカなの!?バカなんですの!」
?もうありえませんか…!!」

「先輩落ち着け!どつかの風紀委員と口調がシンクロしている…!!」
…ふう、落ち着いて先程の声がした方を見てみれば、青い服装の10代未満ほどの女の子が立って居た、っていうか背中から氷の羽っ

ばいのが生えている

「…さいきょーのあたいの話を無視した拳句…バカと言うとはいいい度胸だ！」

あつつれえー！？変なスイッチ入ったよ？！

「ちょ、違、バカっていうのは君に言っただんじゃ無く」

「またバカって言ったな！覚悟しろ！」

「Oh…No…」

駄目だ、説得が通じない、あーもう駄目だ、いや…待てよ？

「佐野、勝負しようぜ」

「は？こんな時に何言って…」

「アイツを先に倒したほうが【勝ち】だ」

佐野の能力 勝ち続ける程度 of 能力…恐らく無意識で

「ちょ！？それ…！おま…！」

「ふふん、さいきょーのあたいに人間が勝てるはず無いんだ」

「最強？何言ってるんだ…！最強はこの佐野満さ！今までで一度も負けたことが無い！」

「先輩！何故そこで煽る！説得が最」

「あたいを差し置いて最強を名乗り出るとは…勝負しろ！」

勝負しろ 勝ち続ける程度 n (ry

「うわあ！もう嫌だ！後で覚えてくださいな！？」

さあ、始めました、馬鹿^{チルノ}VS佐野

ハハハ、愉快愉快

いや…待て、幼き少女に手を上げるのは…

ん？いや、手を上げるの俺じゃないし、アイツ妖精だし、別にいいかー

佐野の説明だと強いらしいけど…しつたこつちやねえ！

「ああ！これだから…！馬鹿は嫌いなんだッ！！まあいいや！行つて来ます！」

いい盾役だねえ…

そして所謂弾幕ごっこが始まったわけだが…

ここで問題発生、佐野が空を飛べない…

スタミナが影響に出やすい

時間との戦いつてか…

チルノ（よくよく考えれば同じくバカといわれる俺としてみれば同情できる）は

まず、青い弾を二重に撃ち、更にそこに重なるように氷の散弾を撃つ
「どう見てもUltraの弾幕です、本当にありがとうございました」

あれが通常攻撃だと…！？無理だ！避けられねえ！

…が、あれは威嚇射撃なのか、全く佐野に命中しない、というか、俺にも当たらない

なるほど、最強ともなれば威嚇をする訳

「あたいの先制攻撃を避けるとは…っ！」

馬鹿だった…っ！！フオローしようとしたが無理だった…っ！！

「佐野、頑張れ、超頑張れ」

そんな事を言つてると、チルノ（俺とコイツと一緒にしないで欲しい、ここまでバカではない）はカードを取り出す、…あれがスペルカードか？

「電符『アイシクルフォール―Easy―』！」

ここからが本番という事で…

チルノが無数に打ち出した氷の弾が、徐々に減速していき、雪のよう
うに自由落下をする…

む、これは考えてるな、自分で当てられなければ運に任せればいい、
下手な鉄砲数撃ちや当たる、よりは頭がいいか…？

いや、自分で当てられない時点でバカだけど…

「チルノちゃん、勝負だ！全部の弾を避けられたら俺の勝ち！文句
無いね！？」

「ふん！あんななんかに避けられるはずがないもん！」

あ、バカでした

勝負を認識した 勝ち続ける程d（ry

見事に佐野を避けるように弾が動き、チルノの完敗…

「じゃあ、今度はこちらの番だ…！」

佐野もスペルカードを取り出す、これでファイナルベントとかだったら笑えるよな

「勝符『愚か者への裁き』！」

一体…どんなスペルカードなんだろうか…結構気になってみたり
佐野の弾幕は、まず赤色の弾が曲線状の弾道を描き、チルノの横を通り過ぎるように動く、次に青い弾が同じような弾道で、今度は別角度からチルノの前を通るように動く、実はかなり弾幕が薄く、普通に避けられる…

「オマエの攻撃の安全地帯見つけたり！」

チルノは弾幕を器用に避け、曲線状の弾道によって出来上がった隙間に入り込む、…あ

愚か者への裁きってそういう事…

「引つかかった！」

通り過ぎていった弾幕がUターンし、中央の隙間に向かう、そしてその弾が他の弾に激突した瞬間に、虹色の爆発を起こす…

回避不可能ではないが…かなり難しい、ってか無理に近いだろう！確かに綺麗だけど！

そして悲鳴をあげる間もなくチルノは消滅…確か復活するん…だよ
ね？

「ふう…バカで助かった…」

「なあ、さっきのスペルカード…」

「ああ、愚か者への裁きですか？あれは普通に中央に入らないで避け続ければ割と簡単なんですけど、中央の安全地帯に入り込むとほぼ回避不可能っていう…トラップ系ですけど——」

「——馬鹿じゃない限り引つかかりませんね」

「ってか…一撃で葬り去るとか…威力高くな？」

「かなり高いですよ、俺の弾幕の威力は勝ち続けた回数と比例するつばいんで」

ああ、事前に143回勝利してるもんね…そりや強い…
俺はこの時、かなり楽しんでた、ここでチルノを倒した事が、あ
の悲劇を生むなどは知らずに――

東方編2 一方的

城戸が目覚める前の晩、暗い森の中を歩く一人の青年が居た

「どうなってるんだよ…？橘さんは急にいなくなるし…いや…俺がいなくなったのか…？」

彼は暗くなり、見えなくなる地に不安を覚えながらも森の中を彷徨う
「もしかして…剣崎さんもここに来たのか？それなら急に行方不明になっ」

「ねえねえ」

青年は突然後ろから響く声に驚きながら、後ろを振り向く

そこには金髪赤眼の頭にリボンのような物をつけた黒い服を着た少女が居た

「な、なんだ…子供か…駄目じゃないか、こんな夜に出歩いちゃ…最近は何事だし、夜中の公園でシンゴー！シンゴー！って全裸で叫ぶ人も居るし…」

「そーなのかー」

まるで話を聞いてないような返答に青年は呆れながらも少し冷静になつてきたので、とりあえず少女の手を広げたポーズについて尋ねる
「そのポーズ…何？」

「『聖者は十字架に磔られました』っていつているように見える？」

「いや…タイタニツクのポーズに見える…」

「そーなのかー」

青年は同じ返答に本当に話を聞いているのか？という疑問を持ち始めた頃

「ところで――」

トシワマ
青年の古傷をえぐる作業が始まった

「――あなたは食べられる人類？」

「――ッ!？」

青年は一瞬で暗くなつた辺りに恐怖心を抱いた、通常の間人よりも

数倍の恐怖心を

（暗闇だ…暗闇が…俺は闇の中にいる…！）

走馬灯のように自分の記憶が流れ込んでくる
持ち去られる自分

駅のロッカーに閉じ込められ泣き続ける自分

警察の手によってロッカーから救い出され祝杯を受ける自分

「嫌だ…！闇は嫌だ…！」

思わず走り出した青年の足を何かが掴む

（掴まれた…！？この子…俺を本気で食うつもりか！まさか…上級
アンデット…！？いや…アンデットはジョーカーを除いて全て封印
したはずじゃ…！？）

青年は思考が安定していても、精神が闇に怯えているのがわかった
『人間、お前…闇が怖いのだろうか？ならば私に身を任せろ…救って
やる』

突如頭の中に声が響き渡った

（お前は…！カテゴリーA？！でもお前は完全に封印されたんじゃない
…！）

『違うな…貴様は今カードを持っていないだろう？私は——』

『——お前の恐怖心に取り付いたカテゴリーAの残留思念とでも
言っつかない』

『それより人間、このままだとお前は確実にこの妖怪に食い殺され
るぞ？』

その言葉に青年の心は大きく揺れた

（黙れ…！俺はお前の力は借りなくても…！）

ゴキリ、という音と共に右足に鋭い痛みが走る

（折られた…いや、噛み千切られた…！？）

遂に青年の恐怖は頂点に達する

『安心しろ、すぐに貴様に体は返すさ、貴様が死んでは私も困る——』

『——さあ、こちらは優しい闇だ、身を任せろ、全てを闇に任

せる』

青年は、意識を放棄すると同時に自分の弱さを怨んだ

■ 「わりと美味しいね、不味かったらどうしようかと思ったよ」

暗い闇の中で右足を噛み千切った妖怪が楽しそうに満面の笑みを浮かべながら獲物の青年に話しかける

「それは良かった、しかし――」

先程とはまったく違う青年の声、妖怪はまだ喋れた事に多少驚きながらも再び噛み付こうとする

「――余り調子に乗るなよ？妖怪風情が」

妖怪の口は青年の肉体に噛み付くことはなかった、そして空中に浮く首を掴んで持ち上げられたのだ

「貴様等妖怪程度に生命の始祖である不死者を害することはできぬ、いや、許されぬ」

妖怪は飲み込めない現状に驚きながらも、青年が何故立てたのかという疑問を解くために、闇を閉じる…すると、青年の足は完治していた

「あなた…人間のはずじゃ…？」

「ああ、人間だ、いや、先程まで人間だったと言っべきか？」

青年は掴んでいた妖怪を投げ捨て、森の道を歩みだす、妖怪もそれを追う事はしなかった

「素晴らしいな、この世界…いや幻想郷は…！今までは心までしか支配できなかったが、今では体を完全に支配できる…！ツハハハハハ！！」

暗い闇に最強を手に入れる者の声が響き渡った

■ 「で、どうするよ？」

佐野に声をかける、いやー困った…襲撃者のバカを倒しはいいが…これからどうしようかと

「チルノちゃんが復活するまでここで待機する…か？」

「お前消し飛ばしたよな！？どんだけ時間掛かるんだよ？！」

「三日ぐらい…？」

バカか！

その時、突然俺の二メートル先ぐらいに灰色の壁が浮かび上がる、そして、その壁が一メートルほど後ろに下がると、茶の帽子に茶のコートを羽織った中年が出てきた…

「まさか…！スキマ妖怪！？」

「私はこんなじゃ無いわよ！」

突如右から怒鳴られた！？

一応見るが誰も居なかった…！びつくりだよ…！

「龍騎、何故お前がここに居る？」

「俺が龍騎だと知っている…？」

何だ…？この中年は…何を知っているんだ…？

「神崎の手駒、という事が…つまらんな、私がこの程度の人間に潰される訳がない」

中年の前に灰色の壁が再び現れ、先程とまったく同じ動きをする、そうすると今度は

針金のように細い体、少女のような繊細な肌に白い髪の15、6歳ほどの少年

黒く禍々しい『何か』で相手を威圧させる、鎧を着込んだ美少年

アクセラレータ

「一方通行に滅亡の子、クリア・ノート、彼等が貴様等の相手だ」

「そういうことだ、まア、楽しませてくれる事を期待してるぜ？」

「人の為に動くのは気に障るが、パートナー無しで呪文を唱えられるように、というのは魅力的だな、消させてもらおう」

「きみは ゆくえふめいになっていた クリアくんじゃないか！」

「一方通行だと…！？こんな物呼び出して喜ぶか、変態が！」

冗談を言っている場合じゃない…！なんてもの呼び出してるとんだ！？

一方通行は全ての『ベクトル向き』を変換させる能力を持つ少年、ちなみに『インデックスとある魔術の禁書目録』のキャラだ

「他の次元からの人物の移行に成功…私の力も高まっているな…」

「先輩やバいですよ…向こうの華奢な方は知りませんが、向こうの美少年はクリア・ノート、『消滅の力』を持つ魔物の子です…ちなみに『金色のガッシュ!!』出身」

ああ、そんな漫画ありましたね…

「私の能力『次元を操る程度の能力』…まだ八雲紫ほど自由ではないが…まあいい、いずれ幻想郷は私の物となる…!」

こいつは何を言っているんだろうか…？たしか、紫って…あれ？なんだっけ…？まあいいか…

「私の名は『鳴滝^{なるたき}』覚えておけ」

そういつて中年は姿を消す

「いやー先輩、感謝してくださいよ？俺の能力でまた助かつちゃうんだから」

「待て！一方通行にその能力は」

「おい！そのロリコンっぽい華奢な奴！これは勝負だよな？」

「ああ？勝負だア…？ハッ！違エなア！コイツは『一方的な虐殺』だ、そして俺はロリコンじゃねエ！」

「Oh…No…」

一方通行は首にチョーカーを付けていない、つまり全盛期か…！俺達終わった…

「先輩、すみません、能力効かなかったみたいです」

「落ちて着いてるな！逃げるぞ！ヤバイ！マジヤバイ！確実に殺される！」

佐野と俺が一斉にダッシュ、マジヤバイっす

「動き回ってんじゃねエぞ！」

「面倒くさいな…早く消そう『リア・ウルク』」

「あ、そうだ、アイツ、身体強化の術使った、っていうか人間の足じゃ逃げ切れない！」

「一方通行もベクトル変換で何処かの変態機体^{フラジール}に勝るほどのスピードが出るんだった！」

ナニこれ？負けイベント？

「先輩、勝負です、逃げ切ったほうが勝ちという事で」

逃げ切ったほうが勝ち 勝（ry 俺死亡

「見捨てるなよ！そう簡単に見捨てるなよ！」

「見捨てなければ 生き残れない！！」

まるで悪魔のような男だ！！せめて『撃退したほうが勝ち』とかにすれば、何とかなったかも知れないのに！

即座に回り込まれる、しかし、佐野は右に逃げる

「一匹逃がしたか…まあいい」

追いかけてくれ！お願いだから！

「主人公補正で何とかなるに違いない…！」

一応俺は戦闘態勢に入る、が

「なんか冷めちまつた…帰らせてもらうぜエ」

「人間を消しても面白くないか…山にでも行くかな」

あるえー？主人公補正で飽きられた！？なんかちょっとム力つくけど…

助かるならいいか…

「何をしている！早くこっちに来い！」

右手が急に引かれる、佐野…！後で殺す！

「大丈夫か！？」

俺の手を引いた人物は、少々茶がかかった黒い髪に整った顔

「何でこの世界にはイケメンが多いんだッ…！」

イケメンの男の人でした

■

あれから全速力でダッシュし、人里まで行き、寺小屋に逃げ込んだ
そして佐野を発見し、散々恨み言を言つて、落ち着いたところを、
寺小屋に居た（佐野によると）ワーハクタクの上白沢かみしらさわ 慧音けいね 先生
による頭突きとありがたいお言葉を頂戴し、再び俺を救ってくれた
イケメンとの会話に入る

「いやあ、助かりましたよ、で、お名前はなんと申すのでしょうか

「俺は城戸真司です」

「先輩、媚売ってどうするんですか…」

「黙れ、人でなし」

「はは…僕は白峰天斗しらみねたかとと言います、そして、貴方はもしかして神崎士郎のライダーではないでしょうか？」

あれ？白峰さんも知ってるのか…俺って有名人か…！？

「あのライダーシステムは素晴らしいですよ…！鏡の中に入り込むなど…一体どういう理論なのか気になりますね…」

「研究バカ…なのか？いや、コッチを持ち上げて神崎に合わせろ、という感じなのかな？まあデッキ持っていないから関係ないけどね…」

「ところで…さっきの戦いでアイツ等が攻撃をやめたのは…」

「ええ、僕的能力ですよ、『心を凍りつかせる程度の能力』、彼等の戦闘意思を凍りつかせたのです」

「しかし、アイツ等、放って置くとかなり危険なんですけど…」

「安心してください、彼等にはリミッターをつけてあります、今頃は全ての心が凍りつき、事故死でもしているでしょう」

意外とえげつない事する！この人！

「あ、そうだ白峰さん、携帯持ってますんか？」

「ええ、持っています…」

「少し借りさせてください、神崎と連絡を取りたいので」

白峰さんは快く賛成してくれた、それと廊下に出て、外の空気を吸ってくるそうだ

『はい、こちら神崎です』

「こんにちわ神崎君、幻想郷は住み心地が良くてとても快適です」

『城戸かよ！？御免なさい！御免なさい！御免なさい！』

「貴様の行った悪事は謝って許される物では無い…！万死に価する！」

『ま、まあ、落ち着けよ、ちゃんと目的があって送り込んだんだからさー！』

「あ、そうなの？ああ、鳴滝とか言う奴？」

『お、もう接触があつたか…』

「散々だった…」

『お前の目的は、『鳴滝の抹殺』だ』

「抹殺…！？お前、俺が人を」

『殺せるだろう？今のお前なら』

「一体どういふ…」

『お前はFクラスで生き残るための残忍さを身に着けたはずだ、人つ子一人簡単に殺せるだろう』

「！」

確かに、今の俺は人を殺しても何も思わないかもしれない、特に、相手が悪事を働こうとしていれば

「最初から仕組まれていたのか…！？」

『まあな、バカテス世界の構築もそのためだ、まあ…当初はACF aの世界の予定だったがな…』

超高速メカニックバトルアクションゲーム

『鳴滝、アイツは最近調子に乗ってきてな、自分の能力が高まってきたから、という理由で幻想郷を乗っ取ろうとしている』

「…？待てよ、能力、ってアイツ、どこ出身だよ？とある系統とは毛色の違う能力だったぞ？」

『アイツはな…幻想郷出身だ』

『八雲紫、即ちスキマ妖怪の能力使用のたびに、少量のスキマの残留みたいな物が出る、その集合体が鳴滝^{アイツ}だ』

「…超展開か！」

『気にするな、まあ中年なのは…搾りかすって事だろ』
酷いな！かなり酷い！

『そして、アイツの能力『次元を操る程度の能力』は八雲の『境界を操る程度の能力』の劣化版だな、物理的干渉しかできない、しかし、アイツの力は最近高くなってきてな、世界を構築するぐらいなら出きるようになったな』

そつなのか…で、幻想郷を乗っ取ろうと…

『はは、そういえば最近、自分で作っていた実験の世界を『ディケイド』に壊された、とか言ってたっけな…』

「なあ、神崎…お前もしかして…」

『気づいたか？そうだ、俺も幻想郷出身さ、気がつけば鏡の中に存在しててな、驚いたよ、まあ鏡の世界を渡って現世に戻ったがな』

「つまりお前が…ミラーモンスター一号って事か…」

『ああ、他の奴等は俺の心情を反映した奴だ、困ったもんだ』

「じゃあ…」

『優衣は違う、あいつは人間だし、アイツの兄、まあ幼い頃の神崎も人間だ』

「…？待てよ…？それって…」

『ああ、そうそう、優衣と引き離された俺は自害した、そしてそれに入れ替わるように俺が神崎となった』

超展開か！

『ついでに優衣も高熱で死んでいる、その後の優衣は俺が作り出した幻影のような物だ』

「信じられるかよ…！」

『信じられなければ最終話のラストシーンを見るといい、白い空間で人間の神崎と優衣、妖怪の俺と優衣が映ってるから』

「何の話だよ？！」

『ちなみに俺の能力は『人に理解できない理論を打ち出す程度の能力』だ』

なにその役に立たない能力！

『優衣は『人外を人に変える程度の能力』だ』

「霧河はそれでああったのか…」

『アイツも幻想入りしているぞ』

「マジかよ！？」

『んじゃ、そろそろ切るぞ、国際電話は高いからな…』

「国際電話！？」

■

廊下で白峰は苦しんでいた、柱に寄りかかり、息を荒くする

「クッ…！能力の使用で凍結が弱まったか…！王気取りの弱者が…
っ！」

ゆっくりと柱から身を離し、柱を思いつきり殴る

「この体は俺の物だ——」

「——登大牙ッ！貴様は凍り付いているッ！」

そして、深呼吸をすると、白峰は元の正常な状態に戻る

「さて、そろそろ携帯を返してもらわないとね…生憎手持ちは少ないんだ」

東方編2 一方的（後書き）

今回はかなり長くなってしまいました、申し訳ない…

東方編3 揺さぶる闇

早朝、霧の湖にて

「驚いたわ…一撃で消し飛ばされるなんて…」

「よく無事だったね…」

二人の話し合っている姿があった、片方は佐野に消し飛ばされた氷の妖精、？ことチルノ、もう片方は緑の髪を横で纏めているチルノの親友、大妖精^{だいようせい}

「当たり前じゃない、あたいはさいきょーだもん」

自信満々にいうチルノに大妖精は苦笑いを返す

「最強、か…大口を叩くものだ」

そついい、木の影から一人の青年が姿を現す、以前夜道で暗闇に潜む妖怪を撃退した青年だ

「またヘンなのが来た…」

恐らく『ヘンなの』とは佐野と城戸の事だろう

「確かお前は最強になりたいんだよね…？ならば私が手伝おうじゃないか」

「チルノちゃんは人の力を借りて強くなろうとなんかしません！ほら、行こう！」

そういつて大妖精はチルノの手を引っ張り、青年から逃げようとする、しかしチルノはまったく動く様子が無い

「本当にさいきょーになれるの…？」

そして、眼に光が無かった

「勿論だ、そして貴様は頂点に立つ」

「こちら側へ来い、此方は優しい闇だぞ…？」

■

寺小屋で一晩を過ごし、翌日

「さて、佐野、何処へ行こうか？」

「ん、セオリーに従うと主人公に会いに行くべきでしょうね」

「主人公…たしか…博麗^{はくれい} 霊夢^{れいむ}だっけ？この世界は名前が難しい奴が多くて困る…」

神社か…最近行つてないな…

「あそこは別に妖怪にも出会わないし、安全ですし、迷う必要は無いですね」

「神社といえは賽銭箱から金をパクる事が主流だよな…」

「残念ながら賽銭箱はスツカラカンでしょう」

行く価値ねえ！！

■

「で、とりあえず博麗神社に来た訳だが…」

お賽銭箱の前で財布ごと入れる馬鹿

端っこでヤンキー座りしている兄弟と思われる二人

肩の部分の生地が無いという変わった服装の人物に何かを訴えてる緑の髪をサイドに纏めた少女

「危険だらけじゃねえか…！」

特に端っこにいる奴、笑ったら殺される

そして賽銭箱の前で財布ごと突っ込んだ馬鹿はどう見ても海東純一、幻想入りしてたのか…ッ！！

あっちの肩の部分の生地が無い変わった服装の奴は恐らく噂の巫女さんだろう

もう一人は…佐野が言っていたチルノの親友こと大妖精か…？

ハハハ…選択肢が三つあるわけだが…

1・ヤンキーに関わる 今俺を笑ったか…？

2・海東 ようこそいらつしやいました！！

3・大妖精 チルノを消し飛ばした犯人なので善良な巫女さんに殺される

「どれも駄目じゃねえか…！！」

「え？1、2はまだしも3はありえないと思いますよ？」

ん？何で？

「だってそんな…あの巫女さん、凄い他人に無関心だから…」

言われてみれば、必死に訴えられているのに聞き流して掃除している
なるほど、3が生存ルートか…！

『だから！チルノちゃんが変になっちゃたんです！』

『あーはいはい、アイツは何時でも変よ』

…酷くない？それ

っていうか生き返ったのか！

「おや…？これは…！城戸君じゃないか、久し」

「貫け！俺の右手エーツツツ！！！」

寄ってきた不審者を思いつき殴る

「そして時に先輩、白峰さんが霧の湖に向かったのを言っのを忘れていた」

「え？別に言わなくてよくない？」

「いやさ、チルノちゃん、気が変になったんでしょ？テンプレで行くと恐らく襲われてるだろう」

「確かに…ってか何故ちゃん付け、気持ち悪いぞ」

「そこには触れない約束」

■

あの後大妖精が同行し、お互い謝罪を繰り返しながら霧の湖に来た訳だが…

第一発見人物 惨敗した白峰さん

「Oh…No…」

遅かったか！状態である

まあ、十中八九チルノさんにやられたのだろう…可愛そう過ぎる…

「なんて ひどい ことを！」

「佐野、レトロ化するのを止める」

「チルノちゃん！なんでこんな事…」

ん？よくみれば向こう側に青い顔をしたチルノさんが居るじゃないですか

「あ、あたいは…！間違ってなんか…！間違ってなんか…！」

「ん？おかしいな…勝って誇らないなどチルノちゃんでは無い、今、

彼女は…！操られている！」

「いや、それは随分前からわかつている事だろう」

…んん、涙目のチルノさんは可愛いかもしれない

「間違つてなどいない」

木の陰から一人の青年が歩いてくる、が、どうでもいい、涙目のチルノさん可愛いわー

「自分より強い奴を倒し、生き残る、それが世の中の定めた事だろう」

いやはや…何故だろう、チルノさんに見と

「こちら側に戻って来い！先輩！（腹パン）」

「ゴッ！？……勝手な事ばかり言ってるんじゃないぞ！中二病患者が！」

主人公は遅れてやってくる物だ

「自信家が自信喪失するとなあ！面倒くさいんだよ！」

「…何の話してるんですか…先輩…つかコイツに敬語使うのが馬鹿らしくなってきた…」

「だがなあ！むちゃくちゃ萌えるんだよ！」

「死ねばいいのにこの単細胞、今までの話聞いてないよ全ツツ然！」

「え？じゃあ何の話してたんだ？」

全く分からない…

「いやな、私が出てきて、チルノを洗脳してな、そしてコイツを私が食おうとするシーンだ」

「ゴメン、黒幕さん、最後のほうはネタバレになってるよ」

「何を言っている？とりあえずチルノは頂こうか」

そついつて青年から、黒い気体が溢れ出し、チルノに憑依する

「よかった…一瞬、極度のロリコンなのかと思っただぜ…」

「そつちの意味で取ったんですか？俺はシャーベットアイスにでもするのかと…」

チルノシャーベットアイス ブルーハワイ味 ￥1000円

売れそうだな！おい！

あ、でも食うと馬鹿になる、とか言われそうだな…

「そして更に、この人間の能力を吸収すれば…」

能力を吸収だと…！？吸血鬼か！

「ちょ、先輩！助けましようって！白峰さんの死亡フラグが無茶苦茶立ってますよ！」

「いや…待てよ、ここで助けに入ると俺達が死ぬ可能性があるだろう？」

「…確かに、じゃあ、この場は黙って見る、という事で」

うんうん、最善の策

ってあれ？大妖精さんが居ませんか？

「大妖精は？」

「巫女呼びに行きました」

「無駄な事を何故…？」

「いや、最善の策だと思いますけど…」

まあ、いいか…

とか言ってる内に憑依チルノは白峰さんから能力を吸い終わったのか、体中から馬鹿げた冷気を放出し、自分を氷を氷の球体で包む

「あー所謂EXチルノって事が…ダークサイドのKIを受けたんですね、分かります」

「SUMOUは関係ないぜ、RIKISSIも居ないし」

そもそも居たら俺達イラネ

「やばい気がするな…佐野は白峰さんを連れて巫女呼びに行け、この場は俺が保とう」

「死亡フラグ建設お疲れ様です」

「いいから行けよ！」

すると佐野は真顔で白峰さんを担いで走っていった…

せめて生きて会おうぜ！とか言って欲しかった…

そんな事を言っていると、氷の球体が割れ、中からチルノがそのまま16まで成長したらなるであろう、姿になった憑依チルノが現れ

た…

ヤベエ…俺の好みのストライクゾーンだわ…

「中々の力じゃないか…少なくとも、あの人間よりは強いだろう…」

まあ、上の上って所か」

さて、自分の能力も分からない俺ですが、どうしたらいいかな…？

ハハハ…

東方編 4 絶対凍結空間

「人間、言って置くが、これは弾幕ごっこ何て生易しい物ではない、殺し合いだ」

「知ってる、誰よりも知ってる！だからどうしようか悩んでるんじゃないか！」

憑依チルノ（以下EXチルノ）はそばに居るだけで凍傷を負いそうな程の冷気を周りに放出しながら淫靡な笑みを向けて来る

コイツ…誘ってるのか…？

「お前…まさか…」

「やっと気が付いたか、そうだ、私は雌…いや、人間としては女だ」
そうだったのか…！！気が付かなかった…！！

「何故お前は最強を目指す…？」

「カテゴリーK、と言っても分からないだろうが、ソイツと私は番^{つがい}だったのだが…」

うつわ、ドロドロの話が始まりそうだな…

「戦いが始まれば私に見向きもしない、そして何時からかな、私を邪魔だと言う様になった」

聞かなければよかった…

「そこで私は考えた、力を示して奴の上に立ってやろう、と…しかしカテゴリーAの私がカテゴリーKに勝てるはずも無く、人間の力も利用したが、奴はカテゴリーQと協力し、私を封印した」

…で、何の関係があるんだ？

「そして、残留思念、という形ではあるが復活した私は奴に復讐を誓い、力を求めた」

結局私利私欲か…

「というのは全て嘘だ」

「嘘かよッ…！」

何コイツ？こんなキャラだっけ！？

「ってか、私は雄だ阿呆が」

阿呆がつて言われたよ！

「最強を屈指したのはただ単純にそれが使命だったからだし、というより不死者^{アンデット}は全員そんな感じだぞ？」

なんかもう…どうでも良くなってきたな…

「それじゃあ、お喋りは終わりだ」

「あ、最後に一つ、どうやってチルノを洗脳したんだ？」

「ん？時間稼ぎか？まあいい、喋るのは嫌いじゃない」

なにこのギャルゲーによくいる攻略難易度が難しいキャラ

「それはこの男の能力『心の光が影を増減させる程度の能力』で影の部分を増幅させたら簡単に壊れた」

「まじか…あの涙目の顔、無茶苦茶可愛いよな」

「貴様、結構悪趣味だな、幼女の泣き顔に萌えるとは」

「え？そう？普通じゃね？」

何気に会話がはずむ、あ、楽しいわ、コレ

「それじゃあ、こういうのとか、好きか？」

EXチルノは涙目上目遣いで此方を見

「ああ、もう死んでもいい…」

「それじゃあお望み通り 零符『固定氷弾』」

「誘導尋問かッ…！」

冗談を言っている場合じゃない！複数の氷弾が飛んで来る、俺は何とか避けようとしていたが、完全に油断していたため、両足に着弾する、そして足が地面に固定される

「死なせてやる」

EXチルノは右手に巨大な氷弾を作り出し、此方に打ち出してくるあんな物当たったら即ミンチじゃねえか！

「う、うわああああいいいい！！」

ヤケクソで右手を出して見る、いやこれだと何処かの不幸少年の能力かと疑われそうだからやっぱり両手

そうすると…俺の目の前の塊がバラバラに碎け散る

「なん…だと…!?」

「俺の能力がやっと分かった…『生き残る程度の能力』これで間違いは無い…今まで主人公補正だと思っていたのは全て俺の能力か…」
「つてか役に立たなくね?! 何この能力!!」

「は…? つまり、お前は殺せないと…?」

「そういう事だな…なんか、ゴメン」

「つまり、ここから一方的な攻撃タイムか…」

「…求符『降り注ぐ希望』…マジゴメン」

本当にEXチルノが可哀想に思えてくる

そして今気が付いたが、スペルカードは三枚補充されている、なるほど…これを基準にしろつてか…

しばらく何も起こらなかったが、しばらくすると上からエネルギーの弾丸が大量に降り注ぐ

EXチルノは既に戦意喪失していたのでマトモに被弾、…何だろう、最初の頃の最終決戦つばい雰囲気は何処へ…

「ッハハハハハハ!!」

突然EXチルノが笑いだした…壊れてしまったか?

「馬鹿な奴だ! 勝てないと分かった時に全てを諦めるとは…! ツハハハ! まあ、それで僕が出てこれたなら、よしとするか…」

…僕? コイツ…先程までの奴と違う…!?

「久しぶりですね、城戸君…登大牙の体は逃がしたが…まあ、妖精の体が手に入ればそこまで必要ではないか」

「お前…誰だ?」

「忘れられるとは…余りにも酷くないか? 僕ですよ、白峰天斗です」

「そんな…!? さっき佐野が連れていったはずじゃ…!?」

「あれは僕が憑依していた体ですよ、今ではもう入りません」

「コイツ…! 何が言いたいのか理解できない…」

「では、片付けましょうか 拒符『能力遮断』」

能力遮断…!? まで、このスペルカード…! 被弾したら此方は無能力化か!?

しかし、避けれるはずも無く、被弾する…

「僕、いや、この体の能力は『全てを凍結させる程度の能力』…これで能力の活動を凍結させる事も可能って事ですよ」

あれ…？これ…非常にピンチじゃないですか？

「そして、時間さえ、例外ではない 停符『時空停止』」

一瞬で体中の急所、全てに強烈な蹴りを入れられたようだ…

「がつ…！？ちょ…肉弾攻撃！？」

「ハッ！…では、苦しいでしょうから、終わりにしましょうか？

終符『絶対零度』」

白峰の周りに氷の槍が大量に浮かぶ、そして一斉に打ち出される、他の地面に当たった槍が破裂し、その破片が再び氷の槍となり、降り注ぐ

「冗談じゃねえってば…！」

俺が本当に諦めかけた時、突然俺の周りに壁が浮かび上がる…中央には文字のような物が見える

「…K…I…NG？キング…？王って事か…？」

まさか、この短時間で俺はキングフォームという最強フォー

「大丈夫か！？」

ムを手に入れたと思っていた時期が俺にもありました…うう

「あれ…？白峰じゃないか？」

「ふん、アイツは目の前に居るだろう、俺は登大牙、アイツに心を凍りつかされ眠っていた」

そして、あの…えーとアンデット？が能力を吸収した事で開放された、と…はあ…

「ハッ！今頃来ましたか、王者気取りの弱者が…！」

「人に憑かなければ何も出来ない貴様には言われたく無いな…」

…あー、もう介入の余地無し…か

「貴様に——」

「王の判決を言い渡す。死だ…！」

東方編5 決着

「王の判決を言い渡す。死だ…！」

「ハッ！古い王者気取りの弱者が何を言ってるんですかねえ？ハハハ…目障りなんですよ…！」

「奇遇だな、俺もそう思っていた所だ、特に、

人間の進化に貢献する3WAはな…！ 断罪『ルイ16世の末路』」

おおっ！ギロチンか…！大牙さんの後ろに1793枚程のギロチンの刃が飛び交い、一斉に白峰に向かって…発…射…

「えげつねえ…！人間相手に使ってはいけない技TOP10に入る！絶対1位だ！」

しかし白峰は即座に回避、おおっ…イカすね…

なんていつてる場合じゃない！早く加勢しなければ！

立とうとするが、足が思うように動かない

「無理をしないほうがいい、一瞬で行われたから分からないだろうが、君は相当なダメージを負っている」

あれ？この大牙さんって、あれか？敵には冷酷で見方には優しいという、高潔騎士キャラか？

とりあえず動けないので戦闘を観戦

白峰は氷の弾を乱射しながらも、ギロチンを避け続けている

なるほど、乱射しているように見えるが、ギロチンを打ち落としているのか…

バカじゃないチルノは強い、と…

ってかさあ、一番最初のチルノの泣き顔も可愛いし、次のEXチルノの淫靡な笑みも素晴らしいし、今の状態の狂気に満ちたような笑みも素晴らしい

ナニカサレタヨウダ

「ハハハ、ギロチンとは、悪趣味な…絶符『凍結光線』」

白峰は両手を合わせ、分裂し、相手を包み込むように攻撃する光線を乱射する

おそらく当たれば凍結だろうな……

「チッ……いちいち面倒くさい……！大罪『愚民共の反乱』！」

大牙さんは、両手を広げると、大量の針の様な弾が光線を打ち消していく

何故だろう、凄い格好いいかな……

そして、打ち出した弾の何発かが、白峰を打ち抜く

「——ッ！？ぐ……！ハハハ……妖精でも痛みは感じるのか……！チッ……不利だな……召喚『ケルベロス』！」

変わった名前だな……まさか……召喚獣とかか……！？

「普通の弾幕ごっこでは出せないが……これは殺し合いだ……ルールなんてありませんよね？」

白峰の後ろに巨大な三本首の犬が召喚される、しかし……普通のイメージとは違って、氷で出来たケルベロスだ

「確かに、しかし、自分だけが召喚できると思うなよ？召喚『狂乱のサバト』！」

そして、大牙さんの後ろには某天空の城に四つの老人の顔が並び、全てをステンドグラス製にしたような怪物が現れる……なあーにあれえー！？

後ろで怪獣バトルが繰り広げられ、目の前で男と女が弾幕ごっこで遊ぶ、

「オウ……シュール……否、エキサイティン！」

つてか、佐野と大妖精は一体……？

■博麗神社にて

「いやあー！このお茶上手いですねえー感動しました！」

「……いやさ、アナタ、何か用事があったんじゃないの？」

「？それより、俺を雇いませんか？結構オトクだと思いますけど？」

「無料^{タダ}でなら雇^{タダ}つわよ」

「交渉決裂という事で、とりあえずもう一杯ください」

■

大妖精は何処へ…！？まさか…佐野に縛られ放置か！？…オウ…シツトウ…

「ツク！？次で終わりにしましょうか…！禁符『零零凍結』！」

「言われなくてもそうするつもりだ 結末『王の判決』！」

おおっ…ラストシーン？

白峰の方は空中から超巨大な氷弾を落す、なにあれ？地面に落ちたら地面が消し飛ぶ！

対して大牙さんの周りには、チェスのルーク、ビショップ、クイーン、キング、が立ち、それぞれが自分の名前の紋章を繰り出し、底から多数の光弾が打ち出される、そして、それがぶつかり合うたびに虹色の爆発が起き、光弾が次々と打ち出されいていく、そして、氷弾は破壊され、白峰はまともに被弾する

「馬…鹿…な…この、私が…死ぬのか…？嘘だろ…！？嘘だ…ッ…！」

そして、白峰から冷気があふれ出していき、消えていく、そしてチルノに戻る

ふうむ…一枚くらい写真撮って置けば…良かった…！

■

しばらく時が経ち、佐野が大妖精と共に帰ってきた、団子が美味かった、という話は聞かなかった方針で

「いやぁー先輩ボロツボロですねえー、ハハハ！」

「お前何しに戻ったんだ…！？」

只今肩を貸して貰っている、が、佐野が躓き転ぶ、そして、自然と俺が押し倒す形になる

「ちょ、重ッ！！怪我人が重いつて本当なんだな！」

これは非常にマズいぞ…！複雑な状況だ

俺の顔の十センチ先に佐野の顔 事故を装ってイケる

あら？！やたらと簡単…！

「ちょ、先輩早く退けと…！？何考えてるんですか！？先輩！？顔近づけんな…！チツ！そおい…！」

今度は佐野が上になり、俺が押し倒される形になる
っていうか、両手押さえられているから襲われた形

「先輩！正気に戻ってください！ってかこんな所誰かに見」

カシャリ！（聞き覚えのある、KAMERAのシャッター音）

「…！？」

音源の方向を向く 天狗、正しくは鴉天狗

「別に人の関係に口は挟みませんが、なるべく人の目が届かない所でしてくださいね？」

音速を超えた速さで立ち去る彼女

「あのカラス野郎…ッ…！！ゼツテエー殺す…！百舌の早贄もずのようはやにえにしてやる…！！」

「記者の鑑かがみだ…！OREジャーナルにもああいう人材が欲しい…！」

！

佐野、あの人物を殺すなど、勿体無い…！！

翌日、俺達には同性愛者疑惑が浮上した

■

「今日は運がいいですね…こんな極上のネタ…絶滅したかと思いましたがよ…」

先程、事情を知らない人物が見れば確実に誤解を招く写真を撮影し

た鴉天狗、

射命丸 文が満足そうな笑みを浮かべながら歩く
しゃめいまる あや

すると、道の真ん中で倒れている人物を彼女は見つけた

「…？死体でしょうか、ならば特ダネ…いや、生きてますね…つまらない…」

人が倒れており、生きていてつまない、という心情とはいかなる物か

「この白衣…医者、でしょうか…年は40代中頃、ですか…特別面白そうでもありませんね…」

まさしく彼女が倒れる人物を見捨て、無視して歩き出そうとした時「う、うう…？ここは一体…？」

（なんとという在り来たりな起きかた…まあ、話だけでも聞いてみましょうか）

「…失礼ですが、ここは何処ですかね…？」

「はあ…、ここは幻想郷です、それ以上でもそれ以下でもありません」

幻想郷、と聞いた医者のような格好の男は驚愕の表情と共に笑みを浮かべ、笑い出す

「はは…ふはははは！まさか…哀れな家族の生き残り君に殺されたと思つては幻想入りですか…いいいいですねえ…！」

そして、再び医者のような人物は射命丸のほうを見る、そして目を輝かせ、その場から消える

「消えた…！？…幻覚…？」

「おおおお…！…！素晴らしい翼だあ…！！雄の孔雀より美しくケツアルコアトルスよりも力強い！」

消えたのでは無く、一瞬で背後に回っていたのだ、それよりも、この褒め方は通じるのだろうか？

医者は触れるか触れてないかのギリギリのラインで射命丸の背中から生えている翼を舐めるように撫でる

「ひゃあっ！？」

今まで感じた事の無い感触に射命丸は悶える、だが、言わせて貰おう、医者のような男は翼を撫でているだけである、他の部位には決して触れていない、断言できる

「や、やめてください…！」

「おお…と、いやー失礼、出会い頭にとんだご無礼を…」

医者のような男は素早く手を引っ込めた、射命丸はどこか何かが物足りないような感触に襲われ、なんともいえない様な感情を抱える

だが、言わせて貰（ry

「自己紹介が遅れましたね、失礼ですが、貴女のお名前は？」

「（正直にやめるとは思いませんでした……）はぁ……はぁ……普通は自分からだと思いますが……まあいいでしょう……」

「私は射命丸 文 と言います、新聞記者をやっています」

「文君、ですか、私は井坂深紅郎、いさかしんくろうと言います、職業は（変態）医者をやっています」

「今、変な読み方が……」

「気のせいでしょう、それより、宜しければ、ですが案内をしてくれませんかね？」

射命丸は、突然だが、予測済みの申し出が出たので、彼女は断ろうとしたが、何故か――

――断れなかった

「別に構いませんが？」

「助かりますよ、宜しく願いますね、文君……（浮気しても冴子君は怒らないでしょうか？ いや……表向きには死んだ事になっていますし、大丈夫でしょう……妖怪とは……私の好みのストライクゾーンまっしぐらじゃないですか……）」

この日から、君との思い出を作る旅が始まったんだ――（恋愛ゲ―風に）

東方編5 決着（後書き）

井坂！井坂！井坂！井坂ああううううわああああああああ
ああああああああああん！！！！

ああああああ…ああ…あつあつー！ああああああー！！井坂井
坂井坂ああうううわああああー！！

ああクンカクンカ！クンカクンカ！スーハースーハースーハース
ーハースー！いい匂いだなあ…くんくん

んはあつ！井坂・深紅郎さんの汗の染み付いた白衣をクンカクンカ
したいお！クンカクンカ！ああー！！

間違えた！モフモフしたいお！モフモフ！モフモフ！服服モフモフ
！カリカリモフモフ…きゅんきゅんきゅい！！

逃げ癖付いたの井坂たんかわいかったよう！！ああああ…あああ
…あつあああああ！！ふああああああんっ！！

冴子さんのフラグ立って良かったね井坂たん！ああああああ！
かわいい！井坂たん！かわいい！あつあああああ！

進化することも公表されて嬉し…いやああああああ！！にやあ
ああああああん！！ぎやあああああああ！！

ぐあああああああああ！！井坂たんがトライアルにやられた
！！！！あ…過度使用のツケが回ってきた…

井坂さんはラスボスじゃない？にやああ
ああああああああああん！！うあああああああああ！！

そんなあああああ！！いやあああああああああ！！はあ
ああああああん！！ウエザあああああ！！

この！ちきしょー！やめてやる！！視聴するのなんてやめ…て…え
！？見…てる？ポスターの井坂さんが僕を見てる？

ポスターの井坂さんが僕を見てるぞ！井坂さんが僕を見てるぞ！壁
紙の井坂さんが僕を見てるぞ！！

劇中の井坂さんが僕に話しかけてるぞ！！よかった…世の中まだ

まだ捨てたモンじゃないんだねっ！

いやっほおおおおお！！僕には井坂さんがいる！！やったよ尻彦さん！！ひとりでできるもん！！！！

あ、テレビの井坂さあああああああああああああ！！いやあああああああああああああ！！！！

あっあんあっああんあ琉兵様ああ！！さ、冴子！！若菜ああああああ！！ミックううああああ！！

うううううう！！俺の想いよ井坂へ届け！！地獄の井坂へ届け！！

…サーセンwwwまだ正気っす

東方編 6 サクヤ

「佐野さん、佐野さん、あなたは本物の佐野さんですか？」

「風都に帰ってください、先輩」

先日のEXチルノ騒動の翌日、ほぼ元凶とも言える青年Aは上城睦月かみじょうむつきという奴らしい、あのアンデットとか言われる奴は彼が元々いた世界の不死の怪物で、彼は先輩の剣崎一真けんざき かずまを探してる途中で森に迷い込み、妖怪に襲われたとか…

不運だな、名字の所為かも知れないな

「で、人を探してるんだって？」

「あ、はい、とりあえず剣崎さんと、あと…朔也さくやって人、知りませんか？（橘なんて良くある名字だしなあ…名前の方がいいよな…）」

「え…？咲夜さくや？紅魔館こうまかんに居るんじゃない？（PAD長に何の用があるんだ？）」

無理だ、何を言っているか分からない…悔しい…いや、別にいいけどね

「先輩、とりあえず紅魔館に行くことになりましたよ」と

「何それ？食えんの？」

「お前はるみやか、あそこはですね…えっと…まず、吸血鬼が住んでいて一週間引きこもり少女が居てですね、地下に幼女が監禁されていて、極めつけはメイド長がPADちょ（ザクッ）」

「うわあ！佐野の背中に急にナイフが！怖いな！紅魔館！！話題に出しただけでこれか！！」

「ふう、危なかったぜ…で、今から向かうんですけどねー、ああそうそう、役に立たない門番が居ますが、どうしますかね？」

門番か…さて、どうした物かね…ううん…門番を潰す方法は…

……サバト？

「大牙さん、起きてください、今12時ですよ！？どんだけ寝るんだ！？」

「失礼、余りにも暇だった物でな…つい寝込んでしまった」
とりあえず紅魔館へ

■ 「本当にサバトを使うのか…？」

「ああ、まあ、睦月と佐野が門番の交渉に失敗したら」

『佐野さん、この人寝てますよ？』

『あー…うん、今の内にさ、どうにか出来ないか？』

『あ、俺の『心の光か影を増減する程度の能力』で最高にハイってやつだ！状態にすればOKじゃ…』

『OK、洗脳系能力イイヨー洗脳系能力イイヨー』

交渉さえしないのか…？まあいいや、とりあえず四人で紅魔館に入…

…一番最初に目に付いたもの、紫髪の少女と中年の黒い服を着た紳士が戦う姿…

なんで俺が見るものは全てシニールなのかな！？

『私はですねえ、オカルトに非常に興味があるのですよ…それで貴女のお手並みを拝見した訳ですが——』

『——正直、失望してしまいましたよ』

物腰が柔らかいのに、言ってる事が結構キツイな…

『甘く見られた物ね、ゲホッ…ゼエー、ゼエー…ッまだ行けるわ』

『喘息、ですか、不調ですねえ！診察しましょうかあ？！ 晴天』

アジタートインフェルノ』』

何故だろう、親身なのか変態なのか…わからねえ、あとアジタートって演奏記号で激しく、苛立つて、とかいう意味だったよな

「とりあえず色々引っ掻き回されてるな…後はサクヤ、っていう人を探すだけか」

大牙さん、あれが見えないのか？いや、日常的に見慣れてるのか…？

「私に御用でしょうか？侵入者達^{ネズミ}」

突然現れる…絶壁？いやいや、あれは島田の特権だろう、まあ、若干…あるか？

「うわ、生のPADちょ（ザクツザクザクザk（ry）」

「佐野がハリネズミに！文字通りの意味で！」

「ふう、危な」

「何故死さない！？」

それよか…ナイフに突然現れる「何処かの変態風紀委員…違つとイイナ」

「この館の人ですか？朔也さくやという人物を探してるんですけど…」

睦月、佐野が気にならないのか？

「…だから、咲夜さくやは私だと…」

ん？女の人だつたんだな、探してたの

「いや…橘朔也たちばな せくや、という人なんです…」

え？いや…まさか…

「アンタのフルネームは？」

「十六夜咲夜いざよひ さくやですが？」

おおー！今時こんな間違い見た事ねえ！

「朔也と咲夜か…なるほど、奇遇としか言いようがないな…」

婚約でもなんでもすりゃ、完璧に分からなくなるな（↑フラグ）

「先輩、無駄にフラグ立てないで下さい、無駄ですから」

いや…お前は病院行けと…

「橘…？ああ、あの男ですか…確か地下に居ますが？」

「居たよ！本当に居たよ！一瞬佐野をどうやって殺すか真剣に悩んだけど居たよ！！」

■

地下にて、響き渡る幼き笑い声と

歌声（男声）

歌声（男声）

大切なことなので二回いいました

『ねえねえ！次の歌歌つてよ！』

『ハハハ、これで398曲目だぞ？まあいい、君が喜んでくれれば俺も嬉しいさ』

「とりあえず色々突っ込みたいけどな…とりあえず行こうか」

「待て、先輩、この先には恐らく悪魔の妹ことフランドール・スカ
ーレットが居るであろう、そして今のタイミングで突っ込んだら邪
魔すんなやゴルアアアア！ってことで塵になるかもしれんね」

「三位は…マズい…」

とりあえず少し様子見

『真夜中の鏡に自分を映したら

真実が見えると言うけど』

「駄目だ、駄目だ、どうしても今すぐ突っ込みたい」

「落ち着いてくれ先輩、命は粗末にする物じゃない」

『探した答えは変わり続けてく

生まれ変わるほど 強くなれる

辛味噌！（got to be strong!）

辛味噌！（got to be strong!）』

「もう限界だ、どちらにしろ俺は生き残る程度だから死なないし！」
突入

中に居る人物は、マイクもって歌う男とそれを楽しそうに見る薄い
黄色の髪の10才前後の少女、背中には木の枝のような物が突き出
ており、そこに何色かの結晶のような物が何個か釣り下がっている
「……シュールすぎる…ッ！！イクサウィングフォーム並に…ッ！
！」

「おお！マジかよ！生妹様だ！ちょ、ちょちょ、嬉しすぎて爆死す
る…！」

佐野は重度のロリコン、と

「橘さん！こんな所で一体何を…」

「睦月か…？睦月じゃないか…！ここで何やってる？」

「それはコツチの台詞ですよ…ダイヤナサ…橘さん」

「えつとね、サクヤ二号機はフランと遊んでるんだよ！」

二号機…、初号機はメイド長か

「ムッキ…睦月、剣崎に関する情報が分かった、奴はこの世界に存

在する」

「いや、それより橘さん、俺と一緒に行きましょうよ……」
やっぱり、そう来るよな

「…悪いな睦月、俺はここを離れられない…」

「ナゼエ…何故ですか!？」

「俺は、ここに来るまでは子供をいい物と思った事が無かった……
主に相川の所為でな」

「ああ…アイツは…ちよつと…」

…相川か、危険人物の一人として覚えておこう

「だが、俺は森で倒れた所を拾われて、この館に来た、そして初めて知ったよ、純粹無垢な笑みを」

なんか格好いい事いつてるな…

「本音は？」

「この料理マジ美味い、特に血の味が」

駄目だ、コイツ

「今までの料理を食べられたのはサクヤ二号機だけだよ？」

「確か…人間の血を料理した物だったよな…この館の料理…」

それ、食えるものじゃない

「しかも自分の分を食べ終わっても『これ食ってもいいかな?』って
言って他の人の分も食べちゃう」

それ、相当味覚ぶっ壊れてるよな

「あのスパゲッティも美味かったな…」

どうした物かな

「で、どうするんだ?睦月」

「…橘さんがそれが良いなら俺は別にいいですよ、でも…剣崎さんの
居場所を教えてくださいませんか?」

「ああ、剣崎はな…今妖怪の山に籠っているそうだが、理由は知らないが…
悪い噂が一つだけある」

「悪い噂…?」

「剣崎が緑と黒のカミキリムシのような奇妙な姿…つまりジョーカ

「へ変わる所を見た奴が居るらしい」

「そんな…！？だってジョーカーはアイツ一人じゃ…」

「俺も最初はそう思ったさ、だが…考えてみる、何故ジョーカーが最後の一人になった時に起こる世界の崩壊が収まった？そして剣崎は何故姿を消した？相川は旅に出た、という、…そこから俺は一つの結論を打ち出した」

「まさか…そんな冗談ですよ？橘さん…」

「剣崎は…ジョーカーになった」

「何言ってるんですか！？人間がアンデットになれるはずが無いじゃないですか…！！」

「考えてみる、剣崎はアンデットと異常なほどの融合値数を示したんだ、そして、13体のアンデットと一体化する、計算外のキングフォーム、まさに切り札^{ジョーカー}だろう、剣崎は」

「じゃあ…13体のアンデットと完全に一体化してジョーカーになったって言うんですか！？」

「恐らく、だがな…」

「ゴメン、シリアスな所ゴメン、何言ってるのか分からない…」

「で、どうするんだ？その、妖怪の山、とか言う所、行くのか？」

「あそこはよそ者への風当たり強いからなあー、追い返されそうだし…」

「そついですねえ…私にはあの山の天狗と認識がありますし、ある程度融通は効くかもしれませんがねえ…」

「ああ、それは名案…って！」

「先程の医者さんじゃないっすか！！何時の間に後ろに回ってるの！？」

「いえ、楽しそうな声が聞こえた物ですから、私は井坂深紅郎、と言います」

井坂先生ですか、ハハハ、一瞬ミサ…いや、なんでもない

「天狗との面識があるって…まさか…鴉天狗…？」

「ほう…彼女を知っているとは…そうです、文君ですよ」

「何処に居るのか教えてくれませんかねえ！？今すぐ首の骨折らないと…ッ！！」

「落ちて佐野！！あの人はマスコミ界に新風を起こす人物だぞ？！是非OREジャーナルにお持ち帰りいっ！したいんだ！殺されたら困る！」

大牙さん…何処行つた？

『いやな…俺の部下に俺の許嫁いいなすけを殺した奴が居てだな…』

『あなたも部下に苦勞しているのねえ…同情するわ』

…あれ？誰？

「大牙さん…っ！！れみりやとお話してらっしゃる…！！羨ましい…！！」

…まあ、大牙さんは楽しくやってるようだし…

「しかし…彼女が言っていた館に連れ込まれた奇妙な男を捜していましたが…あまりネタになりそうではありませんね…ふむ、伝えなくてよいでしょう…」

「パシリだったんすか？」

「ええ、彼女単体ではこの館は多少無理がある、という事ですので…なんて優しいのだろう…ええ人やわ…」

「まったく関係ないんですけど、お二人（橘、井坂）の能力は？」

本当に関係ないな、佐野

「私は『天候を操る程度の能力』ですね」

お天気お兄さん

「俺は『全てを打ち抜く程度の能力』だな、使った事ないが」

ゴノレゴ13…いや、なんでもない

とりあえず、この剣崎一真を中心として話が展開してしまった事により、鳴滝が忘れ去られたのは言うまでも無い

東方編 6 サクヤ（後書き）

浅倉、秋山、北岡はどうしたって……しばらくしたら出てきますよ、
恐らく

………東條？すみません聞いた事g（ry

東方編7 追いついた四人（前書き）

某新聞にて

儀式的猟奇殺人、遂に幕を閉じるか

ここ一週間にかけて大量に発生していた儀式的猟奇殺人事件
まず初めに浅倉美波さん（24）北岡愛子さん（24）秋山優子さ
ん（24）の三人が殺害され、その後通り魔的に計49人の一般市
民が殺害された、殺害方法は全て猟奇的、かつ儀式的な物で、まず
被害者の内臓を全て繰り抜き、それを全て被害者の遺体の周りに決
められた順番で並べ、遺体の額にアルファベット文字を刻む、とい
う物である。

この事件の犯人は秋山蓮（24）北岡秀一（24）浅倉威（24）
東條悟（24）、この内、三人は最初の被害者と夫婦、他者から見
ると、どれも理想的な家庭で喧嘩の様子などは全く無かったそうだが、
最終的に自ら焼死した為、事件の動機は不明である

しかし、遺体の額に刻まれたアルファベットを殺害された順番に並
べると

To meet the going friend again
we to the utopia of the fantasy

（幻想の理想郷へ我々は行く 友に再会するため）

さらに、加害者側の最後の焼死した場所には自分達の血文字で

Human race recall it

（人類よ 思い出せ）

という文字が残っていた、専門学者は何か宗教的な物だと――

東方編7 追いついた四人

サクヤ騒動の翌日、起きてみれば大牙さんと、睦月は消えていた、なんでも二人だけで行くとか…

置手紙に書いてあったのだ、大牙さんは妖怪の山にどちらにしろ用があったそうなので同行するとか

水臭いよなあ… ってか、やること無いから行こうかと思ったのにな…
鳴滝はあれ以降現れないし、もしかしたらもう死んでるかもしれない、とりあえず佐野との今後の予定

「まず最初に、何時までもこの寺小屋にお世話になる訳にはいかな
い」

「んー、じゃあ、紅魔館の住人を追い出して貰いますか？」

「無理、絶対無理、特に地下にいる二人が、絶対に貫く者とありとあらゆる物を破壊する者だぜ？最強クラスだろ」

「っていうか、あの二人、少々気がふれているような気が… 辛味噌！とか叫ぶしね…」

「じゃあ… ううん… 野宿？ いや、忘れてください、先輩には（性的な意味で）食われ、鴉天狗にも（ネタにされる的な意味で）食われる…」

その時だ、まさに緊迫したふいんき（↑なぜか変換できない）の部屋に来客者が現れた… いや、チラッと外を見たら居ただけど…

見たことがある四人が立って居たんだ、

秋山蓮

北岡秀一

浅倉威

… 誰？ あ、東條悟

「うおおおい！！ 凄い久しぶりじゃないか！？ お前等！ 遂に幻想入りか！！」

久々の友人たちの顔に思わず大声を上げてしまう

「ハハハ、久しぶりだな、城戸…」

「ふうん、見ないうちに更に馬鹿になっただんじゃない？城戸…」

「空気が美味しい、ところでお前等、この草く「お前はさつさと性格直せ」…城戸…」

「妖怪を倒せば英「英雄」つてのは、英雄になろうとした時点で失格なのよね」…城戸オー！！…」

え？最後の俺？北岡の間違いだろう

「いやあ、本当に久しぶりだな、あ、コイツ、覚えてるか？佐野だよ、佐野満」

「先輩が結構出てきましたねえ…いや、別にいいですけど…」

何故だろう、この四人、顔は笑っているのに目が笑っていないような…？

「ハハ…城戸、一番最初にやらなければいけない事がある」

「ん？何？」

「…「お前を殺す」…」

「待て、脈絡が無い！説明求む」

いきなり殺すて、まあ、こいつ等ならありえないけど…

「まあ、一言で表せば…」

「…「テメエだけ美女に囲まれていい思いしやがって！！幻想郷の女性はみんなの嫁だろ！？」…」

「ちょ、理」

「問答無用！轟けえ！俺の右手！」

まだこいつ等バカテスの世界のノリが抜けていない…ッ！！

■

たすかったぜ！このまましんだんじゃ かつこうわるいまま れきしにのこっちゃうからな！

…生き延びたぜ、なんとかな…

「で、俺としてはお前達の能力が気になるんだが」
蓮が、俺と佐野に言う

「ん、俺は『生き残る程度の能力』…まあ、そのまんま何ただけどな、

スperlカードには何故かアレなのが多いんだ、『降り注ぐ希望』とか、広範囲に攻撃するのがさ」

次 佐野

「俺は『勝ち続ける程度の能力』です、チートっぽいかもしれませんが、無意識で発動するんで、いい具合にパシられるんですよ…あ、スperlカードは主に弾同士が打つかって爆発するとか、そういうのが多いですね」

こちらにとっても都合がいい能力です

「さて、お前等の能力教えてもらおうか…？」

次 蓮

「俺はだな『存在の濃度を操る程度の能力』だ、まあ、細かい事は飛ばすが、分身やら、ステルスやら結構用途は広いぞ？」
なにそのストーカー専用能力

次 北岡

「俺はねえ『白黒を反転させる程度の能力』ちょっと山田に喧嘩売ってくる」

逝ってこい、テメエは地獄行き確定だ

次 浅倉

「俺は『感覚を操る程度の能力』、範囲は俺と触れた物と弾幕だ、これでなあ…痛みの感覚を倍増させると…」

なんというドM能力…ッ！！でも感覚って事は、身体強化もできるのか…

次 …あれ？誰も居ない…あ、東條

「僕は『英雄程度の能力』、そのままでよ？その人物個人の英雄のイメージが僕的能力に反映されるんだ」

ベルデ…？いや、なんでもない…それは英雄が世界を壊す人物だと思っている奴だと、フランドールになるって事か？え？違う？

以上

■ 青年説明中…

「なるほど、次の行動に困っている、と…馬鹿野郎がッ！！折角幻

想郷に来たんだ！己の好きなキャラクターを拝まなくてどうするッ！」

あれ…？もしかして…東方の知識に疎いの俺だけ…？Oh…

「じゃあ、スキマツアー、違う、幻想郷ツアーか、何処行くよ？」

「まあ、ここから近くて主要人物の溜まり場だと…博麗神社あたりじゃないか？」

あそこは…嫌な思い出しか…

■青年達移動中…

再び神社、目に入るもの

真っ白な服を着た、まるで貴族のようなイメージの青年…が、神社を掃除している場面

和服に下駄、左手に豆腐の入ったボウルを持って、右手を掲げてる青年

隅の方でヤンキー座りをしている兄弟のy（ry

「最後変わってねえよ！！」

以前にもこんな事が…

『神代：お前は何をやってるんだ？』

『ふん、天道、お前には関係無い、なんせ、俺は神社の掃除でも頂点に立つ男だからな！』

『天道オオオッツツ！！俺だアアア！！結婚してくれエエエ！！』

『兄貴！抜け駆けは卑怯だ！！天道！まずは俺と友達になってくれ！！』

『地獄兄弟か…今度飯を作つてやるから叫ぶのを止める』

『『デレた！！天道がデレた！！ヒヤッハーツ！！』』

以前より酷くなってる！！

「オイ、マジかよ、夢ならさm（ry」

『あら、また掃除してたのね…掃除はもういいから賽銭箱にお賽銭を入れるか、変人を片付けて頂戴』

働いてる奴に賽銭をねだるってどうよ、博麗の巫女さんよ…

「おおッ！！あれが生の霊夢さんか…！駄目だ、もう死んでもいい」

蓮、お前絶対これが見たかっただけだろ

『了解した、さて…手持ち金は……しまった、もう無いじゃないかならば変人を片付けるしか…変人？ああ、天道か』

『残念だが外れた、当たりはあちらの地獄兄弟だ』

『兄貴…！！見た？！今のが霊夢さんだよ…！！』

『あの女…目の奥に地獄が見えた…是非兄弟に加えて長女に…』

『霊夢は渡さん…！！特にお前等には…！！』

『偶然だな、天道、俺も同じ事を考えていた所だ、レ・イー（→）

ム（←）は渡さん…！！』

駄目だ、早く逃げなくては…！！

『上等だ…！！行くぞ相棒！！俺の能力、『地獄へ落す程度の能力』…舐めるなよ』

『もちろんだよ兄貴…！！俺の能力『太陽を汚す程度の能力』侮るなよ…！』

『フツ…お前達は草陰で大人しくしている、俺の能力…『天の道を歩み続ける程度の能力』の前では無力だ…！！』

『俺の能力は『全てにおいて頂点に立つ程度の能力』お前達は地べたを這い蹲っている』

今にも戦いが始まりそうだな…

『今…俺を笑ったな……！！地獄『枯れ果てた涙』…！！』

『さあ！オシオキの時間だ！！地獄『癒えぬ傷跡』…！！』

『大人しくしていればいい物を…天道『光を超える速度』…！！』

『何せ、俺は弾幕ごっこにおいても頂点に立つ男だからな…！聖剣

『デイスカリバー』…！！』

駄目だこいつ等、早く何とかしないと…いや、何とかなくてもいい…逃げよう

■

「で、魂魄妖夢…に会いたいね、浅倉は」

「みよん」

「駄目だコイツ…」

「確か、俺が佐野から聞いた話だと結界があるんじゃないか？」

「俺の能力…『存在の濃度を操る程度の能力』…甘く見ないほうがいい…いや、飛び越えられるんだけどな」

如何なる理由で白玉楼へ進入…まさか生きているうちに冥界に来るとは思わなかったぜ…

「お前等、気をつけるよ、館に近づいただけで斬られるから」

「問答無用すぎるッ…！」

徒歩移動、徒歩、徒歩、徒歩

到着、目撃したもの、ワイルド（Not坂本）な男、いや、アレはワイルドなんて物じゃない
言うなれば、

【肉食恐竜】

「アレが噂の妖夢…」

「違うからな！？城戸、違うからな！？あっちの女の子が妖夢だからな！？」

おっと、マジか…

『幽霊つてのはどんな味がするんだろうな…？』

『さあ？でも死のスパイスは効いてると思うわよ？』

『まあいい、お前等全員俺が食ってやるよ』

「かなり危ない発言してない？」

「食料的な意味で、だと願うか、城戸」

しかし、これは助けに入ったほうがいいのだろうか？

『待て、待てイ…！』

出たよ（笑）

『その小娘はワシが相手をしよう！その刀はワシが貰い受けるッ！』

雰囲気ブレイカー

『また、みよんな輩が…』

「出たア…ッ！！妖夢さんによる【みよん】だ…ッ！！もう死んで

もういいーッ!」

死ねばいいのに、本当に、浅倉死ねばいいのに
そうこうしているうちに、緑に白い髭という変わった狼らしき動物
が走っていき

『アオオオーッ!』

遠吠えをする、すると何処からか、四本腕の男がグアハハハ、と低い
笑い声を上げながら飛んでくる
そして、見事に庭の池に突入した

「水没だど!?まさか…あの程」

「関係ないからな!」

すると、何時の間にか池から奇妙な男が這い上がってくる

一体、誰だと…

『これなるはイヴァリースいちの強者、その名も剣豪ギルガメッシュ。
ユ。』

名高い武器を求めてやまず、西へ東へさすらう男。ウワサのアイツ
が、ここに見参!

お前の武器をいただくからな。

ゆくぞ、エンキドゥ!我が心の友よ!」

ギルガメッシュ…?FF-5の?

『いざ、勝負!』

「あれは…FF12のギルガメッシュ!何故ここに…!?まあいい、
お前等、加勢するぞ!」

鳴滝か…?

東方編 8 晴 騒音 山にて（前書き）

この話は大量の井坂分を含んでいます、変態医者、またはアブノーマルな医者が受け付けられない人は即刻戻るを押してください
尚、症状が出た場合は下記の病院へと向かってください

井坂医院 TEL: 0 2 9 4 - ■ ■

スマートブレイン医療機関 TEL: 0 2 9 4 - 5

5 - 5 9 1 3

東方編 8 晴 騒音 山にて

私は、生前は医者をやっていました、ただし、ドーパント専門のね
：しかし、私は実験中に一つの家族を殺してしまいます

照井一家

しかし、息子だけは残った、そして私に牙を向く税金泥棒の警察
そして、彼は私を超えた、遂に彼に敗北した

敗北は初めてではない

しかし、私は死んだ、自分の契約した悪魔に裏切られ、体を蝕まれ、
引きちぎられ

：だが、今では…

「剣崎さあん！！剣崎さあん！！何処ですか！？ついこの間見つけ
た剣崎さん出演のゲイＡＶ広瀬さんに見せますよ！？」

人助けをしている、間接的に、ですがね

私だって最初から悪魔に虜にされるほど捻じ曲がった人間ではなく、
人々を助け、喜ぶ親の顔、子供の笑顔、それらを見て幸せを感じて
いました

今でも、そうかもしれない

この、知人のために妖怪の山に足を踏み込む、青年を見て、少なく
とも私は素直に『頑張れ』と言える

：だがッ！！

「ところで——文君、昨日冷蔵庫に入れて置いたはずのカスター
ドプリンが無かったのですが？知りませんか？」

「し、知りませんねえ…大体私は甘い物は嫌いですし」

「ところで、この写真を見てくれ、こいつをどう思う？私はどう見
ても冷蔵庫の中を漁っている文君にしか見えないのですが」

「大体！中年の変態医者がプリン頬張って喜ぶのが悪いんだ！」

「変態とは聞き捨てられませんか！変態という名の紳士ですから！
私は！そして！夜中の夜三時に君の耳元でわざと音を立てながら力

スタードプリンを食するのが唯一の楽しみだったのに……！許せん……ッ！

「変態ですよネ！？どう考えても変態しかやりませんから！それ！」
「何を言ってるんだ、文君、この行動は外の世界では一つの愛情表現として使われているのですよ」

「睡眠妨害もいい所ですよ！間にちクチュクチュク鬱陶しいんですよ！！昨日なんて三時間も続きましたからね！いざ寝ようかと思ったら朝ですよ！？アンタ何時寝てんだ！？っていうか食べるのに時間かけすぎだろう！」

「睡眠妨害とは……ッ！朝六時半に新聞を届け、大声で叫ぶ君にだけは言われたくないな……ッ！」

「何おう！この変態医者！」
「黙れ！ガセネタ記者が！」

……私達はまるで新婚夫婦のように仲がいいんですよ？ええ、本当に私達は今、この山である人物を探しています、ちなみに先程、大牙という人物が河童についていったため、今では三人です

ええと……「サガークは俺の嫁だ、決して渡さん、そして今からサガークを所持するらしい人物に会いに行く、ここで分かれよう」とか言っていましたね、何の事だか分かりかねますがね

「しかし見当たりませんねえ……今頃何処かで首でも吊ってるんじゃないですか？」

「射命丸さん……縁起の悪いこと言わないで下さい……本当かも知れないから」

「ところで文君、気になったのだが……君のような天狗、とは鳥とも人間ともいえない中間だろう？ならば出産するのは、卵なのか、胎児なのか、教えてくれないか？」

「なんていう質問をするんですか！知りませんよ！妖怪は基本子孫は残しませんから！」

「ふむ、まだ未開の地、という事ですか……ならば今夜あたり実験してみましようか？」

「頼みますから死んでください、首吊るなりして」

なんという事だ…首を吊れ、と言われた…あれは死体が酷い状況になるからお勧めできないというのに…

『黙れ剣崎！フランはオリドボドターツ！！』

『ウエツ！ワアツタオ！タディヤーナザアン！オンドウルルラギツタンデイスカーツ！』

「剣崎さんだ！あの声と喋り方は間違いなく剣崎さんだ！」

どうやら見つかったようですね

「だ、そうですね？行きましよう井坂さん」

そうですね…だが

「ここからは彼達の問題ですよ、私達が首を突っ込むべきではありません」

そういつて、文君の翼を驚掴みにする

「ひゃんっ！だから翼掴まないで下さいっ！」

彼女のウィークポイントが翼なのは、オジサンとミンナのヒミツだよ
「頑張つて欲しい物ですね…睦月…君、でしたか…一度深く傷ついた人間を治すのは難しいですが、貴方にならきつと…」

「格好付けている所悪いんですけど…人の翼を撫で回しながらそんな事言っても格好良くなっ…！んあっ！や、やめてくださいっ！」

「そうだ、歌を送ろう、彼に…」

文君が止めると言った時は大抵照れ隠しなので聞こえないふりして続ける、これが鉄則です

■

俺が走つて向かうと、そこには対峙する橘さんと剣崎さんが…

一体何が…?!

「おお、睦月か！頼む、こちらに加勢してくれ！」

「睦月！こつちだ！コツチに加勢するんだ！」

「どちらにもしませんよ！ってか何で橘さんはこんな所に居るんですか！？」

「ああ、いやな、某新聞の『紅魔館に口リコン出現！』という見出

しが気に入らなかったのでクレームを言いに来た、そしたら剣崎が『フランちゃんに会わせてくれ』、なんて言うから口論になっただけだ」

何故、それで口論になったんですか…

「しかし剣崎さん…フランちゃんになんか会ってどうするんですか…？」

「自分を壊してもらうんだろ、切（ジョー）り札^カは死ねないからな」

橘さんの一言に、剣崎さんの顔が暗くなる…まさか、本当に…

「剣崎さん…今の話…」

「…八割方当たってるよ、俺はジョーカーだ、だから旅に出た、が、ここに落とされた」

「でも…！？何故壊される必要が…！？」

「最後の一人になる前に、俺、つまり最後の二匹のうち一匹が、死んだら？アンデットには絶対に有り得ないはずの死を迎えたら？そう思ってたただけさ…」

「…何故、そんな事…」

「俺はジョーカーだ、化け物なんだよ、睦月、俺がお前達と一緒に居るわけには行かないだろ？だから——」

「さようなら、だ」

剣崎さんは最高の笑顔で、そういう…コイツ…！

思ったときには手が出ていた、そして、剣崎さんの顔を殴っていた「つてえ！？睦月！何」

「分かってねえよ！剣崎さん！俺は、いや、俺達は『人間』の剣崎さんに帰ってきて欲しいんじゃない！俺達は、『剣崎一真』に帰って来欲しいんだ！たとえジョーカーだろうがオルフェノクだろうが関係ないんですよ！」

「睦月…」

そこで空気を読まない第三者が現れる

「いいねえ、こういうの、青春っぽくて……僕は嫌いだけど！」

『KAMEN RYDE DEND!』

「!誰だ!？」

振り向くほうには、シアンブルーの銃を片手に持った仮面ライダーが居た!?!?誰なんだ一体!?!?

「まあ、通りすがりの仮面ライダーって所かな、とりあえず、ジョーカーの君、大人しく封印されてくれたまえ、ジョーカーのカードなんてお宝の中のお宝だしね」

そういいながらカードを三枚銃の中に入れる

『KAMEN RYDE SAIGA! KAIZA! DELT E!』

そして、シアンブルーのライダーの前に、白の体に青のライン、そして、紫の大きな目を持つライダー、黒い体に黄色のライン、そして、また大きな紫の目を持つライダー、そして、灰色のボディに白いライン、オレンジの大きな目を持つライダー、と三人のライダーが現れる

「それじゃあ、頑張つてね」

『ATTACK RYDE INVISIBLE!』

シアンブルーのライダーは消える

「仕方が無い!睦月、剣崎!行くぞ!」

「言われなくても行きますよ!橘さん!」

二人は、ポケットからバツクルを取り出し、各々のカードを入れ、変身の準備に入る、俺も遅れないように、準備をする

「変身!」

『TURN UP!』

掛け声とともに、バツクルの引き金を引くと、剣崎さんと、橘さんの前に青いオリハルコンゲートが開き、二人はそれに向かって走っていく

『OPEN UP!』

俺は閉じていたバツクルを開くと、金色のオリハルコンゲートが開き、俺に向かってくる

「It's Showtime!」

白い体に青いラインのライダーが両手を肩の高さまで上げ、言う

「俺を好きにならない奴は邪魔なんだよ……! 全て!」

「ハハハッ! 感じるぞお……! デルタの力が俺に漲るのをッ!」

久しぶりにライダーが三人揃った時だった

東方編 8 更に闘う者達（前書き）

…フラジールでも幻想入りさせるかな………<（自）

穴>たとえ読んでくれる人がなくなつていいじゃない、どうせ自己満足なんだろう？話しても仕方がない

幻想入りしたくない？<（自）

穴>するんだつたら幻想最速の名は貰いますよ、振り切るぜ！

………<（自）

興>遅かったじゃないか…

穴>ギャアアアアッ！

本編とは関係ありません、どうせ次回作なんて無いんだ、あつたとしても…

ただし、フラジール、てめえは駄目だ

東方編 8 更に闘う者達

只今、白玉楼にて戦闘現場を発見したために加勢

「助けに来た！必要無いかもしれないけど」

「おのれデイクイドオオ！貴様によつて十周年は破壊されてしまつた！」

佐野は一体何を叫んでいるんだぜ？時々分からなくなるぜ？

「引つかかったか…」

「引つかかったわね」

…、落ち着こう、とりあえず先程の剣持つてないほうの人物…たしか幽々子さん…だったっけ？

が、俺が全部喰つてやるよ（性的な意味で）…の危ない人と同じ事を言つてこちらを見ている…

Oh、ドッキリか…いや、違いますよね

「こつとも簡単に引つかかるとは…みよんな気分ですね…というか、お前が上の立場に居るのが気に食わないぞ？」

「し、仕事ですから、たまたまあなたがソツチに擬態しただけじゃないですか！イチヤモンつけないで下さいよ！」

…えーつと…妖夢…だっけ？も首班？…いや、幼夢だっけ…？

「お、おーい、蓮ー、北岡ー、浅倉ー、一体どういう事なんだ…」

「…よくここまで来てくれた、残念だが秋山、北岡、浅倉など最初から居ない…騙して悪いが仕事なんでな、死んでもらおう」「…」

…？ここまで来るといよいよおかしいぞ…？

「ムウ…これは危険な香りしかせんのお…！エンキドウ！戦略的撤退だ！ついでに飲み屋に行くぞ！」

ちよ、四本腕が逃げた！？アイツは実行犯ではない…！？

「城戸…まだ分からないのか？俺達は人間^{ホンモノ}ではない偽者^{ワーム}だ、そしてお前等はハメられたんだ、確実に消すように」

「じよ…冗談じゃ…」

「冗談な物か、愚かなお前にはレクイエムは必要無いな…」

妖夢…？が、バキバキ、という音と共に白いシオマネキを彷彿とさせる異形の姿に

幽々子さん…？も金色のザリガニを彷彿とさせる異形の姿に

北岡、連、浅倉は紫のカブトガニを彷彿とさせる異形の姿に

「全員人外ッ！？」

「おおおお、先輩やバイっすよ…こいつ等…随分前に聞いた事があるんですけどね…ワーム、って言うて高速移動が得意だとか…」

「おいおい、俺を忘れてもらっちゃあ、困る、変、身」

肉食恐竜の人が、何処からかベルトを取り出し、ベルトの正面にパスポートのような物が丁度来るように落す

『GAOU FORM!』

機械音声を合図に、男の周りを鉄片が飛び、装着され、銅色のティラノサウルスのような姿の仮面ライダーに

「佐野、一つ聞かせてくれ、デッキ…持ってたっけ？」

「答えは、ノー、だ」

ふざけている場合じゃないっての！

「待てよ！幻想郷ってこんな所なのか？！」

「違うな、幻想郷は既に壊滅している、今じゃ八割方、ワーム、ミラーモンスター、オルフェノク、この三つの手によって幻想郷は終わった」

蓮だった者が話す

「巫女も、まあ…スキマ妖怪は知らんが、【龍】だつて今何十ものサバトと一体の14【フォーティン】が攻撃している、後は結界に穴を開ければ、外で待機している一万人のライオトルーパーが攻め入り、THE・ENDって事よ」

北岡だった者が話す

「おい…なんでそんな事…！？」

「首謀者は神崎だ、神崎士郎な」

浅倉だった者が話す

『まあ、そういう事だ、途中鳴滝という邪魔が入ったが…まあ、別に大丈夫だろう』

水溜りに映る神崎

「どう…いうことだよ神崎！なんでこんな…！？」

『オリジナル神崎との契約だよ、神崎優衣を20以降も生かす、というな…そのためには多数の犠牲が必要だ、で、考えたんだ、まず最初に簡単に世界を構築し、幻想郷が作成されるまで待ち、そして、一人を幻想入りさせ、そいつを基点に作戦を展開し、妖怪、神、人間、皆殺し、そうして優衣は完全に人間となり、契約達成、俺は自由の身、と、言う具合だ』

「歪んでるよ…！お前は…！」

『好きなだけ言ってくれ、どの道、あとお前と外来人の井坂とか言う奴と、射命丸を害して終わり、パーフェクトミッション完全任務って事だ』

…変わってないじゃないか、何もかも、バカテスの世界とか言ってるさ、バカやって、何か変わったかと思っただけ、何も変わってないじゃないか？俺は何やってるんだ？

ただ、一つだけ変わった物があるとすれば――

『ごめん、お兄ちゃん、あれだ、契約のために死んでくれないかな？』

神崎優衣

水溜りの中だからよく分からないが、優衣ちゃんが右手から光線を放ったように見えた

『おにいちゃん神崎士郎が道を間違わないようにするのが私ほんものと私の契約、これじゃあ…道を間違ったとしかいえないよねえ？』

確かに死んだ、神崎は死んだ、でも他の奴等が生きているんだ、このワーム、それに仮面ライダー

そして何より、俺は【死ねない】生き残らなければいけないからずっと、この地獄で足掻くしかない

他の奴等は普通に生活するかも知れない
だけど…俺と、佐野は救われない、絶対に…

■ 「ところで文君、そろそろですよ——」

「この幻想郷は終わりを告げています、結界を破るなりして、外へ向かいましょう」

「…覚悟は昨日決めましたよ、もう、好きにしてください、貴方に任せますよ」

そんな事を言いながら歩く文君と私、まあ、この先では鳴滝君が待っていますしね…

…まだ、私でも頼ってくれる人物が居るとは…世の中捨てた物じゃありませんね…

「来たか、Wのメモリの持ち主」

「今ではもう普通の人間ですよ、鳴滝君…」

「そういわずに、…八雲紫の所在地は分かったか？」

「ええ、探ってみましたところ…自害しているようですね」

「やはり…この世界は滅びる運命だったか…」

「【龍騎に延長戦があったという仮定の世界】、生き延びて、生き延びて、結局地獄とは…非情な神も居た物ですね…」

文君は若干付いて来れていませんが、まあ、いいでしょうかね

「で、何処に招待してくれるのですかね？貴方は」

「…【ガイアメモリが存在しないという仮定の世界】だ、射命丸文と幸せな時間を過ごすがいい」

「何よりの幸せですよ、それは…」

灰色の壁、最後に見えたのは化け物共をひたすら焼き払う白髪の少女「…まさに、地獄…だ」

いずれ、世界を救えるほどの力を持ったら、救いに来ますかね、この世界を

【ある人物は言った、不死ほど辛い物は無いと、親しき物は死に、地獄に落されれば永遠に地獄、不死の人物は…呪われている】

俺は、もう疲れた、疲れた、どうやればこの世界から逃げられるか？

そうだ、鏡だ、鏡に逃げよう

赤き龍を黒き邪龍に変え

聖なる赤き炎を邪なる青き炎に変え

生き残る物から全てを焼き尽くす物に変え

幻想に取り付く害虫を焼き尽くし

鏡の中を彷徨い

何れ出会うであろう、もう一人の自分と融合し

代わりに現世で再び生活するため

【龍騎は龍牙^{リュウガ}となる】

東方編 8 更に闘う者達（後書き）

…お疲れ様でした、僕はもう懲りました、自分の文才の無さにはガツカリです

いかなる理由で次の作品は無いです、望む人も居ないでしょうけど…
本当に駄目だ…この人は…ッ！！

GOOD END が無いッ！！

<http://ncode.syosetu.com/n80002>

1 /

…あれ？手が勝手に動いていたよ？
まるで成長していない…！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1368/>

東方仮面舞踏会

2010年10月13日15時36分発行